

文化財調査出土遺物仮収納保管業務

昭和62年度発掘調査概要

1988. 3

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

文化財調査出土遺物仮収納保管業務

昭和62年度発掘調査概要

1988. 3

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

序

埋蔵文化財は私たちの祖先が営んだ生活の痕跡であり、大地に残された歴史資料であります。

この中には、数千年もさかのぼる縄文時代から数百年前の江戸時代のものなど、いろいろな時代に、さまざまに生きた人たちの足跡が残されています。獣を追い求めた縄文人、新しく農耕をとりいれた弥生人、古墳を築いた豪族など、埋蔵文化財はあらゆる時代の歴史をさぐる不可欠の資料といえます。

現代は、私たちの祖先の歩んだ歴史の上に立脚しており、この歴史を認識することは、私たちの日常生活をより豊かにするものと思います。しかし、埋蔵文化財調査の成果を直ちに咀嚼して現在の生活に役立てることはそう容易な事ではありません。こうした調査や研究を地道に積み重ねることによってはじめて平面的にも立体的にもその地域の歴史を再構成することができるのです。

ここに、昭和62年度水資源開発公団事業に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたのでご高覧に供したいと思います。この一書が私たちの生活に少しでも役だつ礎となれば幸甚です。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々ならびに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和63年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田志農夫

例 言

1. 本書は、文化財調査出土遺物仮収納保管業務に係る埋蔵文化財の発掘調査概要である。
2. 本業務は、水資源開発公団琵琶湖開発建設部からの依頼を受け、滋賀県教育委員会を主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施機関となって行った。
3. 本書には、昭和62年度に実施した11遺跡25ヵ所を収載した。
4. 本業務の事務局は次の通りである。

滋賀県教育委員会

(財) 滋賀県文化財保護協会

文化財保護課長 服 部 正 理 事 長 吉 崎 貞 一

課 長 補 佐 田 口 宇 一 郎 事 務 局 長 中 島 良 一

埋蔵文化財係長 林 博 通 埋蔵文化財課長 近 藤 滋

管理係主任主事 山 出 隆 調 査 一 係 長 田 中 勝 弘

総 務 課 長 山 下 弘

〃 主任主事 松 本 暢 弘

5. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。

目 次

序

例 言

1. 赤野井湾浚渫 (B) 赤野井湾遺跡	2
2. 赤野井湾浚渫 (D) 赤野井湾遺跡	4
3. 湖岸堤赤野井北 (その1) 赤野井湾遺跡	6
4. 湖岸堤赤野井南 (その1) 赤野井湾遺跡	8
5. 下物その2 (A) 烏丸崎遺跡	10
6. 下物その2 (烏丸) 烏丸崎遺跡	12
7. 下物その2 (D) 烏丸崎遺跡	16
8. 常盤農水 烏丸崎遺跡	18
9. 津田江その1 (水門) 津田江湖底遺跡	20
10. 湖岸堤津田江 (その1) 津田江湖底遺跡	26
11. 湖岸堤津田江 (その1-1) 津田江湖底遺跡	28
12. 津田江その2 (水門) 外 津田江湖底遺跡	30
13. 湖岸堤津田江 (その2) 津田江湖底遺跡	32
14. 津田江給水施設外 津田江湖底遺跡	34
15. 津田江航路浚渫 津田江湖底遺跡	36
16. 新守山川その1・その2・その2-1 小津浜遺跡	38
17. 新守山川その2-2 小津浜遺跡	50
18. 湖岸堤志那北 (その1) 志那湖底遺跡	52
19. 北山田上水 北山田湖底遺跡	54
20. 針江大川舟溜航路浚渫 針江浜遺跡	56
21. 大溝漁港航路浚渫 大溝湖底遺跡	58
22. 唐崎マリナー 唐崎遺跡	60
23. 南湖航路浚渫 粟津湖底遺跡	62
24. 今西舟溜航路浚渫 延勝寺湖底遺跡	64
25. 今西舟溜航路浚渫 (その2) 延勝寺湖底遺跡	66

挿 図 目 次

図 1	湖南・湖東地区関係調査地位置図	1
図 2	赤野井湾浚渫（B）調査位置図	2
図 3	赤野井湾浚渫（B）平面図及び土層断面図	3
図 4	赤野井湾浚渫（B）出土土器拓影	3
図 5	赤野井湾浚渫（D）トレンチ位置図	4
図 6	赤野井湾浚渫（D）検出状況図	4
図 7	赤野井湾浚渫（D）土層断面図	5
図 8	湖岸堤赤野井北（その1）調査位置図	6
図 9	湖岸堤赤野井北（その1）トレンチ位置図	7
図 10	湖岸堤赤野井北（その1）土層状況図	7
図 11	湖岸堤赤野井南（その1）トレンチ位置図	9
図 12	湖岸堤赤野井南（その1）遺構全体図	9
図 13	湖岸堤赤野井南（その1）基本土層図	9
図 14	下物その2（A）トレンチ位置図	11
図 15	下物その2（A）遺構全体図	11
図 16	下物その2（A）基本土層図	11
図 17	下物その2（烏丸）遺跡位置図及びトレンチ位置図	13
図 18	下物その2（烏丸）遺構平面図及び土層柱状図	14
図 19	下物その2（烏丸）2号周溝墓木棺実測図	14
図 20	下物その2（D）トレンチ位置図	16
図 21	下物その2（D）検出状況図	17
図 22	下物その2（D）土層断面図	17
図 23	常盤農水 調査位置図	18
図 24	常盤農水 トレンチ位置図	19
図 25	常盤農水 遺構図及び土層柱状図	19
図 26	津田江その1（水門）トレンチ位置図	20
図 27	津田江その1（水門）水門部全体図	21
図 28	津田江その1（水門）水門部土層断面図	21

図29	津田江その1 (水門) 水門部遺構面地形測量図	22
図30	津田江その1 (水門) 湖岸堤部A区検出状況図及び土層断面図	23
図31	津田江その1 (水門) 湖岸堤部B区検出状況図及び土層断面図	24
図32	湖岸堤津田江 (その1) 土層断面図 (1)	26
図33	湖岸堤津田江 (その1) 土層断面図 (2)	26
図34	湖岸堤津田江 (その1) 全体図	27
図35	湖岸堤津田江 (その1-1) 出土遺物分布図	28
図36	湖岸堤津田江 (その1-1) 東壁土層断面図	29
図37	湖岸堤津田江 (その1-1) 遺構・トレンチ位置図	29
図38	津田江その2 (水門) 外 トレンチ位置図	30
図39	津田江その2 (水門) 外 遺構図	31
図40	津田江その2 (水門) 外 Cトレンチ南側断面図	31
図41	湖岸堤津田江 (その2) トレンチ位置図	32
図42	湖岸堤津田江 (その2) 遺構図	33
図43	湖岸堤津田江 (その2) Cトレンチ西側断面図	33
図44	津田江給水施設外 トレンチ位置図	34
図45	津田江給水施設外 土器検出状況図	35
図46	津田江給水施設外 落ち込み部基本層位	35
図47	津田江航路浚渫 トレンチ位置図及び土層柱状図	37
図48	新守山川 遺跡分布図	39
図49	新守山川 調査区位置図	40
図50	新守山川 遺構平面図 (1)	42
図51	新守山川 遺構平面図 (2)	43
図52	新守山川 土層断面図 (部分)	44
図53	新守山川 SX1・SD6・SD11土層断面図	44
図54	新守山川 自然流路5遺物出土状況 (古墳時代中期)	46
図55	新守山川 SX1出土遺物実測図	48
図56	新守山川 自然流路1・5出土遺物実測図	49
図57	新守山川 (その2-2) 調査位置図	50
図58	新守山川 (その2-2) 平面図	58

図59	湖岸堤志那北（その1）調査位置図	52
図60	湖岸堤志那北（その1）トレンチ位置図	53
図61	湖岸堤志那北 土層柱状図	53
図62	北山田上水 トレンチ位置図	54
図63	北山田上水 試掘土層柱状図	55
図64	針江舟溜航路 位置図	57
図65	針江大川舟溜航路 噴砂・地震亀裂・下層埋没林	57
図66	大溝漁港航路浚渫 調査位置図	58
図67	大溝漁港航路浚渫 トレンチ位置図	58
図68	大溝漁港航路浚渫 樹木根出土状況図	59
図69	大溝漁港航路浚渫 南壁断面図	59
図70	唐崎マリーナ 調査位置図	60
図71	唐崎マリーナ 調査地点位置図及び土層柱状図	61
図72	南湖航路浚渫 調査位置図	63
図73	今西舟溜航路浚渫（その1・その2）調査位置図	64
図74	今西舟溜航路浚渫（その1）土器検出状況図	65
図75	今西舟溜航路浚渫（その1）断面土層図	65
図76	今西舟溜航路浚渫（その1・その2）トレンチ位置図	66
図77	今西舟溜航路浚渫（その2）第2面遺構図	67
図78	今西舟溜航路浚渫（その2）東壁断面図	67

図 版 目 次

- 図版一 赤野井湾浚渫 (B) (1)調査状況 (西から)
(2)調査後全景 (北から)
- 図版二 赤野井湾浚渫 (D) (1)調査地近景
(2)縄文土器出土状況
- 図版三 湖岸堤赤野井北 (その1) (1)調査区全景及び調査状況 (北から)
(2)調査状況
- 図版四 湖岸堤赤野井南 (その1) (1)T・2 全景 (北東より)
(2)T・1 S K 2 (北東より)
- 図版五 下物その2 (A) (1)トレンチ全景 (西北西より)
(2)遺構 (南東より)
- 図版六 下物その2 (烏丸) (1)トレンチ全景 (南西より)
(2)2号周溝墓 (南東より)
- 図版七 下物その2 (烏丸) (1)2号周溝墓木棺 (北東より)
(2)2号周溝墓木棺 (南東より)
- 図版八 下物その2 (D) (1)調査地遠景 (西より)
(2)調査風景 (表土掘削)
- 図版九 常盤農水 (1)調査状況
(2)遺構検出状況
- 図版一〇 津田江その1 (水門) (1)第3 トレンチ表土掘削作業 (西南より)
(2)第6 トレンチ作業風景 (西より)
- 図版一一 津田江その1 (水門) (1)第4 トレンチ全景 (東より)
(2)第5 トレンチ全景 (西より)
- 図版一二 津田江その1 (水門) (1)A区調査地全景 (北より)
(2)A区東壁土層断面
- 図版一三 津田江その1 (水門) (1)B区風倒木検出状況
(2)B区石鏝出土状況
- 図版一四 湖岸堤津田江 (その1) (1)調査前状況 (北より)
(2)下層遺構 (西より)

- 図版五 湖岸堤津田江（その1） (1)遺物出土状況（上層）
(2)作業風景
- 図版六 湖岸堤津田江（その1-1） (1)調査地遠景（南より）
(2)調査前状況（西南より）
- 図版七 湖岸堤津田江（その1-1） (1)遺物包含層掘削状況（西南より）
(2)SR-1土層断面図実測作業
- 図版八 津田江その2（水門）外 (1)調査区遠景（北より）
(2)Cトレンチ検出状況（南東より）
- 図版九 津田江その2（水門）外 (1)埋没樹全景（北西より）
(2)埋没樹近景（東より）
- 図版十 津田江その2（水門）外 (1)Bトレンチ検出状況（北より）
(2)土器出土状況（南東より）
- 図版十一 湖岸 津田江（その2） (1)調査前近景（南西より）
(2)調査状況（東より）
- 図版十二 湖岸堤津田江（その2） (1)Dトレンチ検出状況（北より）
(2)遺物出土状況（西より）
- 図版十三 津田江給水施設外 (1)遠景
(2)遺物採取作業
- 図版十四 津田江給水施設外 (1)調査地遠景
(2)調査地全景（遺物包含層発掘後）
- 図版十五 津田江給水施設外 (1)北壁土層断面
(2)噴砂検出状況
- 図版十六 津田江給水施設外 (1)縄文土器出土状況
(2)縄文土器出土状況
- 図版十七 津田江航路浚渫 (1)遠景
(2)調査状況
- 図版十八 新守山川 (1)遠景（西から）
(2)3号橋付近近景（西から）
- 図版十九 新守山川 (1)弥生時代ピット群（北から）
(2)弥生時代ピット群（南から）

図版三〇	新守山川	(1)自然流路3・4 (東から) (2)S X 3 (北から)
図版三一	新守山川	(1)S X 1 遺物出土状況 (2)S X 1 遺物出土状況
図版三二	新守山川	(1)S D 11遠景 (東から) (2)S D 11土層断面
図版三三	新守山川	(1)自然流路5 遺物出土状況 (2)自然流路5 遺物出土状況
図版三四	新守山川 (その2-2)	(1)調査区全景 (東から) (2)調査状況 (東から)
図版三五	湖岸堤志那北 (その1)	(1)調査区全景 (南から) (2)トレンチ断面状況
図版三六	北山田上水	(1)調査地遠景 (東より) (2)表土除去状況 (東より)
図版三七	針江大川舟溜航路浚渫	(1)下層埋没林 (東から) (2)下層埋没林 (東から)
図版三八	針江大川舟溜航路浚渫	(1)地震痕 (亀裂) (2)地震痕 (噴砂断面)
図版三九	大溝漁港航路浚渫	(1)樹木痕出土近景 (2)樹木痕出土状況
図版四〇	唐崎マリーナー	(1)調査地全景 (2)P-1 掘削状況
図版四一	南湖航路浚渫	(1)調査風景 (2)貝層
図版四二	今西舟溜航路浚渫	(1)上層部掘削作業風景 (2)上層部掘削作業風景
図版四三	今西舟溜航路浚渫	(1)中層部完了近景 (2)下層部完了近景
図版四四	今西舟溜航路浚渫 (その2)	(1)湖底面 (調査前) (2)中層部遺物出土状況

図版44 今西舟溜航路浚渫（その2）(1)S D 2 検出状況

(2)下層部完了風景

図版45 今西舟溜航路浚渫（その2）(1)S D 2 出土木製品

(2)S D 2 出土木製品



図1 湖南・湖東地区関係調査地位位置図

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1. 湖岸堤赤野井北(その1) | 11. 津田江航路浚渫 |
| 2. 赤野井湾浚渫(B) | 12. 津田江その1(水門) |
| 3. 赤野井湾浚渫(D) | 13. 湖岸堤津田江(その1) |
| 4. 新守山川 | 14. 湖岸堤津田江(その1-1) |
| 5. 湖岸堤赤野井南(その1) | 15. 津田江その2(水門)外 |
| 6. 下物その2(A) | |
| 7. 下物その2(D) | |
| 8. 下物その2(烏丸) | |
| 9. 湖岸堤津田江(その2) | |
| 10. 津田江その2(水門)内 | |

1. 赤野井湾浚渫 (B)

1. はじめに

赤野井湾遺跡は、守山市赤野井町地先の同湾中に位置する南湖東岸に接した湖底遺跡で、浚渫に先立つ昭和58・59年度の潜水試掘調査で湾内ほぼ全域に縄文時代早・前期および縄文時代晩期・弥生時代前期の遺物包含層が確認され、昭和61年度に実施された陸化による試掘調査では、A地点で縄文時代早期末の遺構を検出する成果を得た。本調査区のB地点は、前年度の未調査範囲約1250㎡を対象とした。調査は、排水後のバックホーによる表土のヘドロの除去、また上下2層の遺物包含層を前年度に確認できており、本年度は人力による包含層掘削・遺構面精査に全力を傾けた。調査地区割は10mメッシュ単位で南北1～4、東西A～Dの組合せとした。

2. 調査結果

基本層位は、表土（ヘドロ層）約40cm、灰色粘土約70cm、黒灰色粘土約15cm（縄文中期包含層）、淡黒灰色砂質土約40cm（縄文中期包含層）、青灰色粘土（無遺物層）である。前年



図2 赤野井湾浚渫 (B) 調査位置図

度と同じく縄文時代中期の遺物を含む黒灰色粘土層・淡黒灰色砂質土層2層を調査区全域で検出したが、遺物はほとんど上層に集中する。前年度に1B区で検出されていた淡青灰色砂層(自然流路)は、2A・2C・3A・3B・4A区へとほぼ直行して南西方向に延びることが確認できた。自然流路は無遺物層の青灰色粘土層を切り込んでおり、同一面上でピット群、3B区に風倒木痕1基が検出された。遺物では、中期縄文土

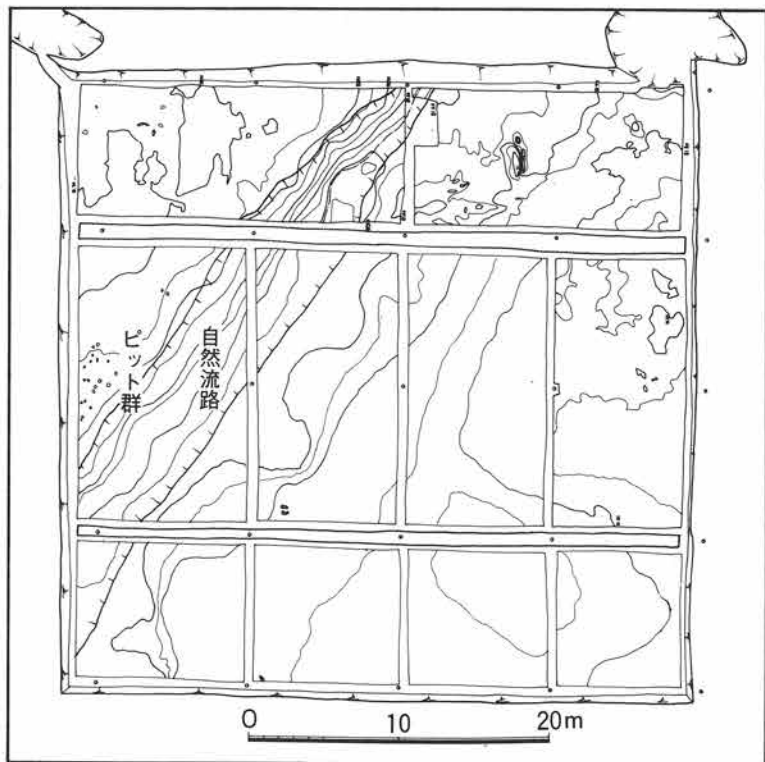


図3 赤野井湾浚渫 (B) 平面図 (上が磁北)

器が上層包含層に多く出土するほか、下層包含層で以下の青灰色粘土層に貼りついた様に出土した石槍1点がある。

3. おわりに

縄文時代中期の包含層は、標高81.5mから82.1mまでのレベルでほぼ均等の厚さで推積し、北から南へやや傾斜する。南東へ向かうにしたがって、遺物の出土分布密度が稀薄となっていくが、出土した土器の多くはローリングをあまり受けておらず、北方および西方付近に遺構の存在が十分に予想された。

(岩間信幸)

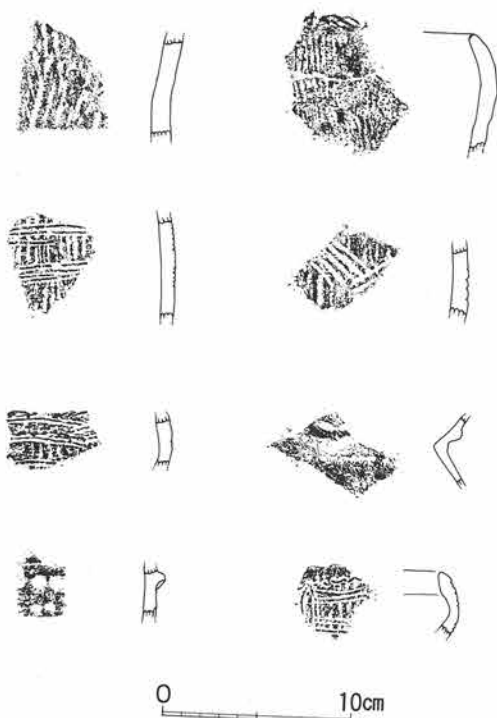


図4 赤野井湾浚渫 (B) 出土土器拓影

2. 赤野井湾浚渫(D) 赤野井湾遺跡



図5 赤野井湾浚渫(D) トレンチ位置図

1. はじめに

赤野井湾遺跡は、琵琶湖東岸の守山市赤野井町地先にあたり、南は鳥丸崎半島、北は木ノ浜に囲まれた赤野井湾内に位置する。

昭和61年度には湾内の3ヶ所(図5 A～C区)で浚渫工事に伴う事前試掘調査が実施され、縄文時代早期末葉(標高80.80～81.00m)・中期(81.60～81.70m)

の遺物(土器・石器・珠状耳飾り)・遺構(土壇)、弥生～奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されている。

また、野洲川の形成した沖積平野を西流して湾内に流れこむ天神川河口部でも標高82.70m～82.40mにかけて弥生時代後期の流路、古墳時代(5世紀後半～6世紀後半)の流路・足跡群等が検出されている。

2. 調査の経過と結果

本調査区D区は天神川河口部から沖約150m(水深約2m)に位置する。鋼矢板

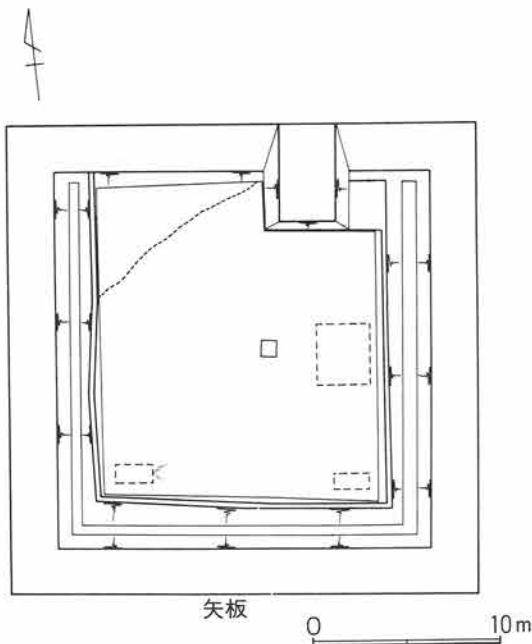


図6 赤野井湾浚渫(D) 検出状況図

で50×50mの範囲を二重に囲い水中ポンプで排水し、湖底に0.5～1.0mの厚さで堆積したヘドロを除去後、調査にとりかかった。

調査区内の基本層位は、ヘドロ下より第1層：黒灰色粘質土①、第2層：淡青灰色粘土、第3層：灰色粘土、第4層：黒灰色粘質土②、第5層：灰色粘土（砂が混じる）、第6層：淡緑灰色粗砂、第7層：淡青灰色砂でほぼ水平堆積を示す（図7）。

このうち第4層の黒灰色粘質土②が遺物包含層に相当し、標高81.60～81.70mをはかる。遺物は調査区南西寄り部分の比較的上面で縄文土器が十数点出土したのみである。いずれも小破片であり、縄文時代中期中頃（里木Ⅱ式か）に比定される土器である。

遺物包含層除去後の灰色粘土面は、ほぼ平坦で遺構等の確認はできなかった。

また、調査前の水中ポンプ設置時に南東部の最下層の砂層中よりアカホヤ火山灰が微量ではあるが検出されていたため、さらに3ヶ所のトレンチを設定した。しかし、土壌が砂質な上に湧水が著しいため十分な調査はできなかったが、土層断面観察によると淡灰色砂、粗砂、茶褐色粘土が80.00mあたりまで続くのみで火山灰等は全く検出できなかった。

以上の様に遺物の出土は少量ではあったがA・B区で確認されていた縄文時代中期の包含層の広がりや押しえられたわけである。また、天神川河口部で検出された弥生・古墳時代の遺構面の広がりも限定できた。

(吉田秀則)

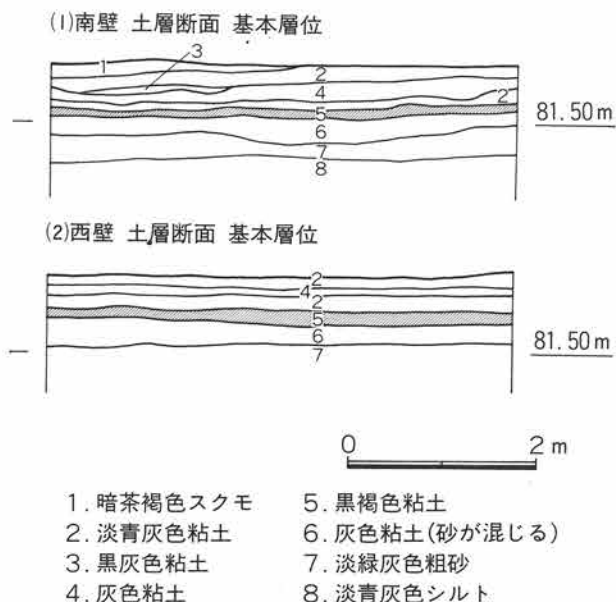


図7 赤野井湾浚渫（D）土層断面図

3. 湖岸堤赤野井北（その1） 赤野井湾遺跡

1. はじめに

赤野井湾遺跡は昭和58・59年度の潜水試掘調査で湾内ほぼ全域に縄文時代早・前期および晩期、弥生時代前期の遺物包含層が検出されてより、その全容があきらかになり始めた。湾内消波堤建設地点では、縄文時代後期の土器片が出土し、航路浚渫地点から港内にかけて、縄文時代から平安時代の遺物包含層が検出された。湾内浚渫工事に先立ち、潜水試掘調査結果に基づいて設定された4地点のうち、A地区より縄文時代早期末の遺構および遺物包含層を検出する成果を得、B・C地点でもともに縄文時代中期の遺物包含層が検出された。湖岸堤建設に伴う調査では、天神川水門地点より古墳時代前期の土器群と多量の木製品（昭和59年度）、弥生時代後期と古墳時代後期の水路、白鳳期の瓦と多量の木製品が出土し（昭和60年度）、湖岸堤最北部で弥生時代の遺物包含層が検出された。法竜川水門では昭和59年度に縄文時代後期の多量の土器群と遺構が検出されており、本調査地はここより北にのびる湖岸堤を対象とする。

2. 調査の経過

湖岸堤赤野井北その1工区の起点No.100+20mより北へNo.111+33.952mまで約17,500㎡を対象に調査地点を鋼矢板囲い（5m×5m）で40m間隔に28箇所設定し、南から順にT

1～T28と呼称した。調査は、0.4㎡級バックホーで東面を土層観察用に残しながら慎重に土層を掘削していった。結果として遺構は検出されなかったが、土層の変化にあわせて人力掘削にきり換えて遺物・遺構の検出につとめた。最下層の遺物の検出については、保安のため、排土溜での作業にとどめざるを得なかった。尚、調査過程でトレンチ5箇所については両隣の調査結果により省略した。

3. 調査の結果

基本層位は表土（旧耕土・暗灰色泥土）約20cm、



図8 湖岸堤赤野井北（その1）調査位置図

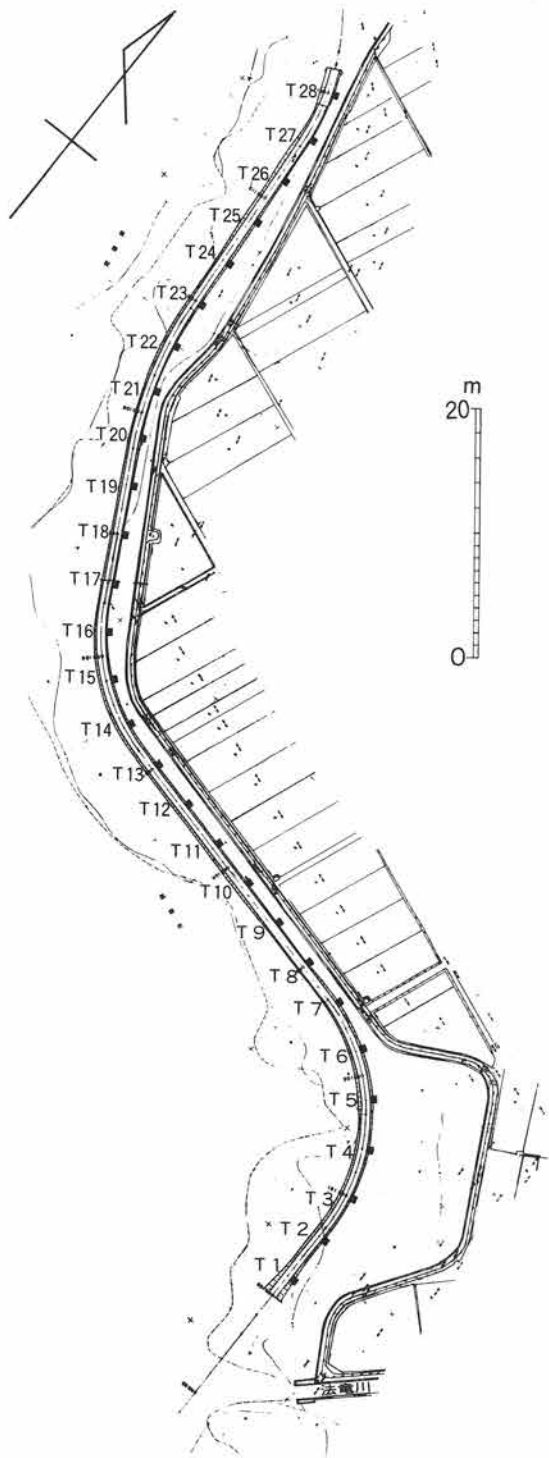


図9 湖岸堤赤野井北（その1）トレンチ位置図

床土（黄灰色粘土）約20cmが全域に認められ、
 以下は青灰色粘土・白灰色砂が不均等に互層
 をなす。T26～T28では、縄文時代晩期から
 弥生時代にかかる土器を含む暗白灰色粗砂が
 約20cmの厚さで確認された。レベルは80.7m
 ～81m前後を測る。

4. お わ り に

本調査区の南端は、現在の赤野井湾遺跡の
 北端に接した地点であり、本遺跡はこれ以上
 北には延びず、今回発見された遺物包含層は
 以北に存在する新たな遺跡であるとの解釈
 もできる。

（岩間信幸）

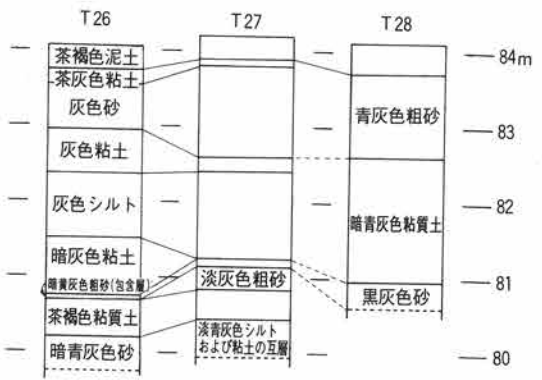


図10 湖岸堤赤野井北（その1）土層柱状図

4. 湖岸堤赤野井南(その1)赤野井湾遺跡

1. はじめに

本調査は湖岸堤赤野井南その1工区建設と、一部、山賀川樋門建設に先立って実施したものである。調査区は守山市山賀町地先、湖岸堤工事用ポイントNo.86+60～No.87+40付近に位置する。

2. 調査の経過

湖岸堤赤野井南その1工区は昭和61年度に40mピッチで5箇所トレンチを設けた試掘調査が実施された。その結果、2箇所のトレンチについて遺物包含層の存在とその可能性が考えられたため、これを中心に延長80mの範囲について発掘調査を実施することとなった。調査はまず、北半部についてこれを行ない(T・1)、その完了後、鋼矢板の半転、打ち替えのち南半部(T・2)について実施した。

3. 調査の結果

遺構 調査の結果、自然流路SR1、落ち込み状遺構SX1～3、土坑SK1～3・5などが検出された。SR1は深さ約20cmを測り、南から北へ向かって流れる。時期は平安時代後期(12世紀)である。SX2・3は浅い沼沢地状の落ち込みである。時期はSX2埋土出土の黒色土器碗より12世紀に埋没したものと考えられる。SX3についても埋土の土質および色調からSX2とほぼ同時期に埋没したものと推定される。SX1は深さ1m以上を測り、底面は起伏が激しい。埋土は、上層のスクモ質粘質土層と下層の砂層とに大きく二分できる。最下層は径1cm未満の小円礫および粗砂が堆積しており、SX1がかなりの水流をもった流路として機能していたことが伺われる。埋土下半の砂層からは布留期を中心とした大量の遺物が出土している。また、埋土の上半粘質土からは黒色土器碗や土師器小皿などの出土をみており、平安時代後期にはSX1が沼沢地状の溜まりとなっていたことが推察できる。人為的に掘り込まれたことが確実な遺構としてはSK1～3・5が存在する。このうちSK1については布留期に年代が求められる。

遺物 遺物はSR1とSX1より大量に出土しているが特筆すべきはSX1最下層より出土した多くのミニチュア土器群であろう。

4. おわりに

今回の調査では琵琶湖の平均水面下0.6~1.0m という立地にも関わらず、多くの遺構・遺物を検出し、特に土壙群の存在は当地においての人々の活動を証拠づけるものである。

(平井美典)

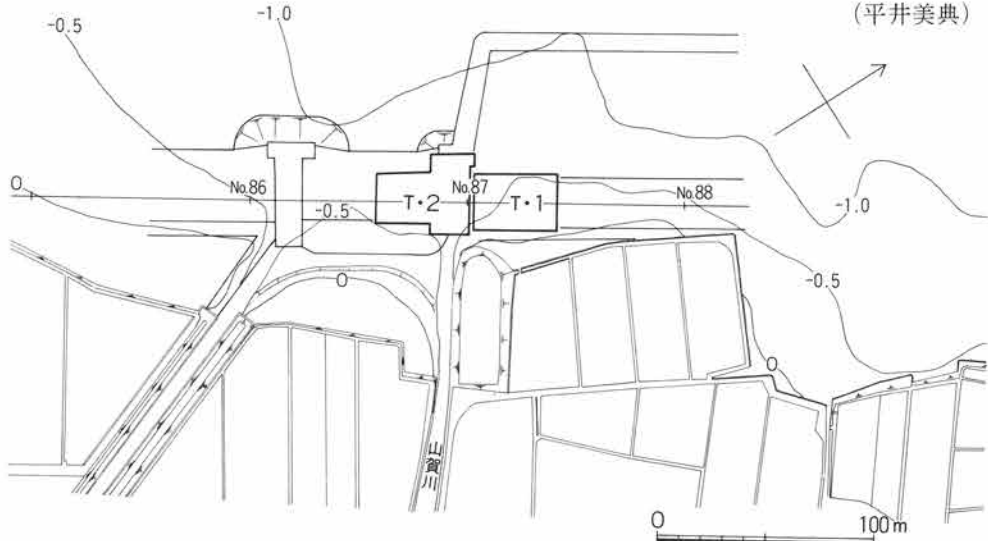


図11 湖岸堤赤野井南（その1）トレンチ位置図

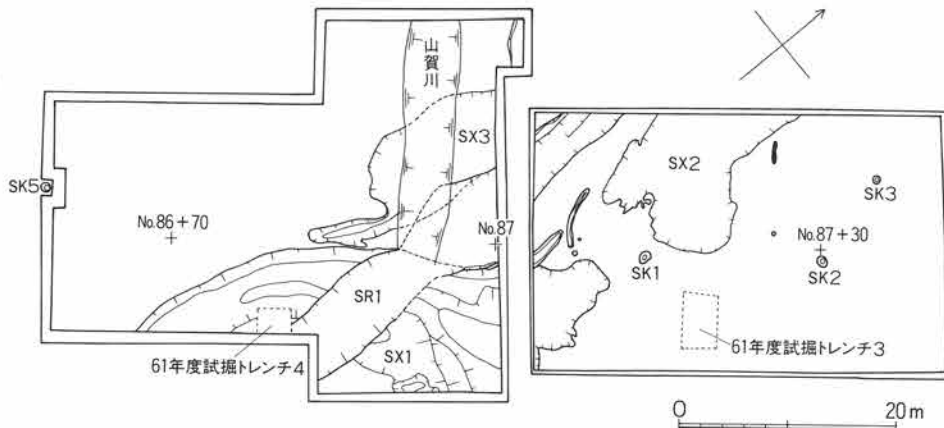


図12 湖岸堤赤野井南（その1）遺構全体図

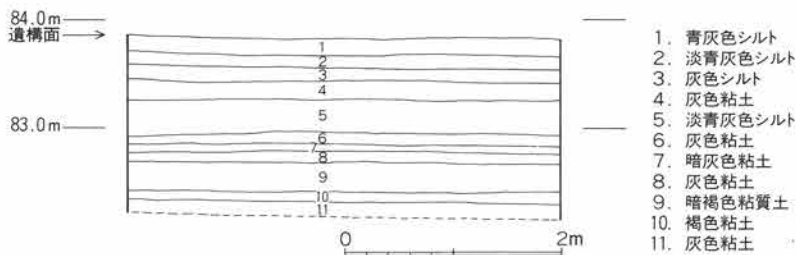


図13 湖岸堤赤野井南（その1）基本土層図

5. 下物その2 (A) 烏丸崎遺跡

1. はじめに

本調査は湖岸堤下物その2(A)工区建設に先立って実施したものである。調査区は草津市下物町地先、湖岸堤工事用ポイントNO80+20～NO81付近に位置する。当調査区の南方約400 mの烏丸崎半島では昭和59年度から61年度までの発掘調査の結果、弥生時代の方形周溝墓群や土塼、玉造工房と考えられる竪穴式住居跡などが検出されている。

2. 調査の経過

調査はまず、最上層の褐色スクモ層の除去をバックホーを用いて行ない、そののち人力による遺構の検出・バックホーによる掘り下げを各層について行なった。

3. 調査の結果

遺構 最上層褐色スクモ層を除去した段階で調査区南西コーナー部において板組み遺構と溝状遺構を検出した。板組み遺構は幅15～20cmの板材を立て並べ、その両側から丸木杭と角杭を打ち込み固定したものである。直角に屈折するコーナー部をもち、延長14m×6 m分を確認した。板組み内には客土が詰められており、その客土内から縄文土器や須恵器の細片、陶磁器類が出土している。この板組み遺構の性格については、湖岸汀線部においての畑作地造成に伴うものであると考えられる。溝状遺構は深さ20～30cmを測るものでL字型に検出された。この溝が埋没したのち板組み状遺構が設けられている。下層については人為的な遺構の存在は全く確認されなかったが、標高81.6～81.7m付近に位置する黒褐色粘土直下で風倒木の痕跡が検出されたことから、当時における当地の陸化状態を伺い知ることができる。なお、黒褐色粘土層については¹⁴C年代測定によって3890±30年B.P. という年代観が得られた。

遺物 遺物は最上層の板組み遺構の客土内より出土したものである。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器はいずれも細片であり、詳細な時期については明らかにし得ない。陶磁器類は近代以降のものと思われる。

4. おわりに

発掘調査の結果、次のような所見が得られた。近代のある時期、湖岸湿地帯であった当

地においての開拓造成の手が加えられていること。推定縄文時代中期においての当地の陸
 化状態。また、当初予想された弥生時代方形周溝墓は検出されず、烏丸半島の遺構群の拡
 がりが当地にまでの延びないことが判明した。 (平井美典)

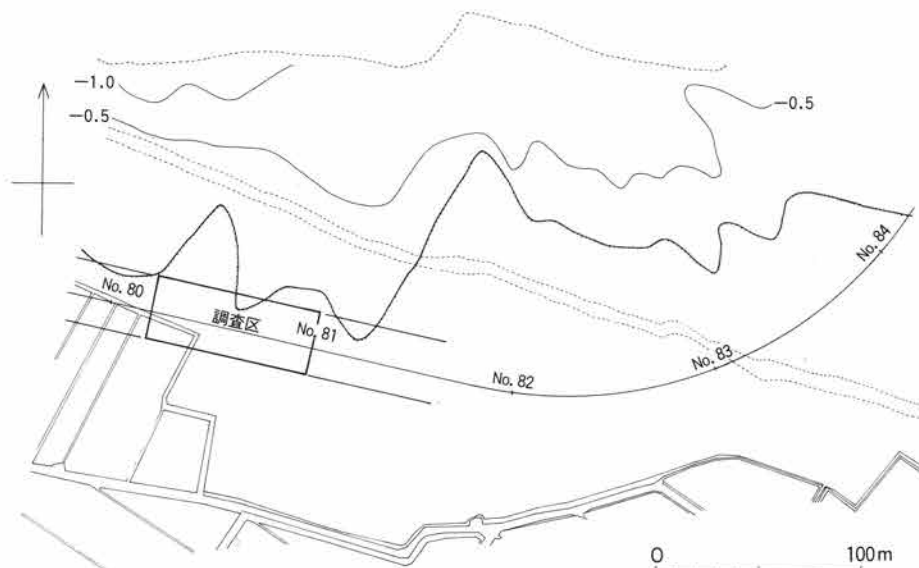


図14 下物その2 (A) トレンチ位置図

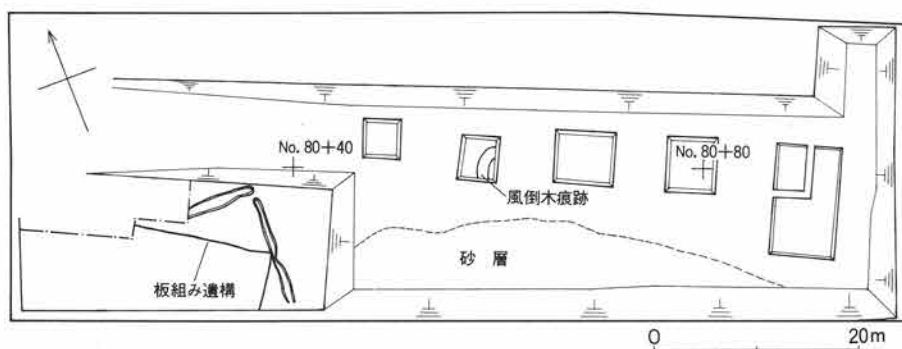


図15 下物その2 (A) 遺構全体図

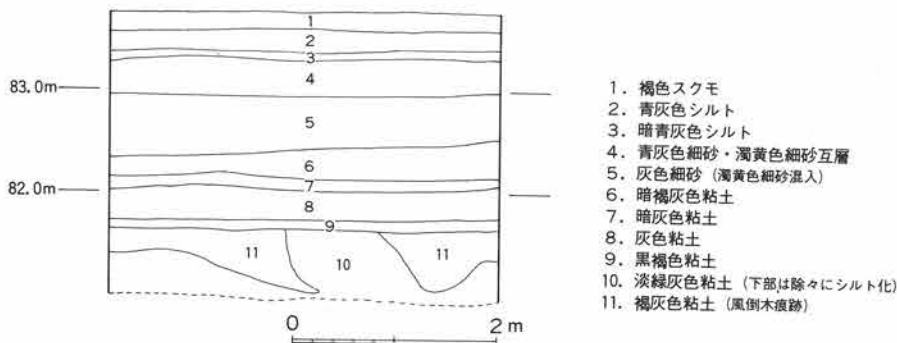


図16 下物その2 (A) 基本土層図

6. 下物その2 (烏丸) 烏丸崎遺跡

1. はじめに

烏丸崎遺跡は草津市下物町地先に所在し、湖中に突出する鉤形に曲った烏丸半島の上に位置する。過去の調査では、半島の先端部から鉤形の幹部にかけての調査区で弥生時代中期の方形周溝墓群と同時期の玉造工房跡が検出され、半島の付根部の調査区でも方形周溝墓群が検出されており、半島全体に墓域が広がっていたことが推察される。

今回の調査は、湖岸堤の築造に伴うもので、半島の付根部を幅20m、長さ60mの範囲を対象として行なった。

2. 調査の経過

調査は、前年度に一部表土掘削を行なったのを引き継いで実施した。バックホーによって表土を掘削し、T. P. 84.00mで上層遺構面を調査した。同時にこの面で、下層の方形周溝墓群のマウンド上面を検出していたので、下層遺構面(83.80m)までは手掘り掘削して遺構精査を行なった。なおさらに5m×5mの範囲を81.00mまでたちわって、下層遺構の有無を確認した。

3. 調査の結果

基本層位は、第1層・耕土約20cm、第2層・灰褐色土層約10cm、第3層・灰褐色腐植土層約3cm、第4層・暗灰色混砂粘土層約20cm、第5層・黒灰色粘土層、第6層・暗青灰色粘土層約10cm、第7層・淡青灰色粘土層である。上層遺構は第5層をベースとしており、下層遺構は第6層をベースとしている。

上層遺構

6条の溝状遺構を検出した。トレンチ中央付近を中心に北西方向へ2条、北方向へ4条がのびている。幅は1～3.5m、深さ5～20cm程度を測る。出土遺物は漆器、黒色土器などがわずかに出土した。

下層遺構

遺構は、トレンチの南西側の部分に集中している。検出された遺構は、弥生時代中期の方形周溝墓5基と弥生時代後期の溝4条のほか、土壇などである。

方形周溝墓は、1号周溝墓(9m×6m以上・墳高20cm・溝幅2.2m・溝深50cm)、

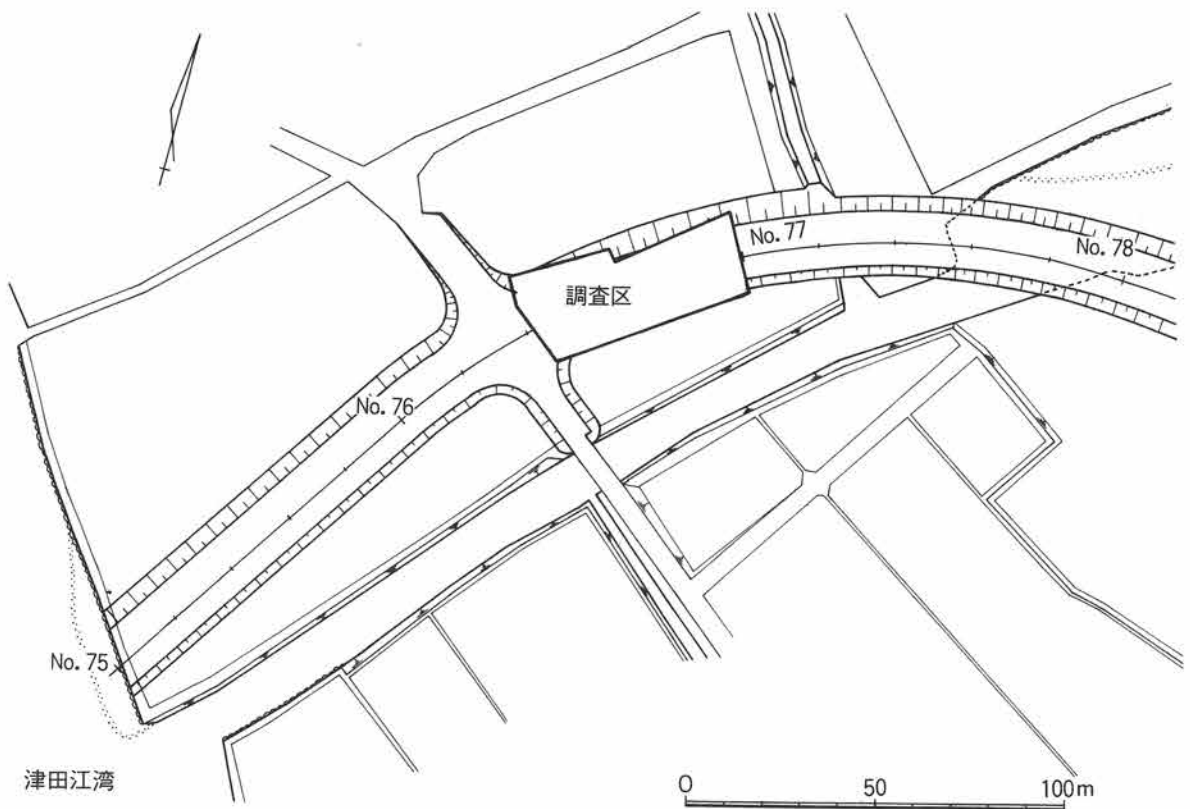


図17 下物その2 (烏丸) 遺跡位置図及びトレンチ位置図

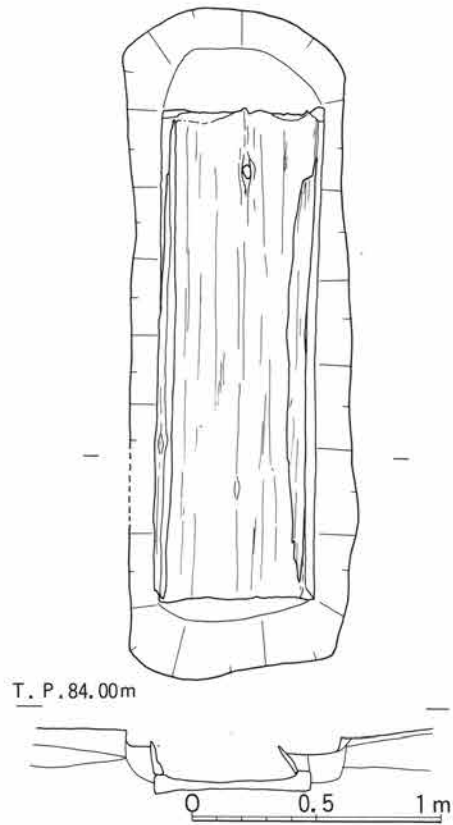
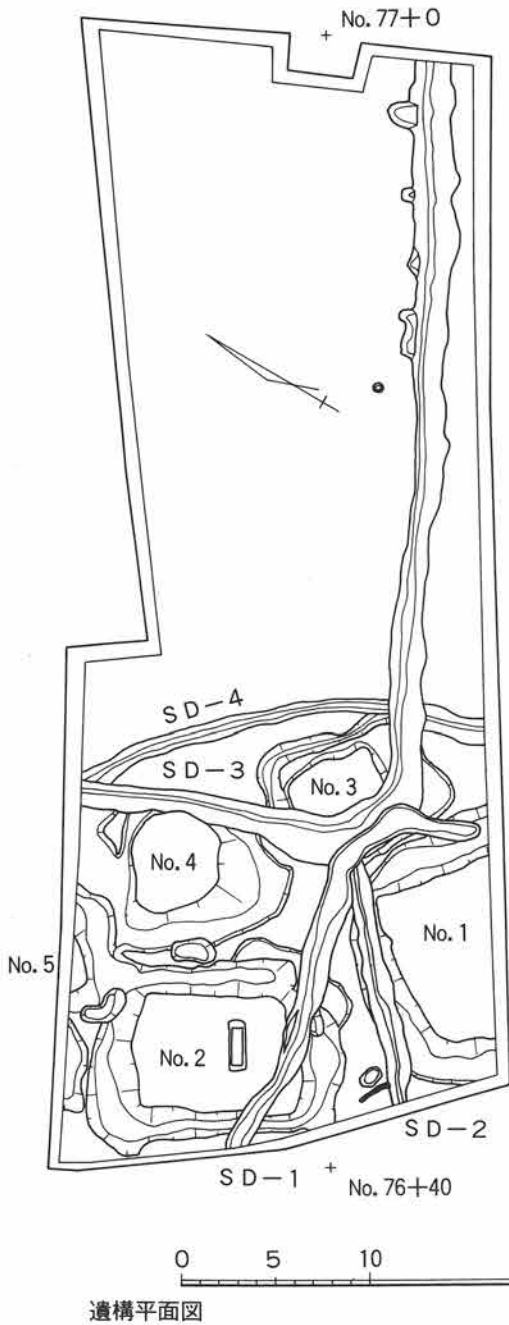


図19 下物その2 (烏丸) 2号周溝墓木棺実測図

T. P. 85.00m



図18 下物その2 (烏丸) 遺構平面図及び土層柱状図

2号周溝墓（9 m×6 m・墳高30 cm・溝幅2 m・溝深20 cm）、3号周溝墓（6 m×?・墳高20 cm・溝幅1 m・溝深10 cm）、4号周溝墓（7 m×6 m・墳高20 cm）、5号周溝墓（規模不明）である。各方形周溝墓のマウンドには、10～30 cm程度の白灰色粘土の盛土が残っていた。方形周溝墓群は、規模と配列から1号・2号と3号・4号・5号とにグルーピングできるが、4号周溝墓と5号周溝墓とのあいだ以外は溝を共有していない。

なお2号周溝墓のマウンドからは、埋葬主体である木棺が検出された。木棺の掘り方は盛土の途中から掘り込まれている。木棺は蓋板、小口板が失われており、両側板と底板が遺存していた。底板は63 cm×195 cm×7 cm、側板は?×195 cm×5 cm程度に復元できる。構造は、底板の上に小口板と側板をのせ、小口板で側板をささえていたと思われ、底板には小口板をささえるためのほぞ穴などの工作痕はみられない。これらのことから木棺の規模は、内法がおよそ53 cm×180 cm×?に復元される。木棺内に骨片・遺物はみられなかった。

方形周溝墓群の周溝が埋没し、マウンドの高まりのみが残された弥生時代後期に、マウンドを避けるように蛇行した溝が開削されている。これらの溝からは土器のほか、鍬・鋤・槽などの木製品が出土した。

土壌は、1号周溝墓と2号周溝墓のあいだに1基、2号周溝墓と4号周溝墓のあいだに1基検出された。それぞれの埋土から前者は弥生時代後期、後者は弥生時代中期のものと思われる。両者ともまとまった遺物の出土はなく、埋土は単一層である。

遺物

主なものは方形周溝墓群の供献土器で、1号周溝墓からは甕3個体、高坏1個体、2号周溝墓からは壺4個体、5号周溝墓からは壺2個体が出土している。時期は弥生時代中期前葉から中葉に位置づけられよう。

4. お わ り に

今回の調査では、烏丸崎遺跡の方形周溝墓群の、烏丸半島の付根部における北限が明らかになった。おそらく半島の幹部に100 m余りの幅で带状に、方形周溝墓群が広がっているものと思われる。この墓群を営んだ集落がどこにあるのかは明確でないが、湖に突出した特殊な地形のうえに墓を集めていることは、墓群の性格を考える上で注目すべきことであると思われる。

(伊庭 功)

7. 下物その2 (D) 烏丸崎遺跡

1. はじめに

烏丸崎半島は、旧野洲川によって形成されたとされる扇状地上（烏丸崎半島）に立地する遺跡で草津市下物町地先に所在し、弥生時代前期末～中期の玉作工房跡、中期の方形周溝墓群等が確認され大集落の存在が推察されている。

また、農免道路からの進入道路北側でも今年度調査（下物その2（烏丸））により、弥生時代中期の木棺墓を付設した方形周溝墓群が検出された。調査地はこの地点より北東約100mにあたり、昭和59年度の試掘調査で弥生土器片が確認されている地点に相当する。

2. 調査の経過と結果

今年度調査は、表土掘削して遺物・遺構の有無を確認するのみでその後の検出・掘り下げ作業は来年度の実施予定であった。

調査は、30×85mの範囲を鋼矢板によって囲み、その内部を重機による表土掘削からはじめた。現況の地表高は83.70～83.80mをほかり厚さ20cm程度の表土下に黒褐色粘質土がひろがる（図22）。厚

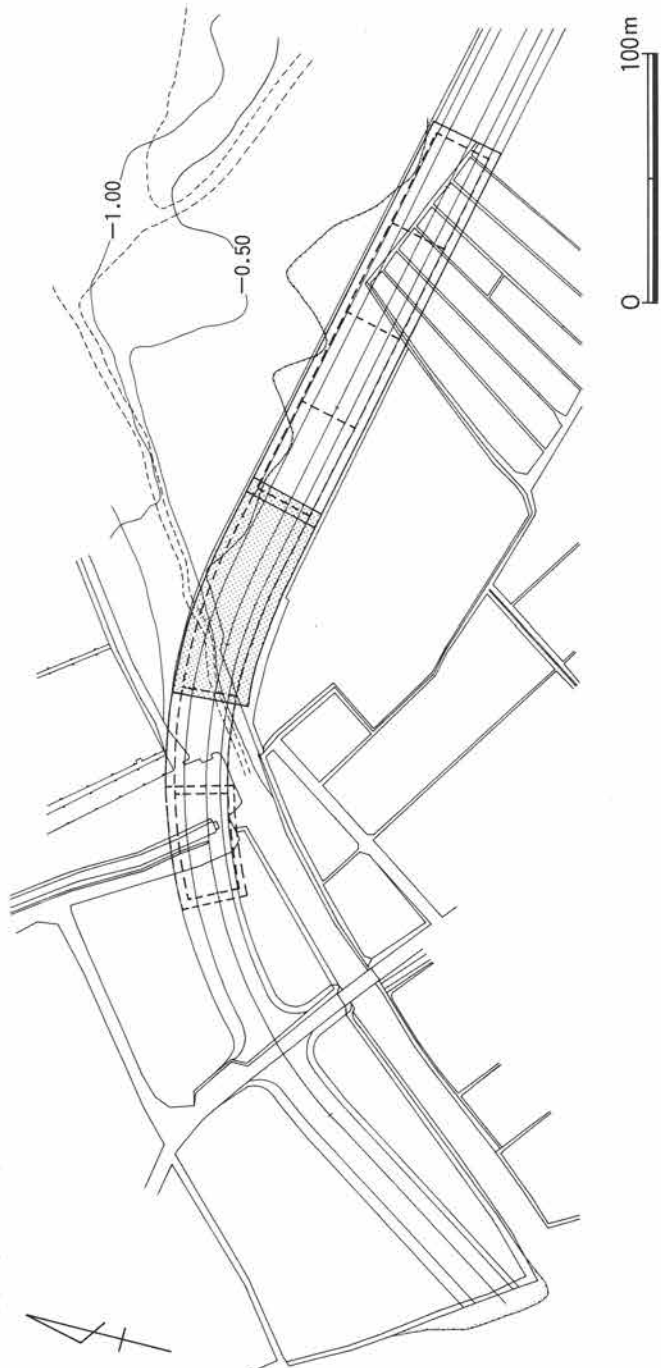


図20 下物その2 (D) トレンチ位置図

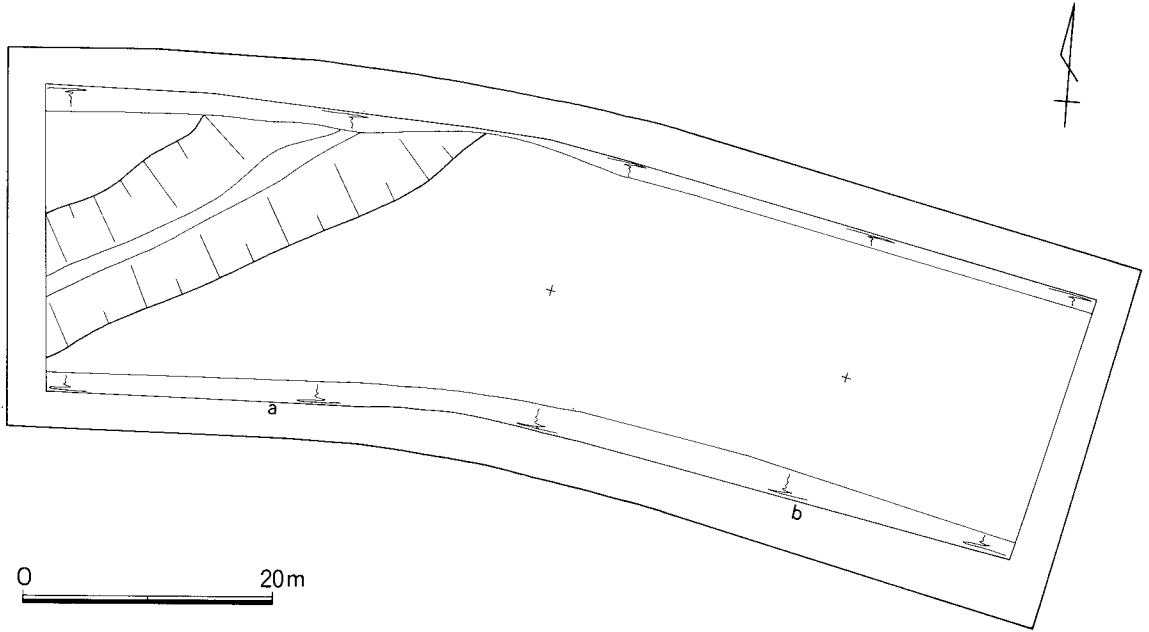


図21 下物その2 (D) 検出状況図

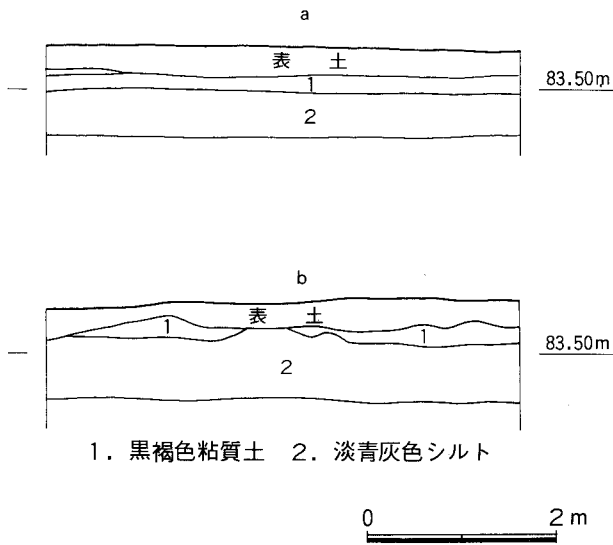


図22 下物その2 (D) 土層断面図

さ20~30cm程度のこの土層が試掘調査によって検出された包含層に相当するものと思われるが、東側半部については上面からの掘削等によりかなりの攪乱をうけたらしくほとんど残存していない状況であった。そこで部分的に包含層の掘り下げを行ってみたが、遺物・遺構等は全く確認されなかった。また、調査区西端は現況で半島を分断する河道が北東から南西方向へのびているが、下層においてもこの影響がおよび攪乱されていた。

以上により、西側で検出されていた方形周溝墓群は当調査区までは拡がらないことが判明した。

(吉田秀則)

8. 常盤農水 烏丸崎遺跡

1. はじめに

烏丸崎遺跡は、草津市下物地先湖中に鉤状に突き出る烏丸半島上の南側に位置し、津田江湾中の津田江湖底遺跡に接する。昭和59年から62年度までの調査で、半島北西部端より縄文時代晩期の包含層、弥生時代前期から中期にかけての玉造工房が検出され、また弥生時代前期から中期にかけての方形周溝墓群が半島北西端部および基部に検出されたことにより、当遺跡の範囲があきらかになってきた。本調査地点は半島基部の方形周溝墓群検出地点に南接する常盤地区農業用水の補償工事に伴う試掘調査で、北接する工事用道路5号線工事に伴う調査では平安時代の掘立柱建物が多数検出されている。

2. 調査の経過

調査地は、5号線道路から湖中に南走する送水管およびポンプ場用地内約750 m²を対象に試掘トレンチ10個所について、遺物・遺構の有無および深度の確認を目的とした調査を実施した。遺物・遺構が認められなかった個所についてはトレンチ規模を最小の幅1 m×長さ2 mにとどめ、遺物包含層・遺構が認められたT8-T9、礫層の自然流路が検出されたT4-T6-T8とT5-T7-T8を各所で拡張し、0.4 m²級バックホーと人力を併用して慎重に掘削・土層確認を行った。



図23 常盤農水調査位置図

3. 調査の結果

T8・T9で認められた基本層位は、表土(耕土)約15cm、床土および運土(攪乱)約30cm、灰色粘土約15cm、淡暗灰色粘土約10cm、青灰色粘土約80cm、暗灰色粘土約40cm、淡青灰色粘土約30cmとなる。T3で現耕土下約70cmから黒灰色粘土の土壌が検出され、古墳時代の土師器を包含していた。T8・T9では古墳時代後期の須恵器が出土する遺物包含層が現耕土下約70cm、厚さ約10cmで検出され、直

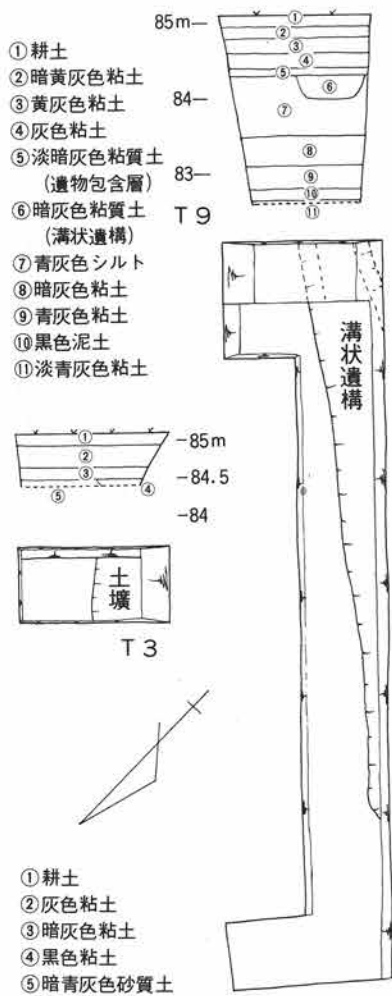


図25 常盤農水遺構平面図

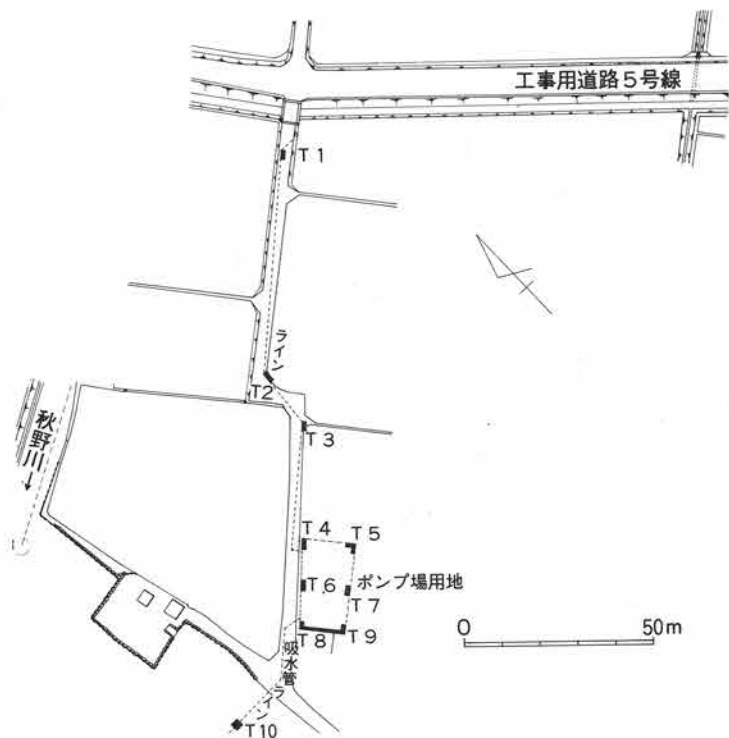


図24 常盤農水トレンチ位置図

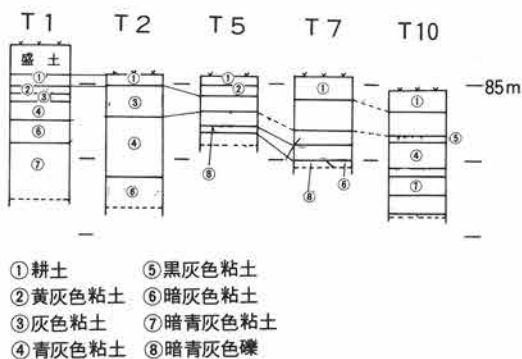


図26 常盤農水土層柱状図

下に同時期の幅1 m深さ30cmの溝状遺構1条が確認され、東西に流れる。遺物包含層は上記の淡暗灰色粘土層に相当し、溝状遺構は暗灰色粘土で、上記の青灰色粘土を切り込む。

4. おわりに

遺物・遺構が確認されなかったT1・T2で安定した暗灰色粘土層が認められ、同層が当該地北西部域で検出されている方形周溝墓群に関連する遺物包含層か遺構である可能性も充分考えられる。
 (岩間信幸)

9. 津田江その1（水門）（津田江湖底遺跡）

1. はじめに

昭和58年度の潜水調査によって発見された津田江湖底遺跡は、61年度より本格的に調査のメスが入れられることとなった。61年度には水門建設予定地の「津田江その1」「津田江その2」工区と内水排除施設建設予定地の計3ヶ所で調査を実施し、各々縄文時代前期～中期の遺構・遺物が検出された。両水門部分については同年度中に全範囲を調査することが不可能であったため、62年度に残りの部分を調査することとなった。

2. 調査の経過

水門建設予定地約8,800㎡のうち、3,500㎡については61年度に調査済みであり、今年度は残り約5,300㎡が調査対象地である。なお、図27の第1トレンチ、第2トレンチと調査地外周の排水施設部分が61年度調査範囲であり、その成果について述べると、水門建設予定地のほぼ全域に縄文時代前期～中期初頭の遺物包含層が拡がることが確認された。遺構としては土壇・ピットの他、風倒木痕群が検出された。風倒木痕とは立木が何らかの要因によって横転した結果として地表に残される遺構であり、湖底遺跡においては当時付近が陸化していたことの確認となる。

今年度の調査地については既に工事側によって標高81.8m付近までの無遺物層が除去済みであった。調査にあたっては縄文時代の遺物包含層直上までをバックフォアを用いて除去することとし、以下の遺物包含層・遺構面については人力によって掘削・精査ののち、図・写真による記録化を行なった。

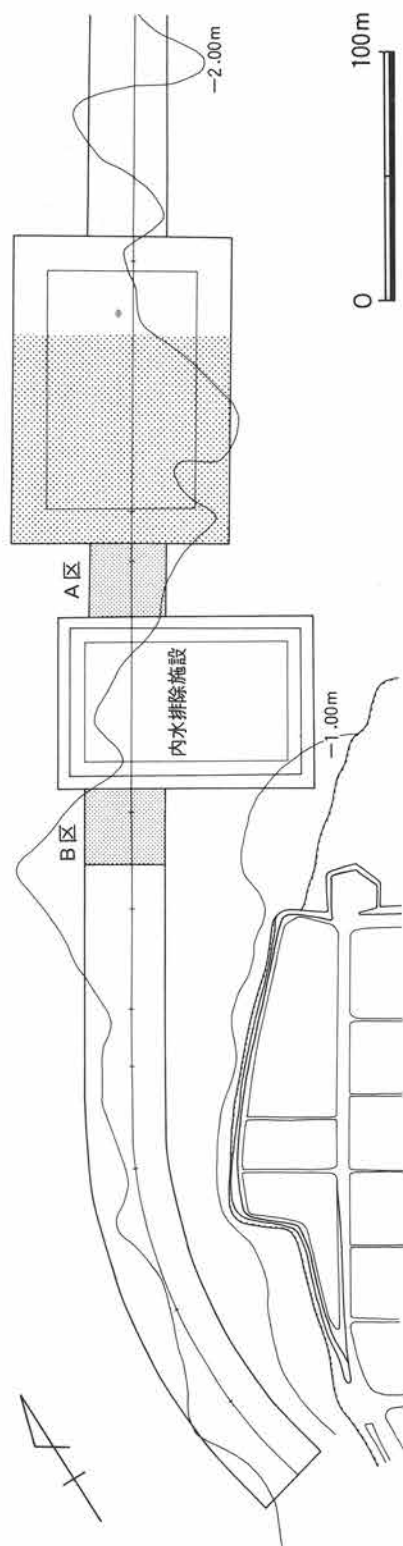


図26 津田江その1（水門）トレンチ位置図

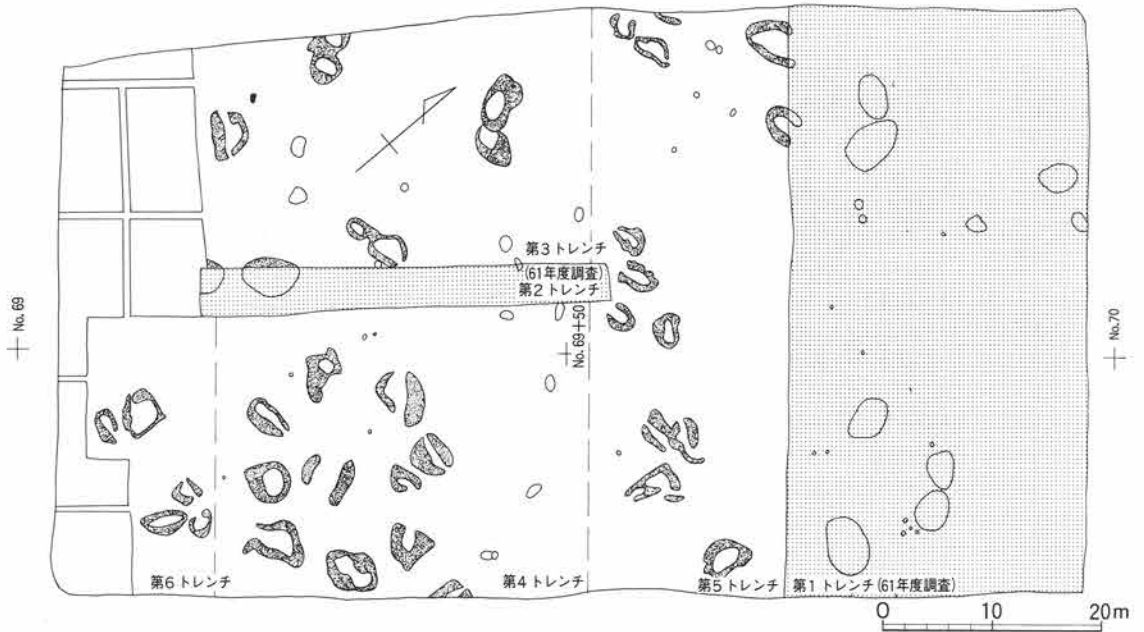


図27 津田江その1（水門）水門部全体図

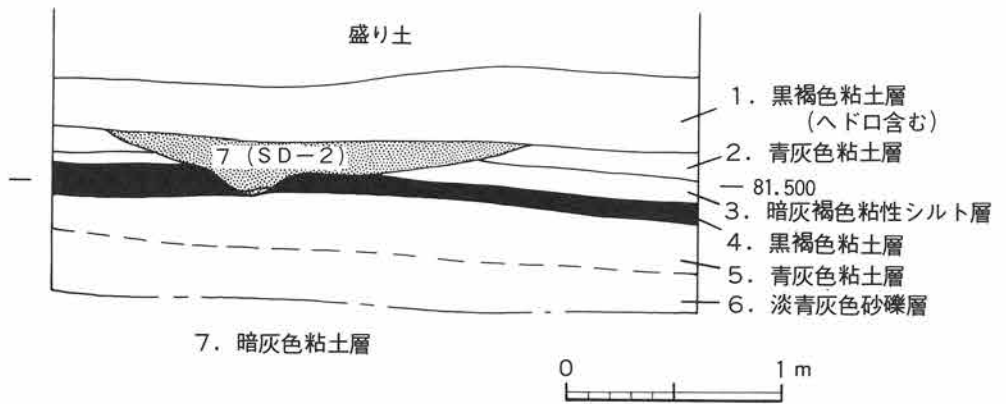


図28 津田江その1（水門）水門部土層断面図

調査面積が広いことと排土置き場の都合により、今年度調査区を第3～第6トレンチ（第1・第2トレンチは61年度調査済み）に分けて順次発掘した。なお南端の第6トレンチについては出土遺物も少なく、テストトレンチを入れて遺構・遺物の検出された部分のみ全面発掘した。

また、この間水資源開発公団の依頼により、引き続いて湖岸堤建設予定地の一部についても調査することとなり、図26に示したA区とB区を発掘調査した。

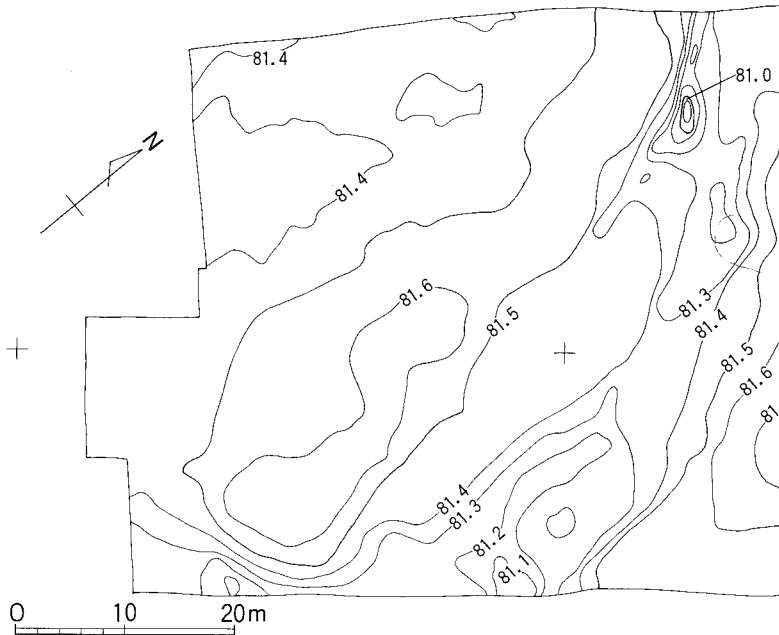


図29 津田江その1（水門）水門部遺構面地形測量図

3. 調査の結果

(イ) 水門部

図28に調査地の層位の概略を示した。1層上面が旧湖底面であり、1層の上にはヘドロが堆積している。続く2・3層までが無遺物層である。図28に示したSD-2とは2層上面より切り込む遺構状のものである。最下部に堆積する砂層の状況等により、時期は確定できないものの当遺跡水没後に受けた攪乱の痕跡と考えている。SD-2は第5トレンチを西北西より東南東へ向けてやや浅くなりながら走り、深い部分では縄文時代の遺物包含層までも掘り込んでいる。このため、埋土中に若干の縄文土器片を含んでいた。

4層が縄文時代前期～中期初頭の遺物包含層であり、この層を除去した5層上面において同時期の遺構が検出された。この遺構面は標高81m前後から81.7m程度までの微妙な起伏を持ち、低くなった部分は自然流路を成していたと思われる。

遺構面のベースとなる層は青灰色粘土あるいは粘砂よりなっており、下層にいくにつれて次第に砂から砂礫層へと変化している。

検出された遺構は人為的な土壇・ピット類と自然の風倒木痕とに分けられる。土壇は径1～2m程度の規模を持ち、大半が浅いものであった。埋土中に若干の炭を含むものが一

部存在した。ピットは径20~50cm程度のものである。そのうちの一基には犬頭大の礫2個の入っているものがあった。しかしながら土壌とともに大半が性格不明の遺構である。

調査区のほぼ全面にわたって多数の風倒木痕が検出された。そのほとんどが、土壌・ピット等よりやや時代の下るものかと思われる。埋土は上層の遺物包含層と類似する。

出土遺物としては土器と石器がある。土器は前年度と同様に縄文時代前期~中期初頭の時期のものに限られ、主体は北白川下層Ⅱ式とⅢ式にある。土器片は軟質であるため、大

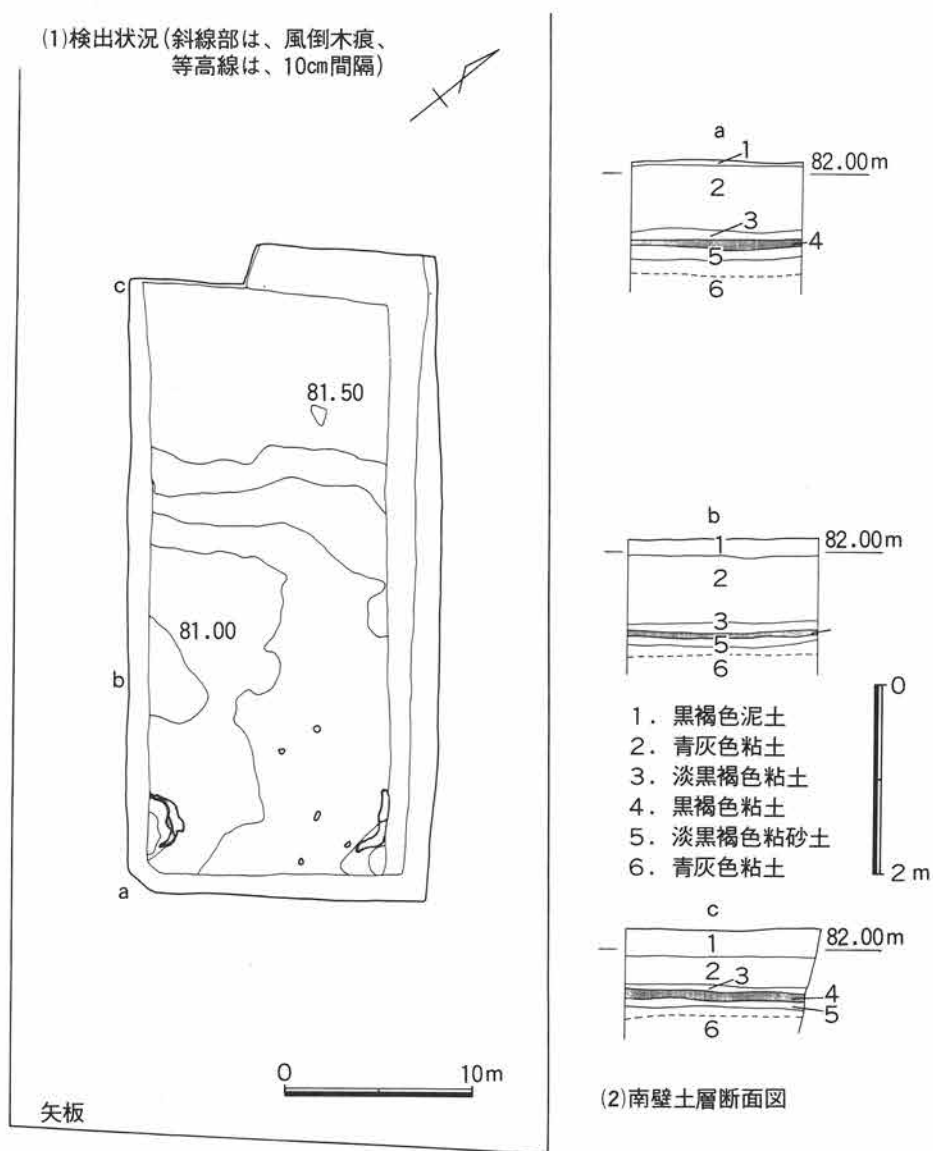


図30 津田江その1(水門)湖岸堤部A区検出状況図及び土層断面図

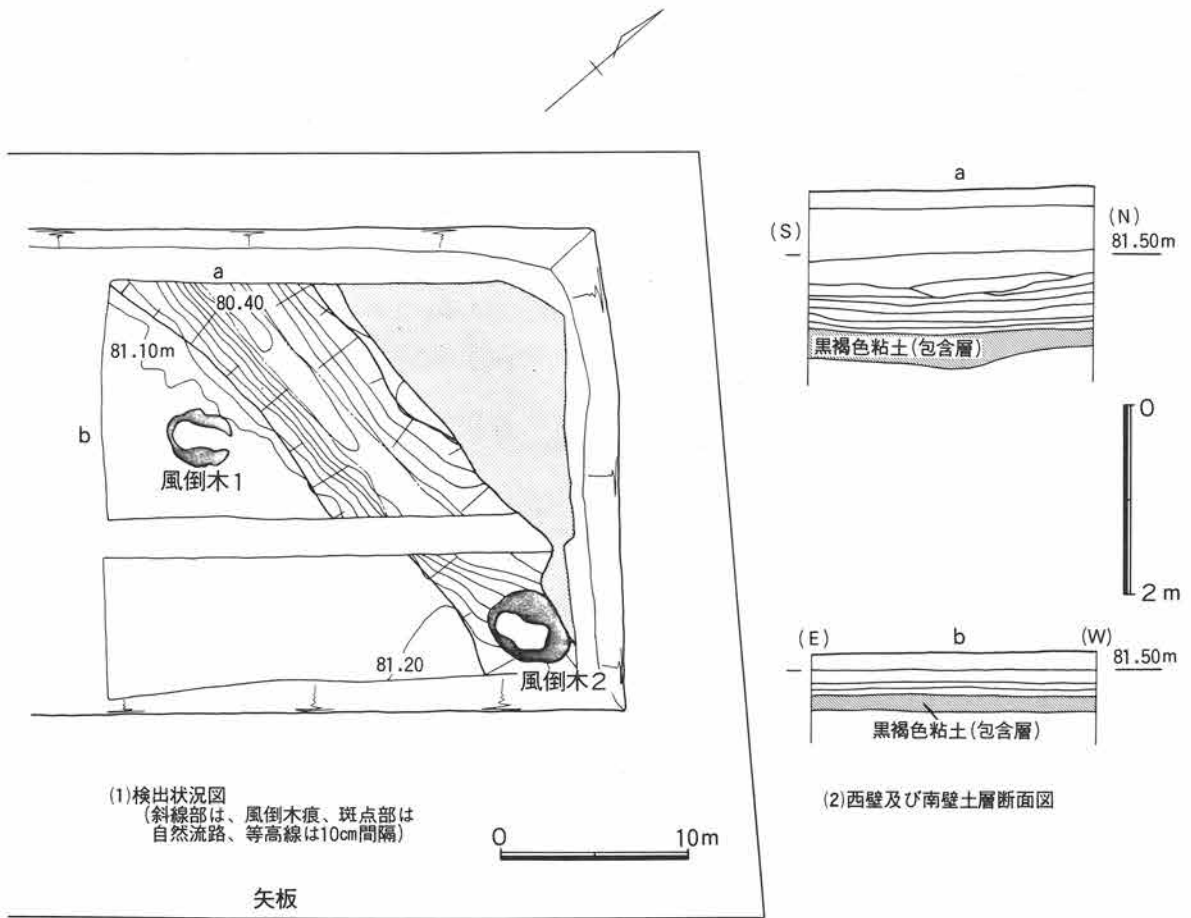


図31 津田江その1 (水門) 湖岸堤部B区検出状況図及び土層断面図

半が細片である。石器としてはサヌカイトやチャート製の石鏃、スクレイパーの他、チップ、フレイクも出土している。チップ、フレイクはある程度の地域的なまとまりを持って出土していることより、原位置を大きくは動いていないと思われる。(井上洋介)

(ロ) A区 (図30)

A区は比較的ヘドロの堆積が多いためその除去からとりかかった。ヘドロ下の基本層位は、黒褐色粘土・青灰色粘土・淡黒褐色粘土と続きその下層の黒褐色粘土が遺物包含層である。標高81.60~81.70mにあたりほぼ水平に堆積する。遺物は土器のみで調査区中央あたりにかたまっており、内水排除・南水門施設で検出されていた縄文時代前期の土器と同様のものである。

なお、調査区南及び東コーナーで風倒木痕が検出されたが埋土中から遺物等は出土しなかった。この検出面(青灰色粘土)は北から南へ若干の傾斜をもっている。

(イ) B区 (図31)

B区における基本層位もA区とほぼ同様であり、黒褐色粘土が遺物包含層である。検出高は81.30～81.40mで風倒木1の北面側を中心に検出され、縄文時代前期のものである。また、風倒木1の埋土内からも同時期の土器の他にチャート製の石鏃片が出土した。

調査区を東西に対角線状に横切る流路状の落ち込みが確認されたが、遺物等の出土はなく東側が低くなっている。津田江航路浚渫に伴う調査でも同様な落ち込みを確認している。

北コーナーでは三角形に砂レキの堆積が認められるが自然木以外、遺物等の出土はなく自然流路の一部と考えられる。土層断面観察によると包含層を明らかに切りこんでおり、この流路の形成は縄文時代前期以降と思われる。

以上の様な結果とこれまでの内水排除施設・南水門施設部分の調査結果と考え合わせるとこの一帯は、縄文時代早期末～前期頃にかけて森林として陸化し、人間の居住空間として利用されていたのではなかったかと思われる。

(吉田秀則)

4. お わ り に

昭和62年度調査区においても昨年度に引き続いて、縄文時代の遺構・遺物の出土をみた。周辺の調査区との対比でみる限り、この水門部分が津田江湖底遺跡の縄文時代前～中期の生活跡の中心に近い位置にあることは疑いない。しかしながら出土遺物に比して人為的遺構の少ない理由としては、一面に検出された風倒木痕が当時の生活面を攪乱しているためと推定される。その典型として、61年度に出土した壺と浅鉢を入れ子にした完形土器の出土状況があげられる。何らかの遺構におさめられていたであろうこの遺物も、平面的にも断面観察によっても風倒木痕の埋土中よりの出土であり、その性格を判断することは困難であった。

(井上洋介)

10. 湖岸堤津田江（その1） 津田江湖底遺跡

1. はじめに

調査対象面積は全長70m、幅30mの約2,100㎡である。

2. 調査の経過

調査区の東西両側辺に有孔管を埋設した際に、縄文時代後期の土器を包含する砂質（6層）が、No.67+40m以南で検出された。従ってこれより南では6層上面までで重機掘削を止めて、以下を人力により掘削することとした。

3. 調査の結果

土層はおおむね北から南へゆるやかに下る。縄文時代後期の包含層は北端部においては既に攪乱を受けていた。調査区の東南端で、この層より下層に津田江（その1-1）工区の遺物包含層であった7層が検出された。この層は南へ急激に落ち込んでいる。

北より広がる縄文時代前・中期の層では、風倒木痕が検出された。

4. おわりに

本調査の結果、津田江その1（水門）工区と湖岸堤津田江（その1-1）工区との層位関係が明確となった。

（井上洋介）

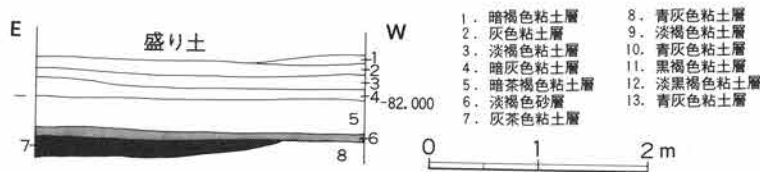


図32 湖岸堤津田江（その1）土層断面図（1）

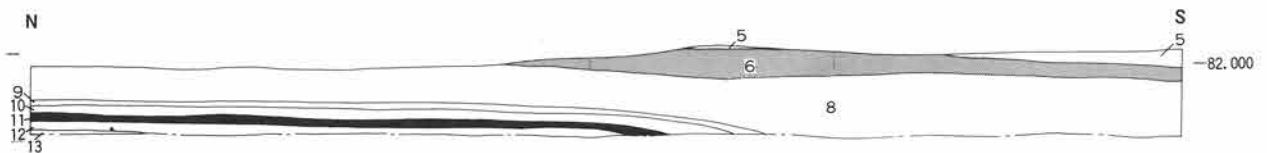


図33 湖岸堤津田江（その1）土層断面図（2）

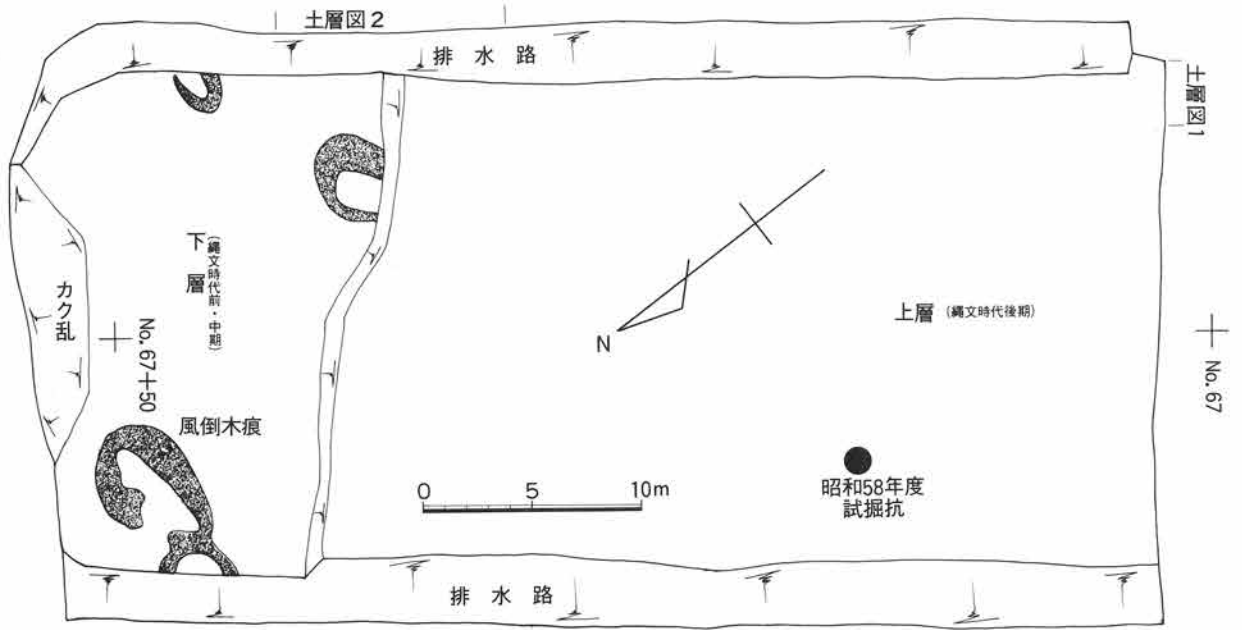


図34 湖岸堤津田江 (その1) 全体図

11. 湖岸堤津田江（その1-1） 津田江湖底遺跡

1. はじめに

調査対象面積は全長50m、幅30.4mの約1,520 m²である

2. 調査の経過

調査地を工事用道路の土盛りによって囲み、ドライ化して調査を実施した。なお西側工事用道路のみについては、大型車輛等の通行もあり、鋼矢板を打って補強が成された。工事側で標高82.7m付近までのヘドロ層と一部無遺物層を除去したのちに、現地調査に着手した。

低湿地であるため、まず調査地の東縁と南縁に有孔管を埋設して排水施設とした。この際に層位の確認を合わせて行ない、東南部の標高81.5m付近において流路状の砂層の堆積を発見した（SR-1）。この遺構を検出すべく図36の7層上面までバックフォーを用いて掘削し、以下人力により作業を行なった。下層よりの湧水と軟弱な地盤のために、遺構面の精査には困難を極める状況であった。

なおSR-1の存在する8層上面より下層には、津田江その1（水門）工区において確認された縄文時代前期を中心とする遺構・遺物の存在が考えられた。このため上層の調査終了後に部分的に掘り下げた結果、類似した層（11層）は存在するものの遺物の出土がなく、水平堆積を示すのみであった。

3. 調査の結果

層位は図36に示した。7層の下部において縄文時代後期の土器等を検出した。この層に

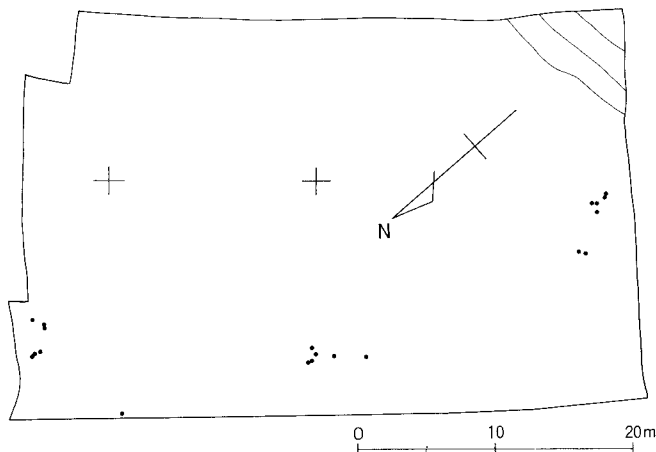


図35 湖岸堤津田江（その1-1）出土遺物分布図

は貝・動物遺体などの自然遺物も含まれている。

SR-1は東西方向に走る自然流路と考えられる。埋土中よりの遺物の出土はなかった。この流路の埋没後に縄文後期の包含層が堆積することにより、それ以前の時期のものである。その他の遺構は検出されなかった。

7層以外からの遺物の出土はみられなかった。なお京都産業大学に依頼した液体シンチレーション炭素年代測定の結果を図36に付記した。

4. お わ り に

本調査の結果、津田江湖底遺跡に縄文時代後期の遺物包含層が存在するという新知見を得た。その一方で北に広がる縄文時代前～中期の遺物包含層は当調査区までは続かないことが判明した。
(井上洋介)

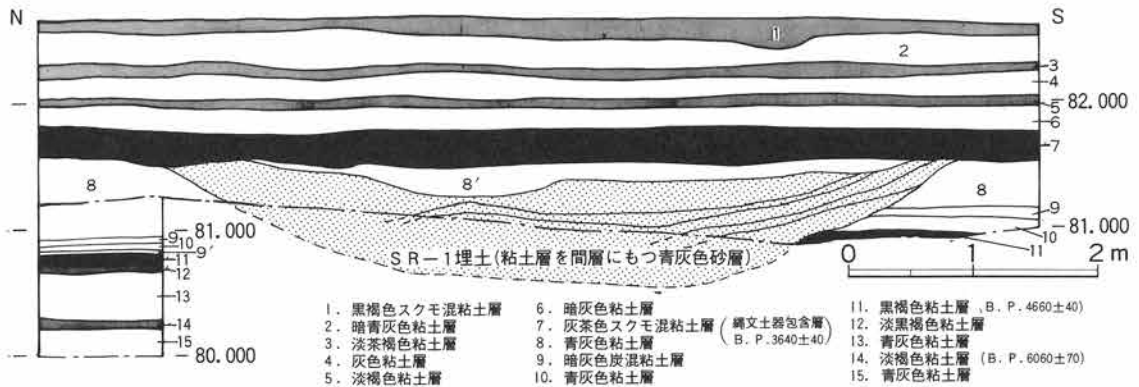


図36 湖岸堤津田江 (その1-1) 東壁土層断面図

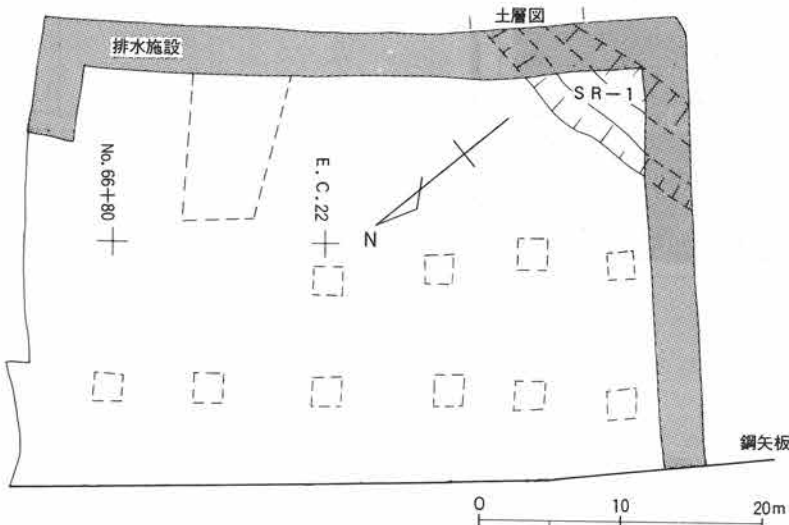


図37 湖岸堤津田江 (その1-1) 遺構・トレンチ位置図 (破線が下層掘削トレンチ)

12. 津田江その2（水門）外 津田江湖底遺跡

1. はじめに

津田江湖底遺跡は草津市下寺町津田江地先から、下物町地先の湖底に位置し、南は志那湖底遺跡、北は烏丸崎遺跡に接する。

2. 調査の経過

当遺跡は昭和58年度の潜水による分布調査で、湖底より縄文時代から近世までの遺物が出土したため、遺跡の存在が確認された。そして昭和61年度に湾内の3カ所で試掘調査をしたところ、縄文式土器や遺構が発見された。「津田江その2工区」では縄文時代前期末の大歳山式の土器群や埋没樹などが検出された。

3. 調査の内容

昭和61年度調査した水門工区のNo.72+85から残りの水門工区全域について幅10mのT B～T Fトレンチと、給水施設の給水槽及び給水管P1～P5について行なった。

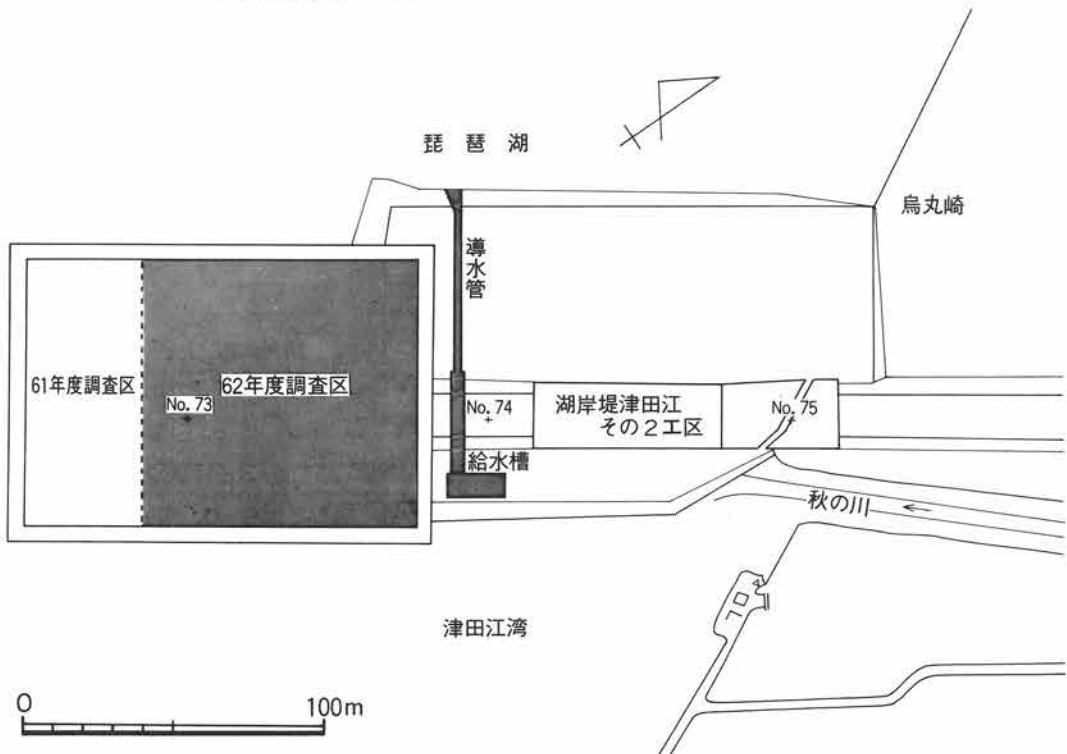


図38 津田江その2（水門）外トレンチ位置図

4. 調査の結果

遺構は土壙や流路、埋没樹、旧河道等を検出した。層位は琵琶湖側が砂層で陸側が粘土層を基本とし、包含層は黒褐色粘土（図40の17）であり、琵琶湖側には包含層は見られなかった。主な遺物は縄文時代中期初頭の浅鉢形土器、石鏃、石匙、凹石などが出土した。浅鉢形土器は口縁部を半截竹管による半隆起帯や三角形印刻文で施文し、胴部を半截竹管で縦方向に平行な沈線を施す北陸系の新保式土器で、県下では粟津湖底遺跡で出土しているC4類土器と類似する。

5. おわりに

以上の結果から、水面下3.5～3.8mの黒褐色粘土の状態で形成され縄文人の生活面と考えられる。

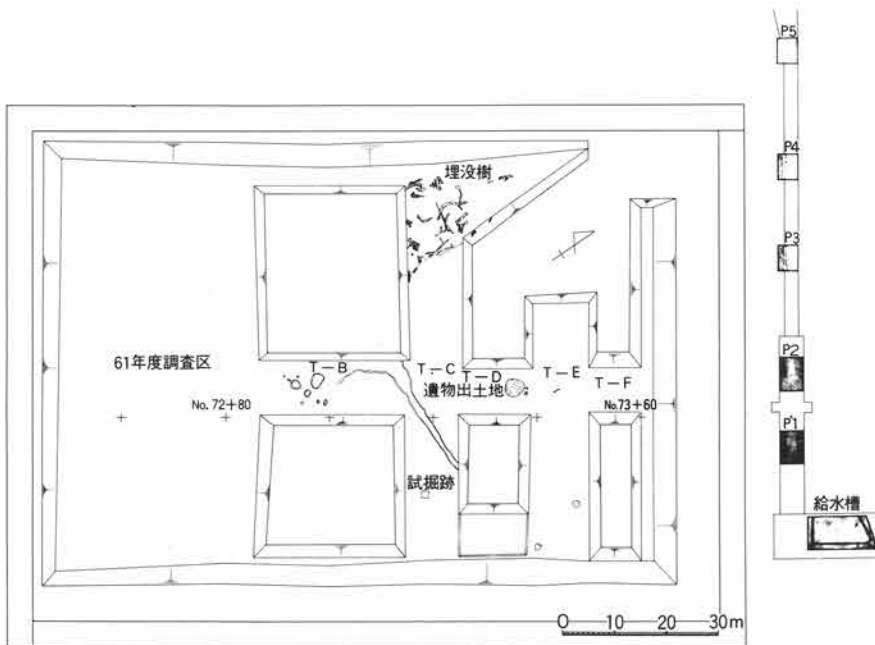


図39 津田江その2（水門）外遺構図

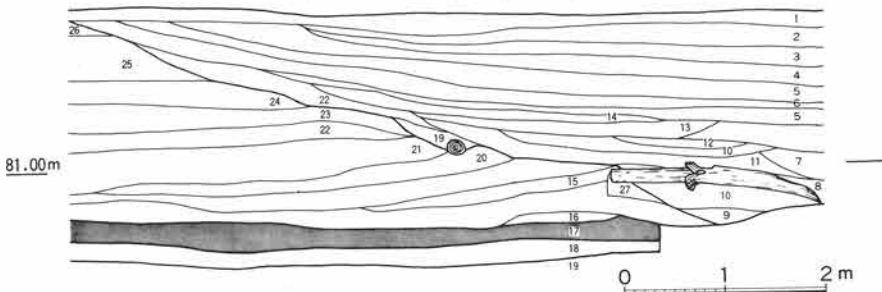


図40 津田江その2（水門）外Cトレンチ南側断面図

13. 湖岸堤津田江（その2） 津田江湖底遺跡

1. はじめに

津田江湖底遺跡は草津市下物町地先の琵琶湖に鳥の嘴状に突き出している烏丸崎に南接する。烏丸崎遺跡は琵琶湖総合開発に伴うストックヤードや湖岸堤建設のため、昭和59年から発掘調査が継続し、これまでに弥生時代の方形周溝墓が数十基、玉造工房2基などが発見されている。当調査は水資源開発公団の琵琶湖総合開発による「湖岸堤津田江その2」建設工事に伴う事前の発掘調査である。

2. 調査の経過

昭和59年度の湖岸堤の発掘調査で弥生時代の方形周溝墓・土壘などが検出され、遺構は更に南に広がると予想されていた。

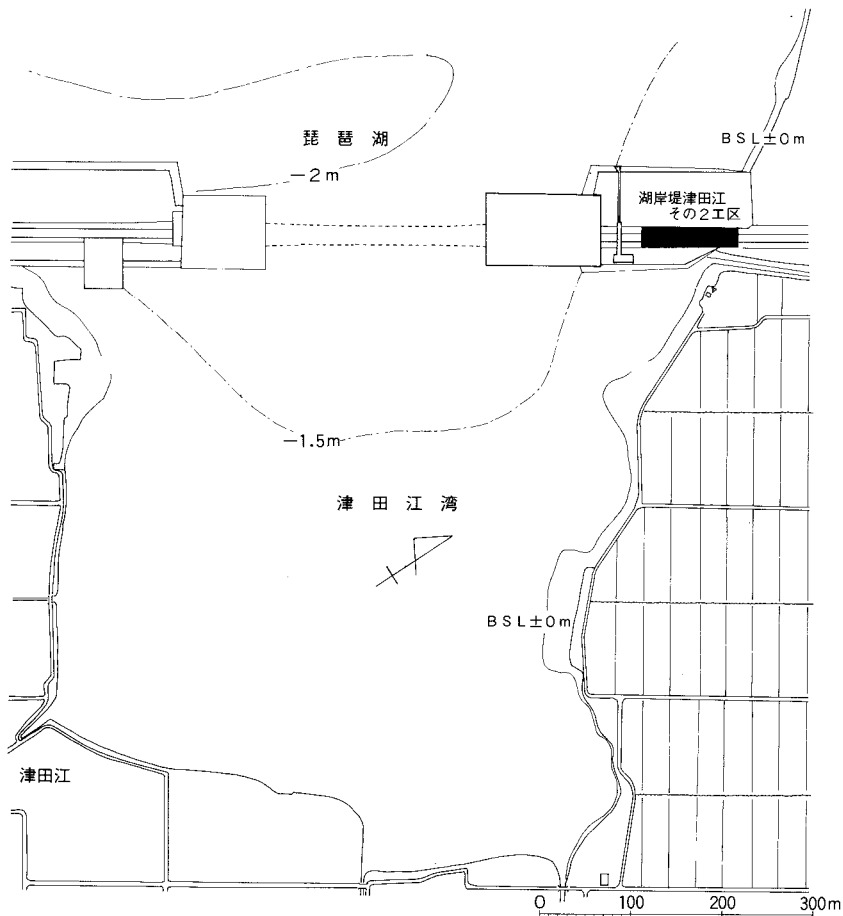


図41 湖岸堤津田江（その2）トレンチ位置図

3. 調査の内容

調査の範囲は湖岸堤No.74+15からNo.75+20までの105mで、No.74+80までの65mと、それ以後の40mについて鋼矢板を打ち替えて行なった

4. 調査の結果

TAトレンチの最下層から縄文時代の流路が検出された。TDトレンチでは弥生時代前期・中期の土壌・溝、やや時代の下がる溝などが検出され此迄の調査の関連が確認された。TCトレンチでは腐植土層（図43の1）を含むラグーン状の落ち込みや砂礫の小浜堤がみられ、旧汀線と思われる。土層は琵琶湖側では上層は水流の影響によるラミネーションがみられ、湖岸側では灰褐色や暗青灰色の土層に遺構が見られた。主な遺物は弥生時代前期中期の壺・甕・石斧・石鏃、古墳時代の須恵器・木器、宋銭などが出土した。

5. おわりに

烏丸崎遺跡の弥生時代前期の遺構や、その遺跡の南限が確認された他、津田江湖底遺跡の北限についても明らかになった。（濱 修）

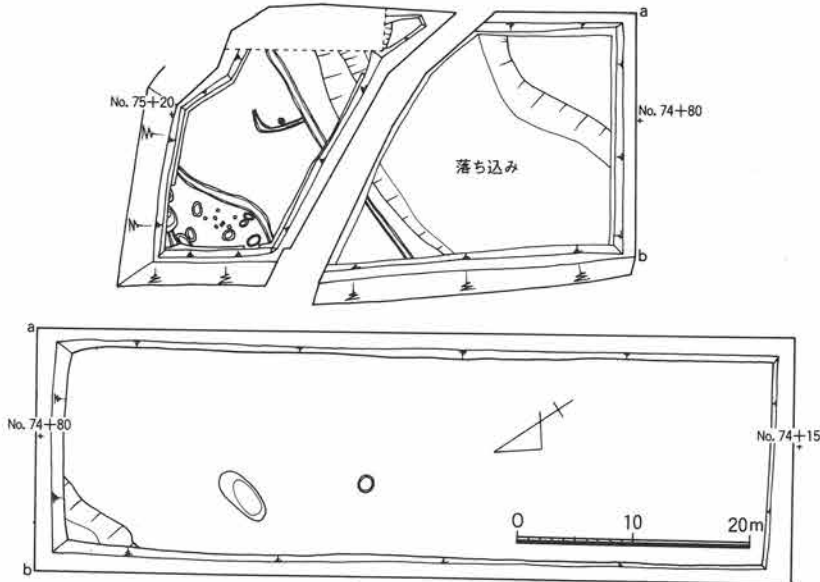


図42 湖岸堤津田江（その2）遺構図

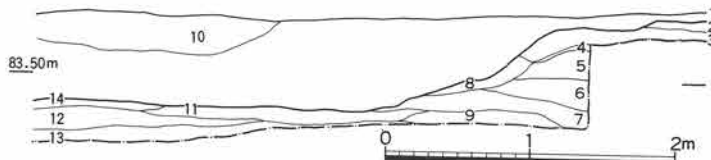


図43 湖岸堤津田江（その2）Cトレンチ西側断面図

14. 津田江給水施設外 津田江湖底遺跡

1. はじめに

津田江航路浚渫に伴う調査は今年度当初に潜水による試掘調査を実施し、その結果に基づき10月末より本格調査を行なった。

2. 調査の経過と結果

(1) 潜水試掘調査 (第1図)

沖合いから順に1～15のトレンチを30m間隔に設定し、それぞれ3×3mの範囲で層位ごとに遺構・遺物の確認を行なった。

(2) 本格調査

試掘調査に基づき遺物の確認された2・3ピットを中心に62.80×32.80mの範囲を鋼矢板によって仕切り本格調査を実施した。

矢板内の排水後、湖底面が軟弱なためパイロット道路を仮設し、重機による表土掘削からとりかかった。湖底面は、標高82.40m前後で暗茶褐色スクモが広がるが、湖岸側には認められない。基本層位はスクモ下に暗灰色粘土、黒褐色粘土①、淡灰褐色粘土、淡褐色砂と淡褐色土との互層、灰褐色粘土、黒褐色粘土②、淡青灰色シルトと続き、湖岸側から沖合い側へ若干

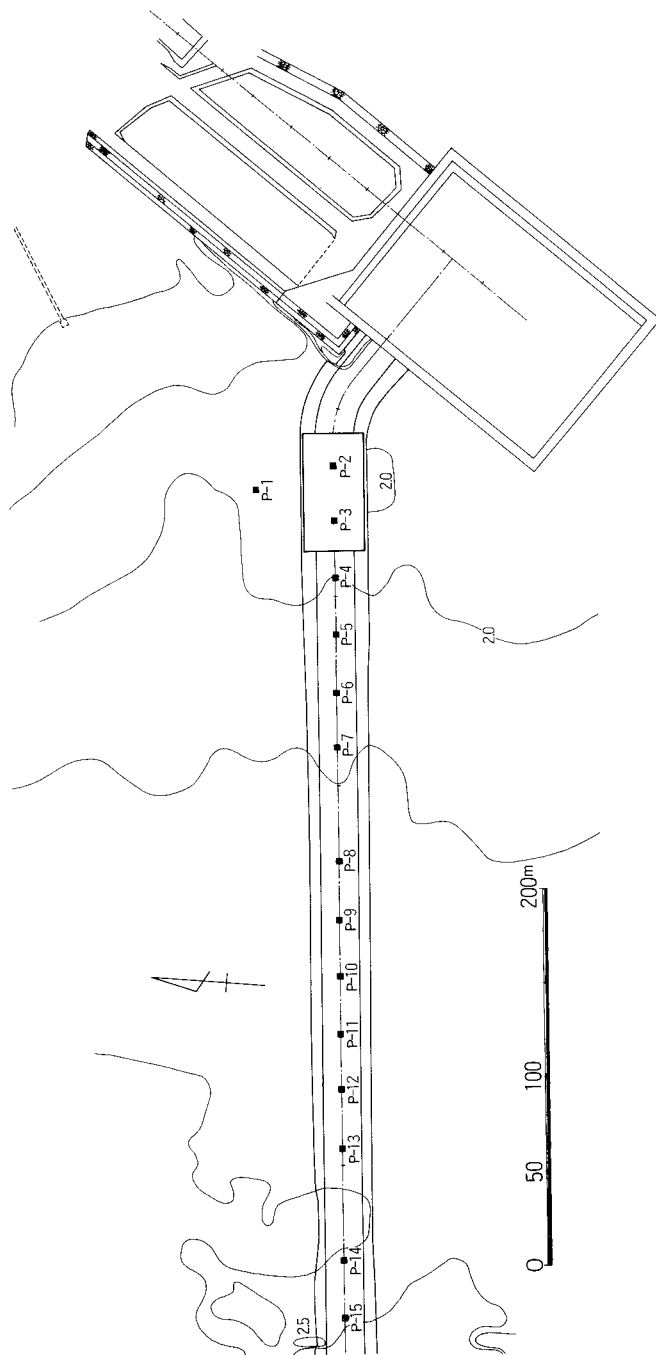


図44 津田江給水施設他トレンチ位置図

の傾斜をもって堆積する。

調査区内北西寄りコーナー周辺を中心に標高81.60～81.80m前後で茶褐色土（細砂が混じる）の堆積が認められ、ピット状の堆積部分より縄文時代後期の土器片が数点確認された。

また、20～30cm程度の厚さをもってほぼ全域に広がる黒褐色粘土②は試掘調査によって包含層と確認された層である。トレンチ2を

中心とした南西部でのみ縄文時代中期の遺物（土器・石錘）が検出され（図45）、検出高は標高80.75～80.85mを示し、層内の上面で出土している。この高さは赤野井湾遺跡における中期のものにくらべるとかなり低く、早期の高さに相当する。土器は口縁部がキャリパー形を呈し、半隆起線文を施す北陸地方の新保式に比定される。

遺物包含層除去後の淡青灰色シルト面で、調査区のほぼ中央を北東から南西方向へのびる流路状の落ち込みを確認したが、流路内からの遺物出土は認められず自然地形によるものかと思われる。

また、北西寄りコーナーでは包含層を切り込んだ砂の堆積が認められ、自然流路の一部と考えられる。なお、この砂層の土層断面観察により噴砂が確認されている。

以上のように津田江湖底遺跡周辺では、これまでに津田江地先・下物地先の広い範囲で調査が実施され、点的ではあるものの貴重なデータが得られており、今後これらを集約して面的な視野から検討を加える必要がある。

（大沼芳幸・吉田秀則）

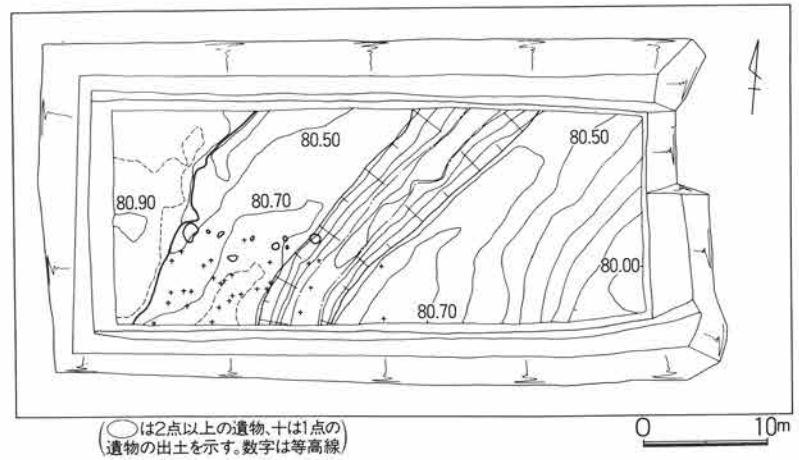


図45 津田江給水施設他土器検出状況図

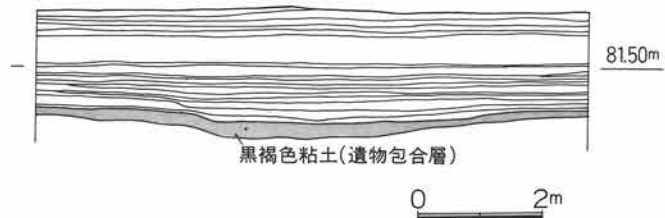


図46 津田江給水施設他落ち込み部基本層位

15. 津田江航路浚渫 津田江湖底遺跡

1. はじめに

今回調査を実施したのは、草津市津田江町、津田江湾の沖合約1.2km～1.8kmにかけての湖底である。津田江湾を横断する形で実施された湖岸堤関係調査からの知見によれば、湾口部には、縄文時代を中心とする遺構、遺物が分布することが知られている。また、北側に位置する烏丸半島からは、弥生時代の玉造工房跡や、方形周溝墓群等が検出されている。

2. 調査経過

調査の目的である津田江湾沖合湖底における遺跡分布の把握をはたすため、今回は潜水による試掘調査を実施することとし、航路法線上に設定した3m×3mの調査区10ヶ所について現地調査を実施した。潜水調査に用いる掘削法としては現在、エアリフト工法と、ジェットリフト工法があるが、今回は水の突出力を利用して湖底の土砂を吸い上げるジェットリフト工法を用いた。調査においては、トレンチ掘削および遺物採取作業後、トレンチ断面の実測および、写真、ビデオによる記録作業を順次実施した。

3. 調査の結果

調査の結果、調査した10ヶ所の調査地のうち8ヶ所までが攪乱を受けていることが判明した。このことから、図47にみられるような激しい湖底の凹凸は、砂利採取等に伴う浚渫によるものと判断される。自然土層の堆積が認められたP-1、3については、今回の調査に先立ち実施した津田江給水施設外建設に伴う潜水調査で観察された層位とほぼ一致し、第一層目には暗茶褐色のスクモ層が、第二層には灰褐色の砂層が、第三層には灰褐色の粘土層が認められる。P-1、3とも最上層から、流入物と考えられる遺物が少量出土した他には遺物の出土は認められなかった。それに対し、攪乱を受けていた調査地のうち、P-6、10をのぞくすべての調査地の攪乱土中から、縄文土器、土師器を中心とする遺物が検出されている。

4. おわりに

調査地10ヶ所のうち8ヶ所までが後世の攪乱を受けていたことから、津田江湾沖合における遺跡の広がり確認という当初の目的は充分にははたし得なかった。しかし、攪乱土

中からの遺物の出土は、かつてこの付近に遺物を包含する層位のあったことを裏付けており、今後、湖底遺跡の分布、成因等を考える上で重要な手掛りとなろう。（大沼芳幸）

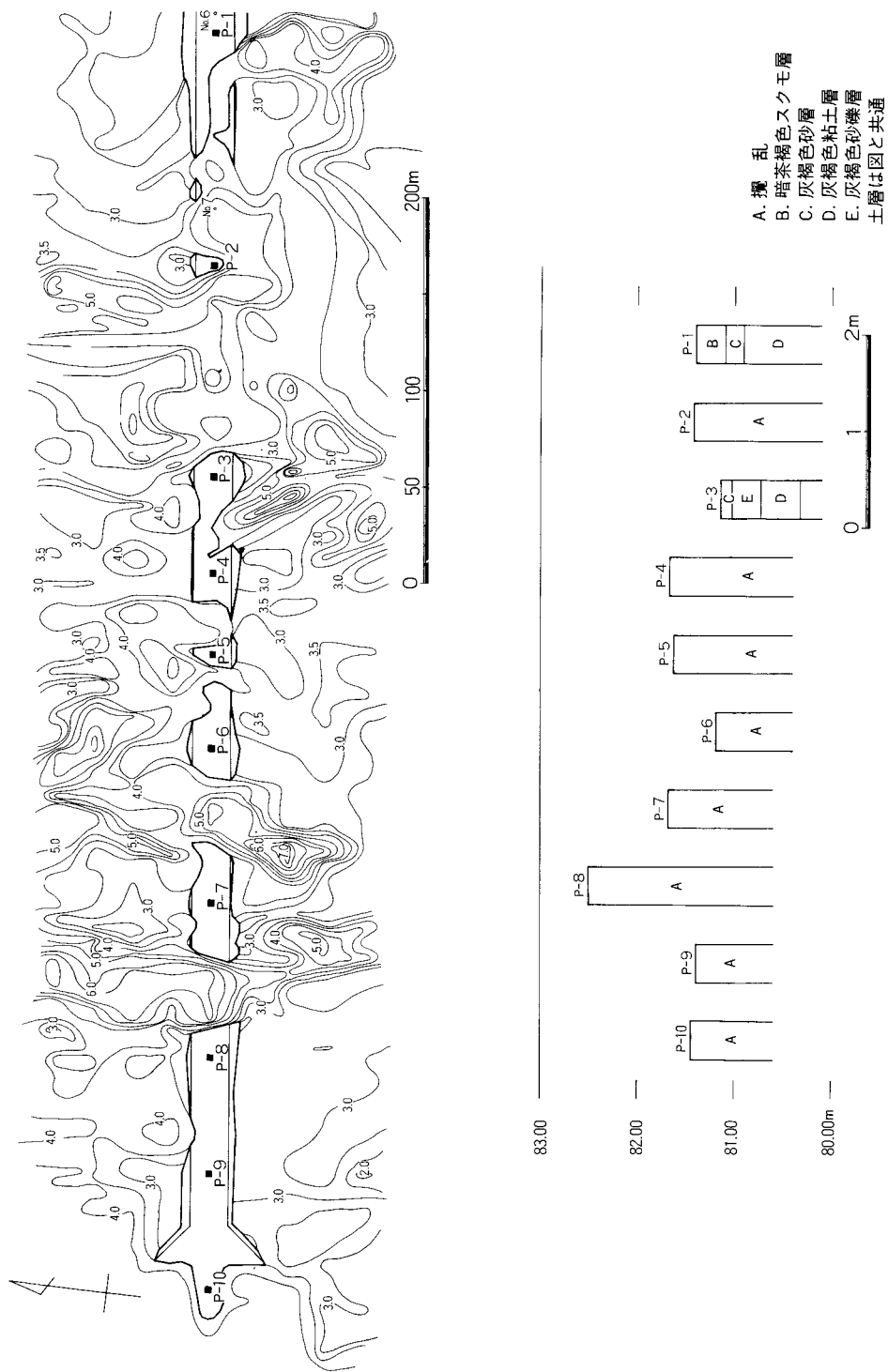


図47 津田江航路浚渫トレンチ位置図および土層柱状図

16. 新守山川その1・その2・その2-1 小津浜遺跡

1. はじめに

小津浜遺跡は、野洲川から分流した守山川・山賀川・境川などの小河川が琵琶湖へ流入する直前に形成した数多くの自然堤防上の1つに立地する。遺跡の範囲は琵琶湖の現汀線から上流へ約500 mである。

小津浜遺跡は、新守山川改修工事に先立つ昭和58年度の試掘調査で、その存在が知られた。つづく、昭和59年度の2号橋～4号橋の調査により、3号橋から多量の弥生時代前期の遺物が出土して注目を浴びた。この時点では、部分的な調査でもあり、山賀遺跡の一部として捉えられていたが、その後の調査の結果、弥生時代前期から中期までを主体とした小津浜遺跡として認識されるに至った。新守山川改修に伴う調査が行なわれた山賀遺跡・杉江遺跡では、平安時代中期から鎌倉時代を経て室町時代前期に至る大集落の一部を検出しており、すでにその成果の一部が報告されている。

今回の調査では、弥生時代前期から中期を主体とする遺構・遺物を検出した。周辺の同時期の遺跡としては、赤野井浜遺跡・寺中遺跡・赤野井遺跡・烏丸崎遺跡・服部遺跡があげられる。いずれも弥生時代前期からの集落であり、野洲川下流域の農耕社会の開始を考えるうえで重要である。

2. 調査の経過

今回の調査区は、工事用基準杭No.2+60m～No.5+50mを小津浜遺跡その1、No.1+60m～No.2+60mを小津浜遺跡その2、No.0+75m～No.1+60mを小津浜遺跡その2-1、No.0～No.0+75mを小津浜遺跡その2-2とした。ここではその1・その2・その2-1の調査概要について述べる。なお、その2-1は上流樋門部を含む。

3. 調査の結果

基本層位：調査区の現地表面は標高85.5～85.6mで、弥生時代中期の遺構面は、約83.7mを計る。この間、約1.8mは遺物をほとんど含まない湿田耕土、灰色粘土、淡灰色粘土である。弥生時代中期の遺構面は、前期の遺構面上に堆積した黒灰色泥土の包含層上面である。中期の遺構のなかでも、最も新しい遺構である方形周溝墓群は、20～30cmの盛土を残しているものがある。弥生時代前期の遺構群は、青灰色粘土もしくは青灰色砂質土上面



- | | | |
|-----------|------------|------------|
| 1. 山賀遺跡 | 13. 石田三宅遺跡 | 25. 中島遺跡 |
| 2. 小津浜遺跡 | 14. 杉江北遺跡 | 26. 欲賀城遺跡 |
| 3. 杉江遺跡 | 15. 小津神社遺跡 | 27. 欲賀寺遺跡 |
| 4. 赤野井湾遺跡 | 16. 杉江東遺跡 | 28. 冬塚古墳 |
| 5. 弘前遺跡 | 17. 昌寿院遺跡 | 29. 欲賀南遺跡 |
| 6. 赤野井浜遺跡 | 18. 仁願寺遺跡 | 30. 薬師堂遺跡 |
| 7. 観音寺遺跡 | 19. 正楽寺遺跡 | 31. 三宅城遺跡 |
| 8. 寺中遺跡 | 20. 山賀西遺跡 | 32. 横江遺跡 |
| 9. 布施野城遺跡 | 21. 森川原遺跡 | 33. 大門遺跡 |
| 10. 赤野井遺跡 | 22. 欲賀遺跡 | 34. 金ヶ森城遺跡 |
| 11. 狐塚遺跡 | 23. 三宅北遺跡 | 35. 金ヶ森遺跡 |
| 12. 石田遺跡 | 24. 金ヶ森西遺跡 | 36. 古高遺跡 |

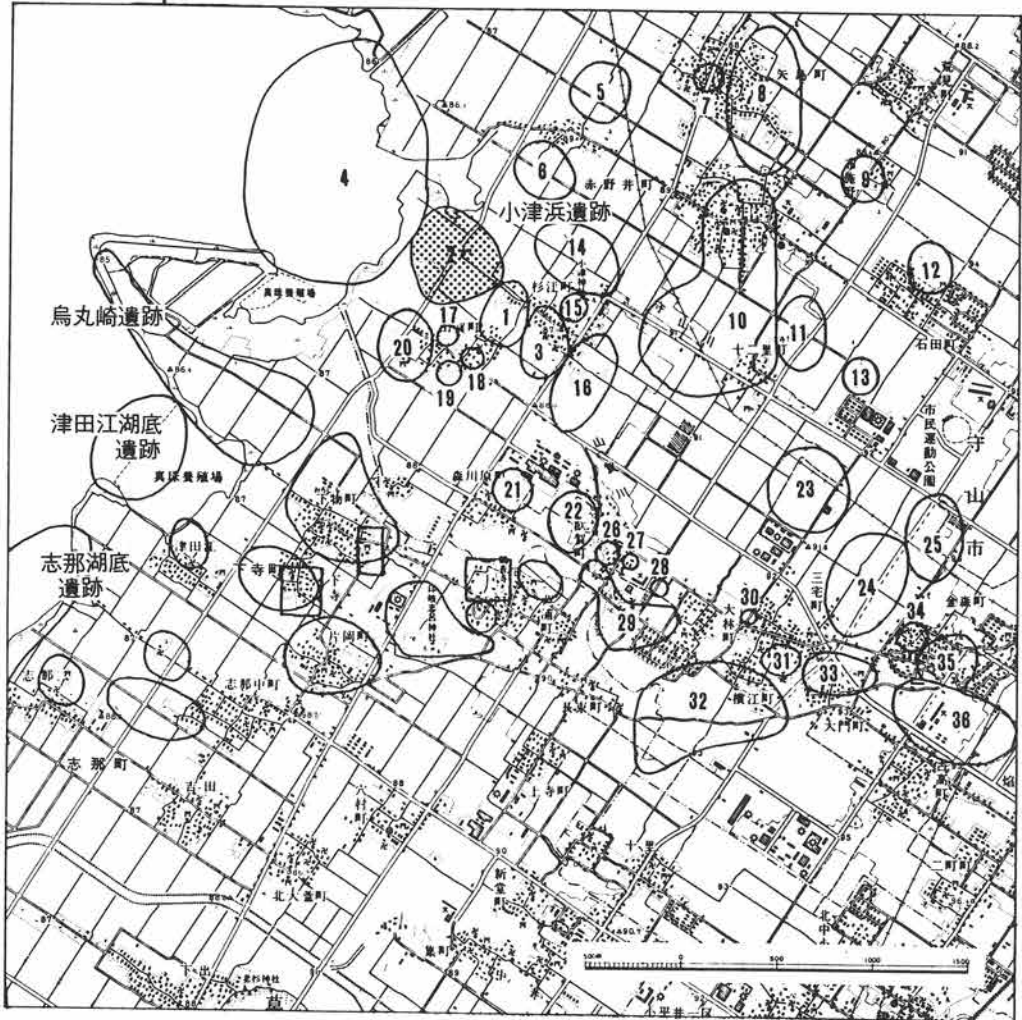


図48 新守山川遺跡分布図



図49 新守山川調査区位置図

において検出された。なお、中期の遺構面において、後期の溝2条も検出している。

遺構：今回の調査で検出した遺構は、弥生時代前期から中期にかけてのピット群、土壌群、溝、自然流路、沼沢地、方形周溝墓群、畦状遺構、古墳時代から平安時代にかけての自然流路などがある。弥生時代前期～中期の居住区は3号橋以西の10～50mに集中する。方形周溝墓群は30～100mの範囲にある。居住区以西の50～180mは、水田として利用していた可能性が高い。

(ピット群) 沼沢地とSD6に囲まれた範囲に密集して分布しており、この部分が自然堤防上であり、弥生時代前期から中期の居住区として継続的に利用されている。ピット群は前期と中期のものが混在する。その大半が径30～40cm、深さ60cm前後で、ピット底に礎板と考えられる木質を残存するものがある。これらピット群が、竪穴住居の柱となるか、掘立柱建物となるかは今後の検討課題である。居住区の東半は平安時代の自然流路によって流失しているが、さほど拡がらず、北東方向に居住範囲が拡がる。

(土壌群) 居住区内でピット群に混在している。プランは、長方形、円形、不整形円形など様々で、埋土内に炭化物を含むものが多い。長方形で垂直に掘り込まれたもののなかに炭化米を出土したものがある。

(SD1) 弥生時代後期の溝で、幅1.1 m、深さ0.4 mを計る。同時期のSD2より分水して南北方向に流れる。

(SD2) 幅1.9 m、深さ0.6 mを計る東西溝である。SD1などの支線水路へ水を供給する幹線水路と考えられる。埋土中には砂層があることから、かなりの水流があったことがうかがえる。出土遺物として弥生時代後期の土器が少量認められており、後期の居住区からはある程度離れた水田の用排水路としての機能が考えられる。

(SD6) 弥生時代前期の居住区を画したと考えられる溝で、幅1.8 m、深さ0.6 mを計る。沼沢地へ流入もしくは、沼沢地から流出しており、溝の断面の形状からも、前期の水田の用排水路と考えられる。埋土中からは多量の土器が出土している。

(SD8) SD12によって削平されているが、幅約3 m、深さ1.3 mを計る大溝で、弥生時代中期の居住区を画するかのよう、ゆるやかな弧を描いている。

(SD11) 自然流路5に流入する弥生時代前期の大溝で、幅2.1 m、深さ1.2 m、検出延長60mを計る。溝の断面は逆台形で、埋土内より、前期中段階を主とした多量の土器や木製品、炭化米などが出土した。SD11とともに、小津浜遺跡の弥生時代前期の水稻耕作を実証する遺構である。

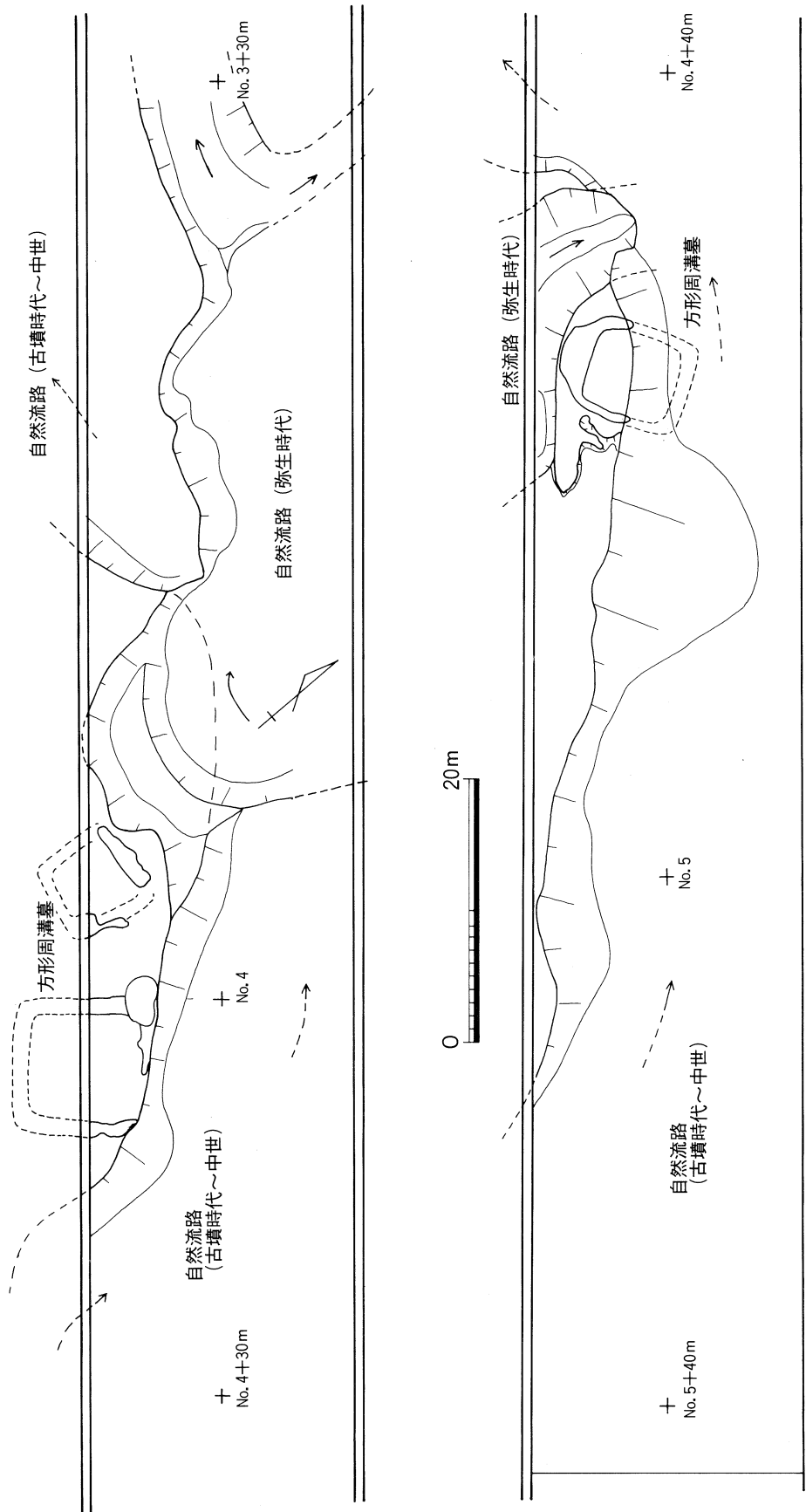


図50 新守山川遺構平面図 (1)

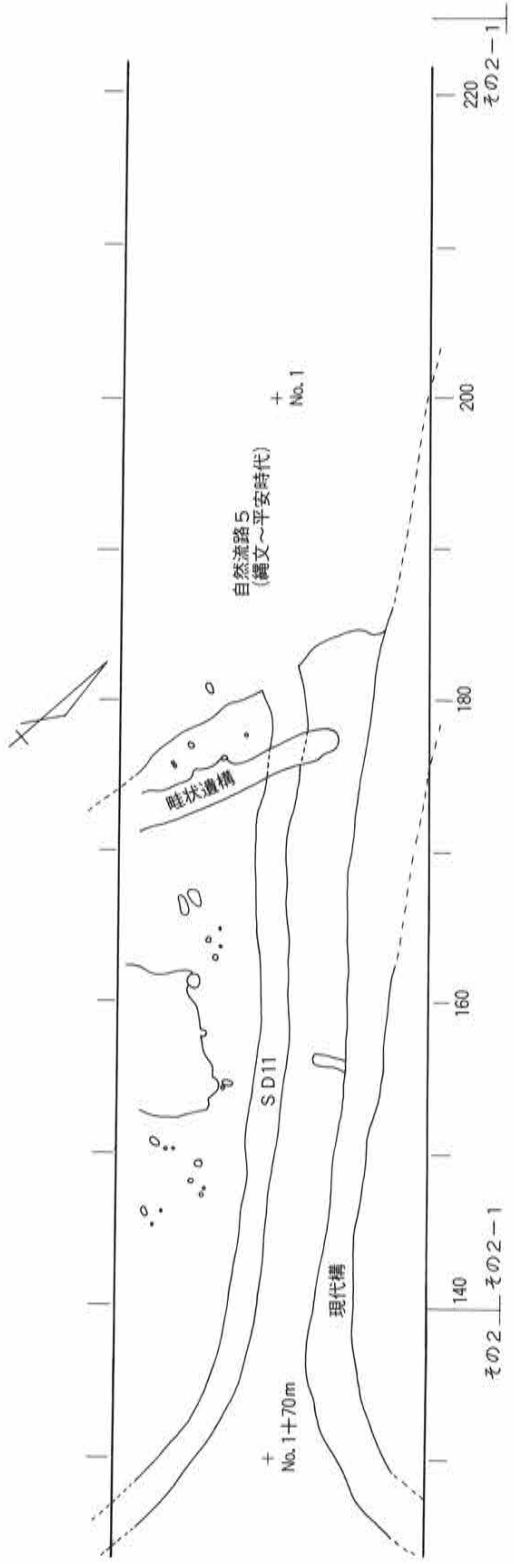
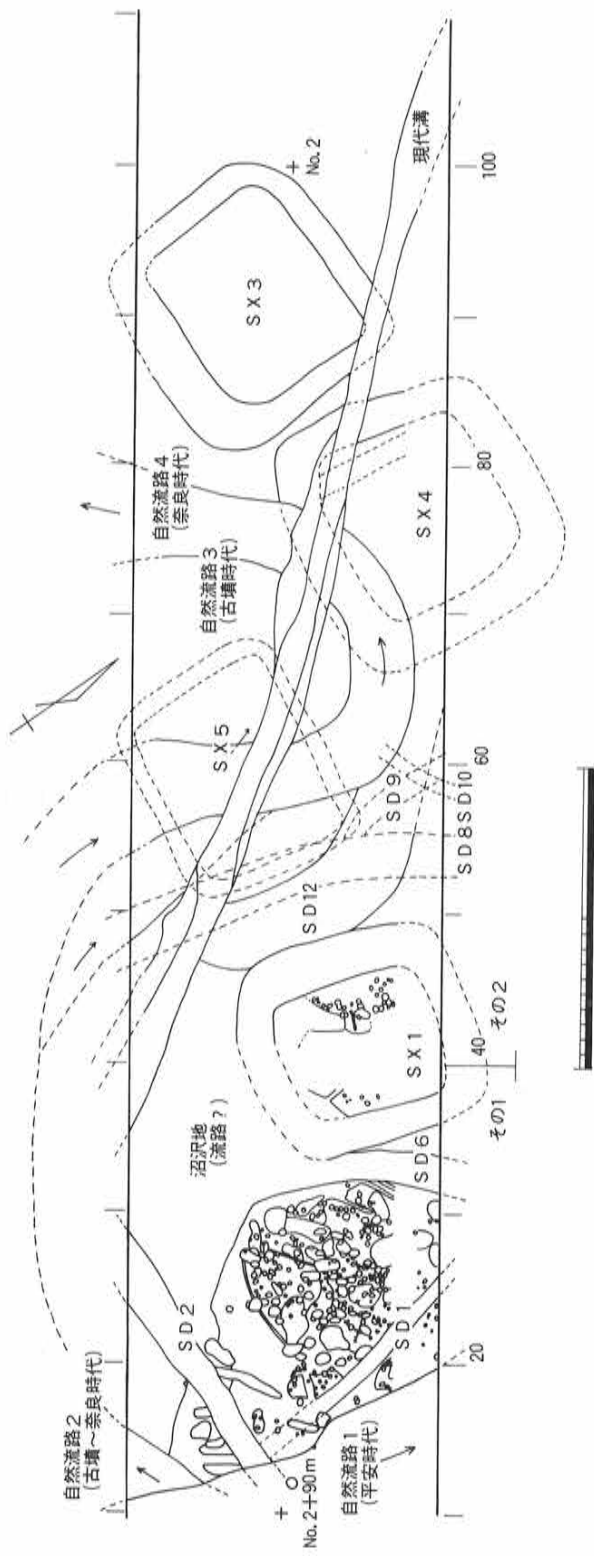


図51 新守山川遺構平面図 (2)

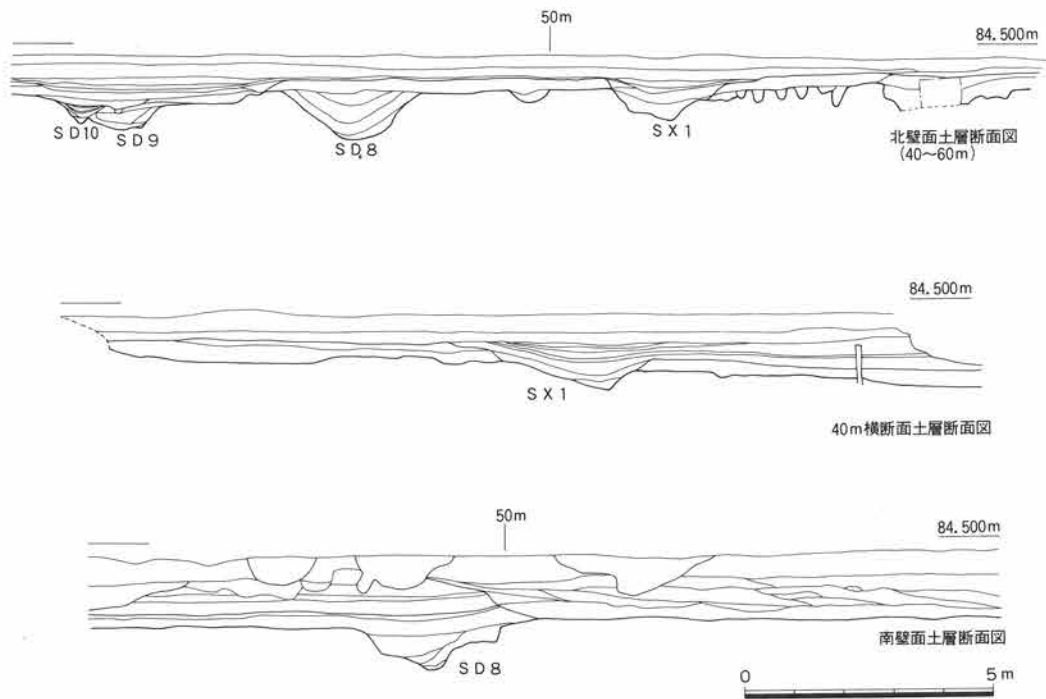


図52 新守山川土層断面図 (部分)

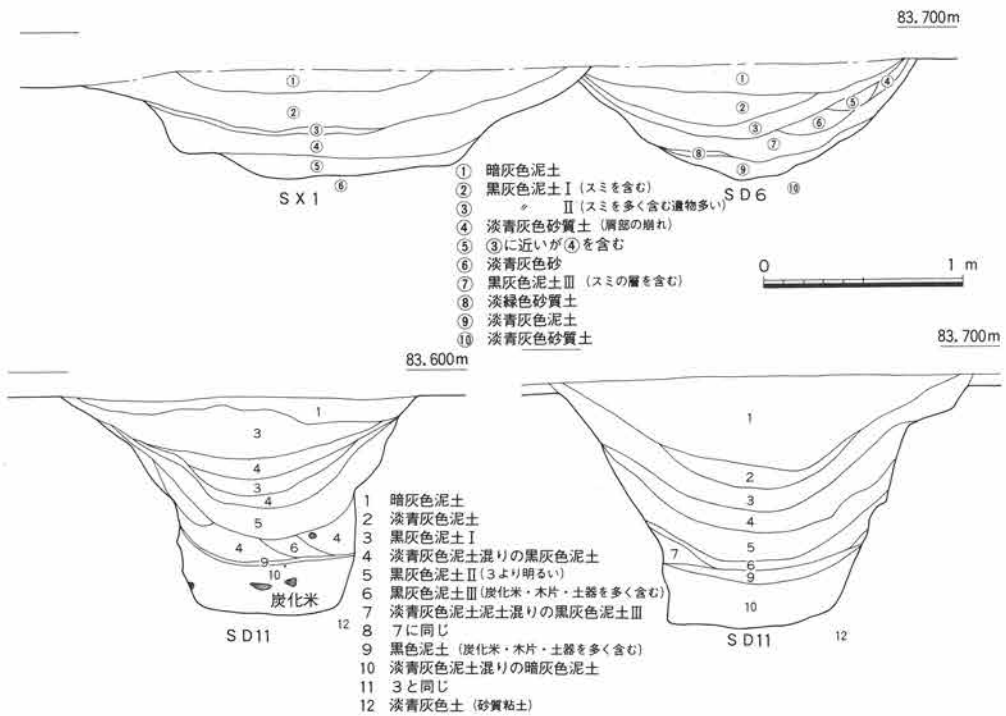


図53 新守山川SX1・SD6・SD11土層断面図

(自然流路1) 新守山川とほぼ重なりあう流路で、工事用基準杭No.5 付近からNo.3 付近の間で検出した。埋土は砂で、山賀川の前身となる流路の分流と思われる。埋土内から、10世紀後半の土器群が出土した他、卒塔婆1点が出土している。

(自然流路2) 自然流路1に切られて一部を検出したのみであるが、古墳時代時期から奈良時代の遺物を含んでいる。遺物量は多くない。

(自然流路3) 弥生時代中期の方形周溝墓(SX5)を削平して50~80mの範囲で大きく蛇行して流れる古墳時代後期の自然流路で、流路1に先行する旧山賀川の分流と思われる。比較的多くの土器の他、木製品を含む。

(自然流路4) 自然流路3の蛇行部と重複して流れる奈良時代の流路である。検出面で、幅4m、深さ0.5mを計る。奈良時代の遺物は少ない。

(自然流路5) 今回の調査区のなかでは最も琵琶湖汀線近くで検出した流路で、縄文時代晩期・弥生時代前期~中期・弥生時代後期~古墳時代前期・古墳時代中期~後期・奈良時代~平安時代後期の各時代の流路が重複している。とりわけ、古墳時代中期~後期の流路の西肩部からは、土師器小形壺・須恵器杯の完形品多数とともに、鉄鎌3点・刀子1点が出土した。

(沼沢地) 居住区の南側の落ち込みで、弥生時代前期から中期の遺物を多量に包含していた。土層堆積は、上から暗灰色泥土・黒灰色泥土(上半)・黒灰色泥土(下半)・灰色砂質土で、とくに黒灰色泥土(上半・下半)からの出土量が多かった。

(SX1) 弥生時代中期の方形周溝墓で、東西8.7m、南北約10m、周溝の幅2.4m深さ0.8mを計る。東辺の周溝内中層からは、穿孔のある鉢をはじめとする多量の土器が出土した。

(SX3) SX1と同時期の方形周溝墓で、東西12m、南北10.5m、周溝の幅2.2m、深さ0.8mを計る。今回の調査で検出した周溝墓のなかでは最大規模である。周溝内からは供献土器の出土はなかった。

(SX4) SX1・3と同時期の方形周溝墓で、南西部のみを検出した。北半部は調査区外、南東部は自然流路3・4によつて流失している。

(SX5) SX1・3・4と同時期の方形周溝墓で、上半を自然流路3・4によつて流失しており、周溝下半のみが残存している。規模は東西約12m、南北約10mを計る。周溝内からは供献と考えられる壺・甕が出土している。

(畦状遺構) 自然流路5の東岸に流路と平行して幅2m、高さ0.2mの規模で、15mにわ

たつて検出した。水田の畦畔もしくは、流路の堤としての機能が考えられる。

樋門1：弥生時代中期の溝2条が直交する。上半は平安時代以降の落ち込みによって削平されていた。溝が方形周溝墓の周溝と確認することはできなかった。他に、長方形の土壇を調査区南西端で検出した。

樋門2：調査区全域が奈良時代から平安時代の自然流路内であった。

No.3～No.5 +50m：前年度の調査成果と一部重複した記述となるが、3号橋以东における今年度の調査成果をふまえて記すと、上層遺構として古墳時代から中世にかけての自然流路が、新守山川の河川敷にほぼ重複して検出された。その一支流が、3号橋以西で検出した自然流路1～5となる。この自然流路は弥生時代の方形周溝墓等の遺構面を流失させながら蛇行して流れている。川幅は約30m、深さ2m以上になると予想されている。自然流路内の埋土は上層が灰色系粘土、下層が灰色系砂層で、遺物は主に下層から出土した。出土遺物は、6世紀、10世紀、13世紀の土器類が多い。他に、刀子・鎌等の鉄器類、木器

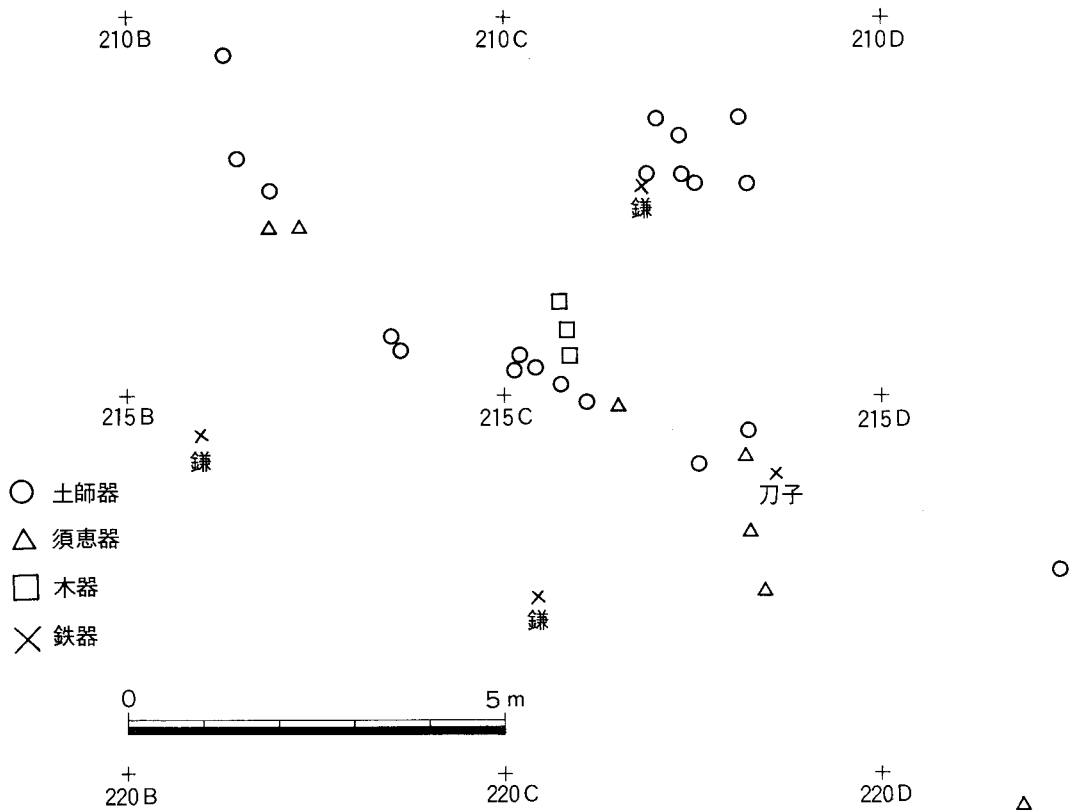


図54 新守山川自然流路5 遺物出土状況 (古墳時代中期)

類がある。

下層遺構としては、上層の自然流路とほぼ重複する縄文時代晩期から弥生時代中期の自然流路がある。埋土内からは多量の弥生時代前期から中期にかけての土器・石器・木器が出土した他、最下層から縄文時代晩期の土器が出土している。また、一部残存した弥生時代の生活面には、方形周溝墓が築造されていた。樋門1の遺構が方形周溝墓であるとするならば、弥生時代の自然流路の左岸にも方形周溝墓群が存在することになる。

遺物：調査区全域の遺構・包含層から、縄文時代晩期から平安時代後期の遺物を多量に出土した。とりわけ、弥生時代前期から中期にかけての沼沢地からの出土が多い。時期別にみると、弥生時代前期から中期前半にかけての遺物が全体の出土量の8割以上を占める。つづいて、古墳時代中期から後期の遺物、平安時代後期の遺物が多い。種類別にみると、弥生土器を中心とした土器類が大半を占めるが、自然流路が多いため、木器にも多種多様なものがみられる。また、石器は、弥生時代前期から中期にかけての大型蛤刃石斧・石包丁が比較的多い他、磨製石剣片や異型石器、石鏃など多種多様なものが認められる。鉄器についても、古墳時代の鎌・刀子などが注目される。

出土遺物のうち、弥生時代前期の土器に混在して東海地方において特徴的な条痕文系土器が、自然流路、溝11などから出土している。また、条痕文系土器とほぼ同じ割合で縄文時代晩期の土器が出土している。

4. お わ り に

今年度までの小津浜遺跡の調査では、弥生時代前期から中期にかけてのピット・土壇群からなる居住区、方形周溝墓7基、溝12条以上、自然流路多数、弥生時代後期の溝2条、古墳時代の自然流路、平安時代中期から鎌倉時代前期の自然流路などが検出された。とりわけ、弥生時代前期の遺構・遺物が多いことが注目される。以下に主な成果を挙げてみる。

- ・弥生時代前期から中期にかけて居住区が検出された。
- ・弥生時代中期の方形周溝墓群が2群7基検出された。
- ・弥生時代前期の溝2条が検出され、近江における農耕開始期の水田開発状況の一端が明らかになった。
- ・調査区各遺構から多量の遺物が出土しており、とくに弥生時代前期から中期の土器様相を考えるうえで貴重な資料となる。

(岡本武憲)

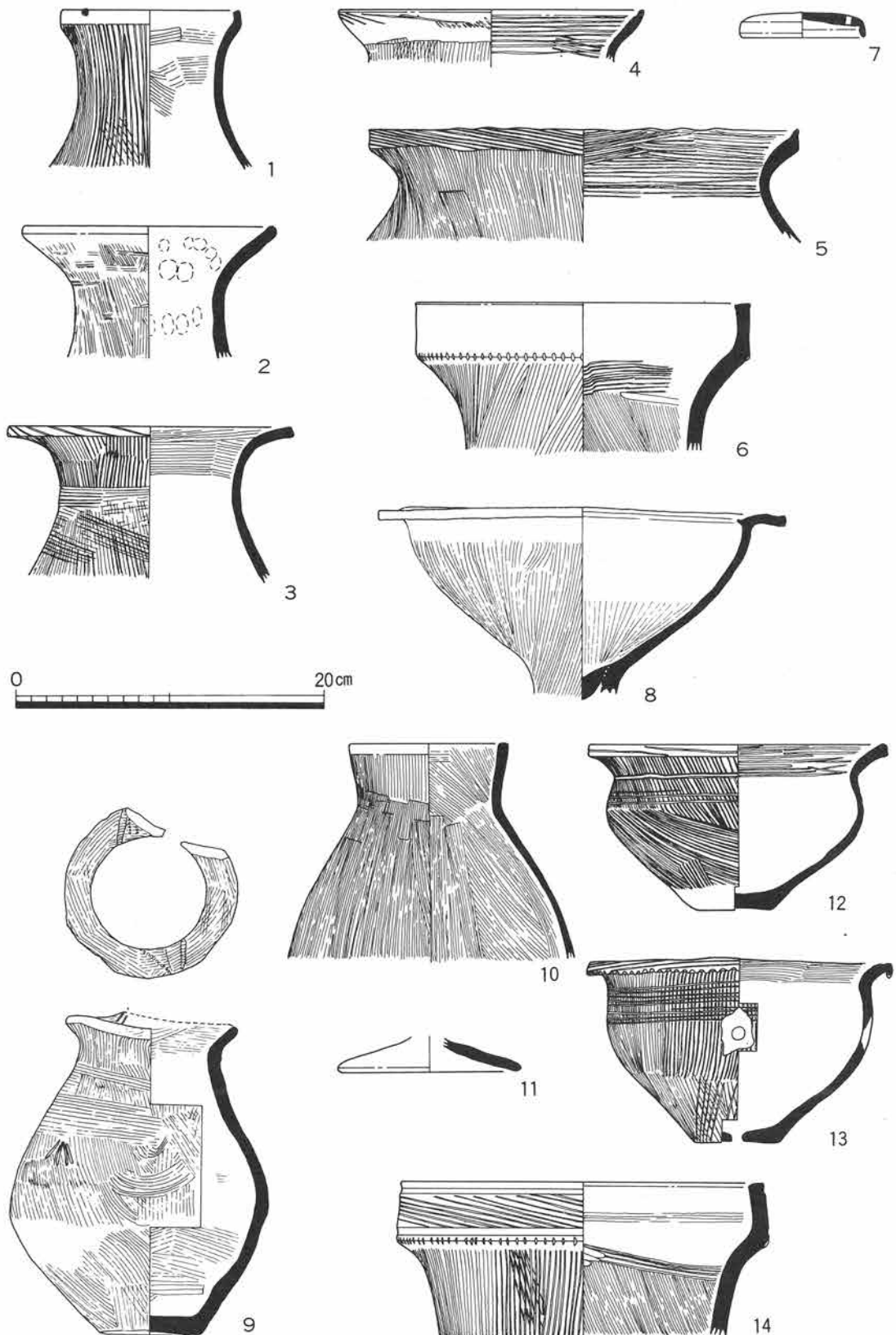


图55 新守山川S X 1 出土遗物实测图

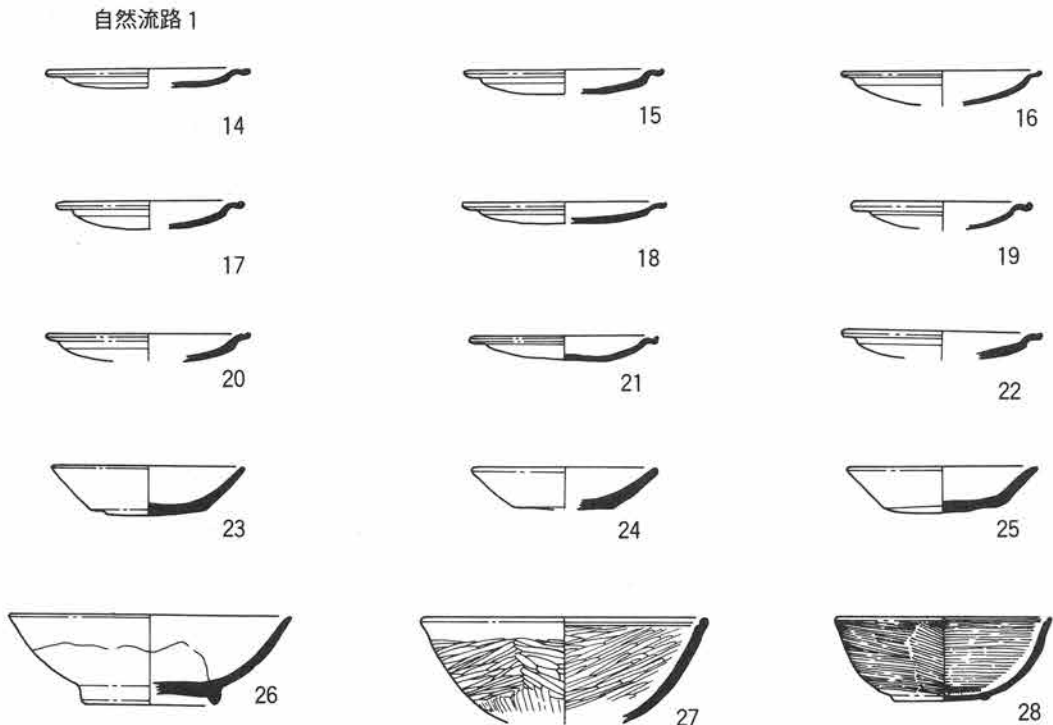
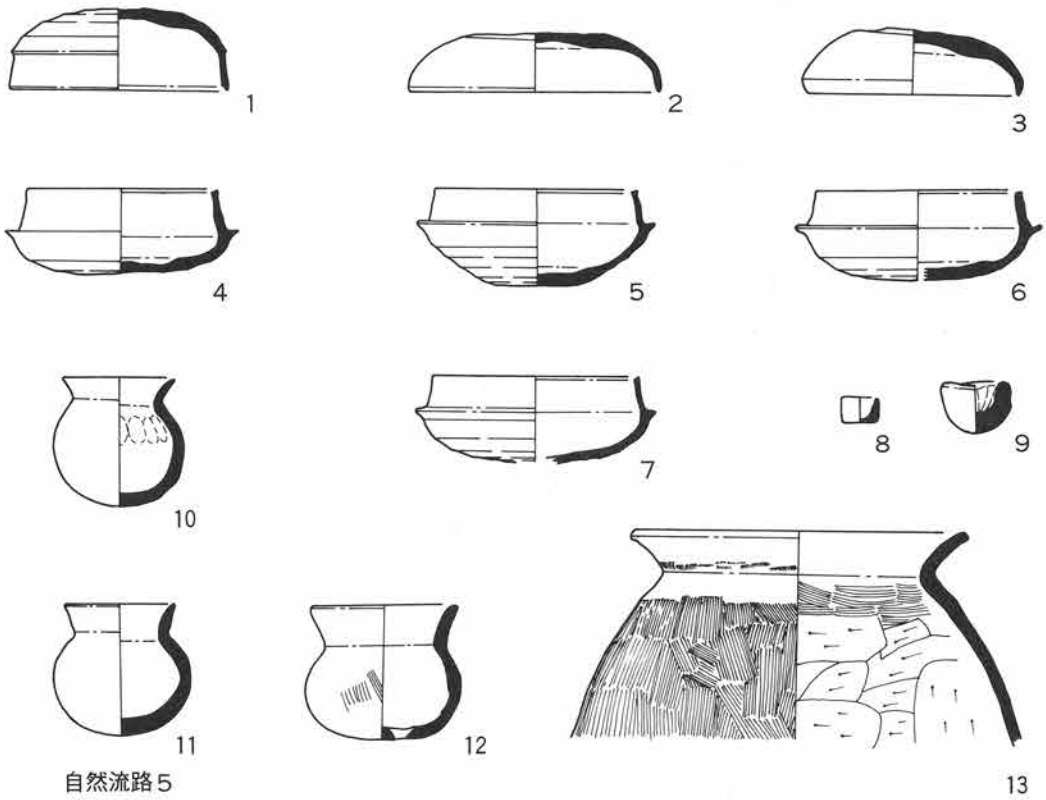


図56 新守山川自然流路1・5出土遺物実測図

17. 新守山川改修（その2-2）小津浜遺跡

1. はじめに

守山市杉江町地先湖畔に所在する小津浜遺跡は、新守山川改修工事に伴い、昭和58年の試掘調査を経て、以降から本年度に至るまでの本格的調査の過程で確認された遺跡で、その上流になる杉江遺跡では堀状遺構に囲まれた鎌倉時代から室町時代の集落跡が検出された。その下流で小津浜遺跡へ続く山賀遺跡では、弥生時代前期から中期にかけての集落跡および方形周溝墓の検出があり、本年度小津浜遺跡最西端の調査区へと同様相の遺構群が続くことがあきらかになっている。

2. 調査の結果

本調査区は本年度の小津浜遺跡での最西端、河口にあたる。対象面積は河川敷の工事用センターライン杭No.0より上流の2号橋（二反橋）西端までの長さ70m、幅20mの約1400㎡である。表土および直下の暗青灰色粘土・暗灰色砂質土層は約1.5 mの厚さでほとんど泥土化しており、次下の青灰色粘土層までの掘削は、敷鉄板を備えて0.7㎡級バックホーで極力慎重に行った。同時に人力により土層観察の目的を徹底させた排水溝を四周させ、基



図57 新守山川（その2-2）調査位置図

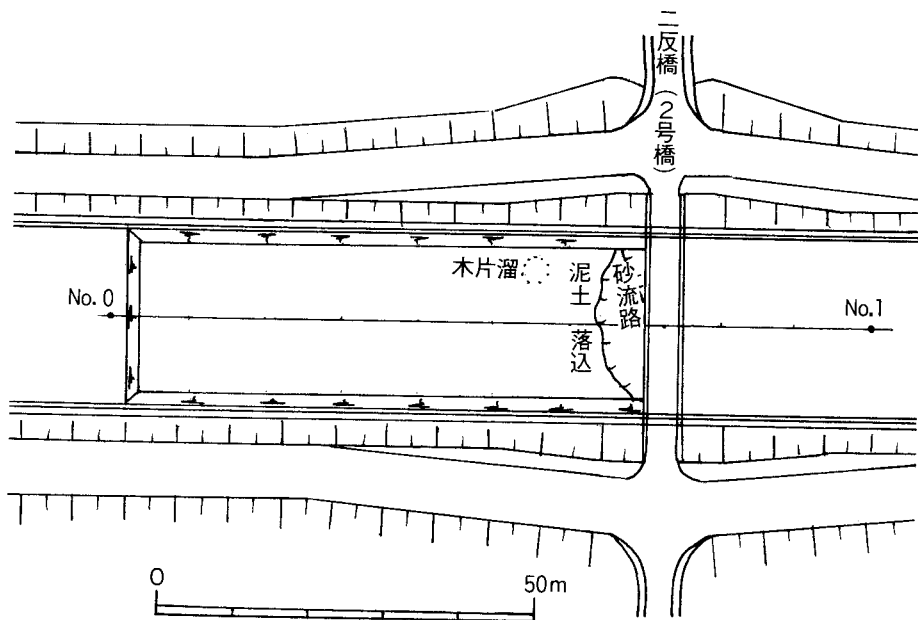


図58 新守山川（その2-2）調査区平面図

本土層の把握を急いだ。その結果、青灰色粘土層は、標高82.4~83.0mで調査区全面で確認される無遺物層で、必ずしも河口に向かって低下しない。青灰色粘土層直上の泥土層2層は、平安時代以降に相当する土器片、土錘を多く出土し、下層はそれらとともに古墳時代に溯る遺物が少量出土した。遺構については皆無で、東端より粗砂および粘土を互層にした自然流路がほぼ南北方向に検出され、埋土より弥生時代から平安時代までの遺物を含み、流路は青灰色粘土および直下の黒灰色粘土上部を切りこんでいた。流路自体の西肩部は本調査区北東隅にかろうじて検出されたにとどまったが、その最下層底面にあたる淡黒灰色砂質泥土は河口に向かって不定形な円形状に落ち込み、同層より鉄製のU字型鍬先が出土した。

3. おわりに

出土遺物の多くは自然流路埋土層内に集中するが、埋土各層と出土遺物との相対年代が必ずしも対応しない場合があり、上流の遺構群のぼう大きさを想像するにあまりある。ただ本調査区北東隅にのみ部分的に検出された流路西肩部の堆積は東部に比してきわめてゆるやかな様相であったことがトレンチ北壁断面で観察し得た。したがって未整理の現段階で断言できないが、東接する調査区の自然流路東肩部の様相の検討とあわせて、「小津浜」の旧状復元の一資料に加えられるべきものと考えられよう。 (岩間信幸)

18. 湖岸堤志那北（その1）志那湖底遺跡

1. はじめに

志那湖底遺跡は弥生時代中期の「袈裟襷文」銅鐸一口の出土により著名であったが、昭和57・58年度の試掘調査で縄文時代および弥生時代の遺物包含層が志那漁港北側および西側から南の葉山川河口付近まで分布することがあきらかになった。遺構の存在が判明したのは、南湖浚渫に先立つ昭和59年度調査で、葉山川河口西約300 mに縄文時代晩期の深鉢が埋置された2基を含む3基の土壙墓が検出された。昭和60年度では津田江湾入口付近で弥生時代中期から奈良時代にかけての溝2条が検出され、昭和61年では湖岸堤（志那南その2工区）で縄文時代晩期の良好な遺物包含層下に同時期の土器棺墓2基、土壙群、柱穴群が検出された。本調査地の南に漁港内北側で昭和59年度に弥生時代後期から中世にかけての遺物を含む土壙が検出されている。

2. 調査の経過

草津市志那町地先、志那漁港北方の湖岸堤志那北その1工区の基準杭No.53～58までの約480 mを調査対象とし、No.53を基点に40mごとに5 m×5 mの鋼矢板打ちによる試掘トレンチ12箇所を設定し、遺物・遺構の有無の確認を目的とした。南端のT1から順に0.7 m級バックホーを用い、東面に土層観察用壁を残しながら掘削していった。掘削面および壁

面の状況しだいで移植ゴテ・スコップを用いた人力精査にきり換える準備態勢をとっていたが、結果的には遺物は検出されず、排土の遺物検出作業に終始した。

3. 調査結果

12箇所中、すべて灰色の粘土と砂が互層をなしており、最下部で検出されいた植物遺体を含む粘土層でも遺物が検出されなかった。T8・T9で縄文土器・土師器の細片が検出されたが、いずれも表土直下の粗砂層で検出されたもので、二次堆積物と判断した。



図59 湖岸堤志那北（その1）調査位置図

4. おわりに

本調査区北端T12で遺物包含層が認められなかったことにより、そのすぐ北に所在する湖岸堤樋門部の遺物包含層（昭和61年度調査）は本地点へは延びないことが判明した。

(岩間信幸)

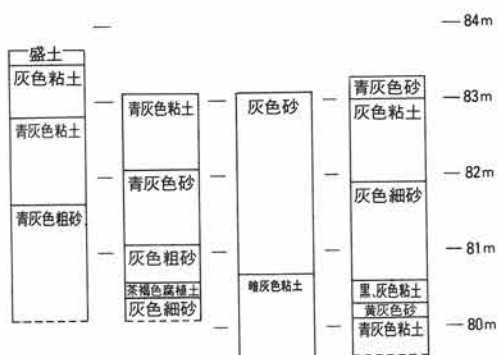


図61 湖岸堤志那北土層柱状図

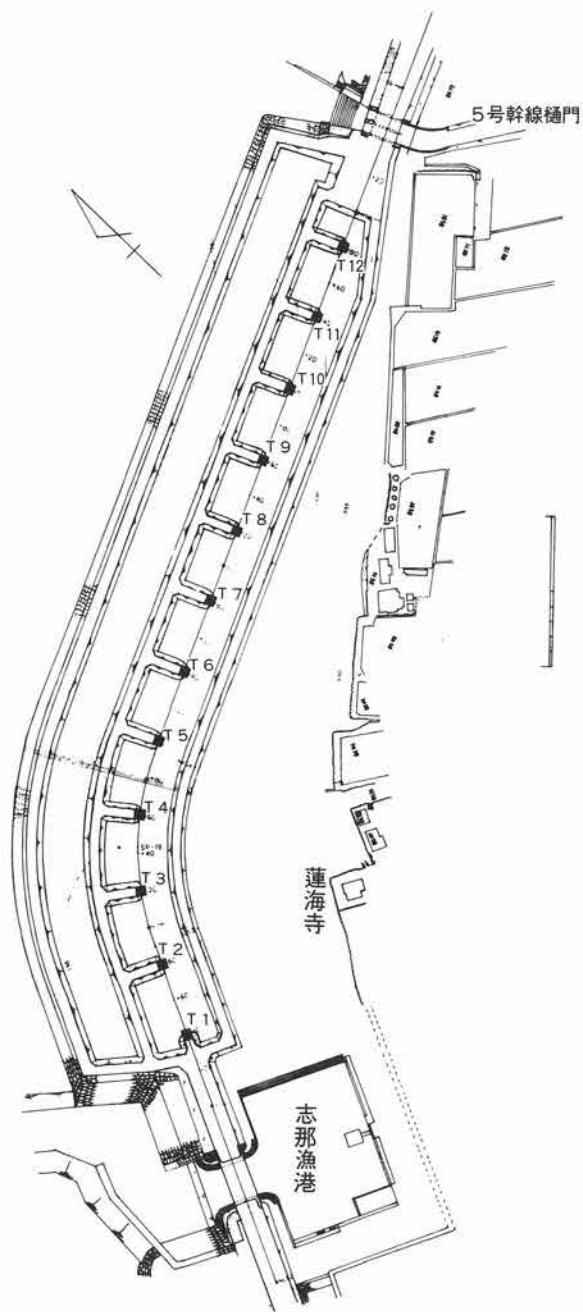


図60 湖岸堤志那北（その1）トレンチ位置図

19. 北山田上水 北山田湖底遺跡

1. はじめに

北山田湖底遺跡は草津市北山田町地先の湖岸から湖底に位置する。北山田町は草津市の西端部の琵琶湖岸にあり、北は草津川と、南は伯母川の形成したデルタ地形に囲まれた港町で、古くからの良港で知られ現在も県下では有数の漁港である。

周辺の遺跡分布は多くはないが、集落内には古寺跡と言われる長安寺遺跡が所在しているがこれまでの調査では明確な遺構は検出されていない。湖岸周辺では、伯母川より南に縄文時代の遺物が多数出土している矢橋湖底遺跡や、新草津川建設に伴う発掘調査で縄文時代から平安時代までの遺構が発掘されている北萱遺跡・御倉遺跡、草津川より北には弥生時代の遺物が発見されている七条浦遺跡などがある。

調査は水資源開発公団の琵琶湖総合開発による「北山田上水」の建設工事に伴う事前の発掘調査である。

2. 調査の経過

北山田湖底遺跡は昭和57年度に、琵琶湖総合開発による北山田漁港建設に伴い、潜水に

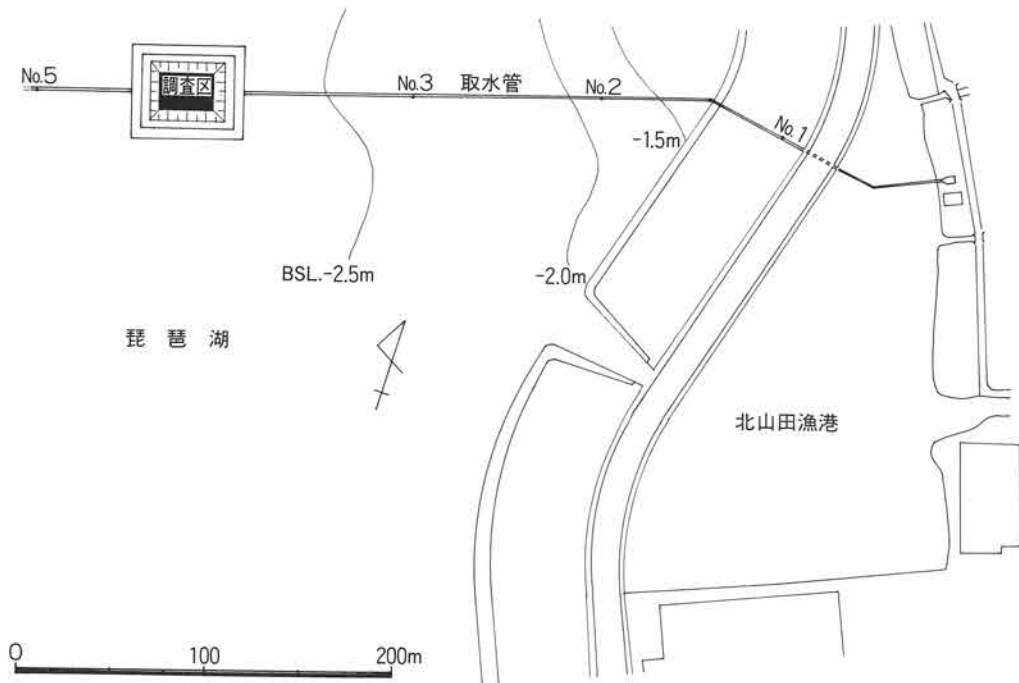


図62 北山田上水トレンチ位置図

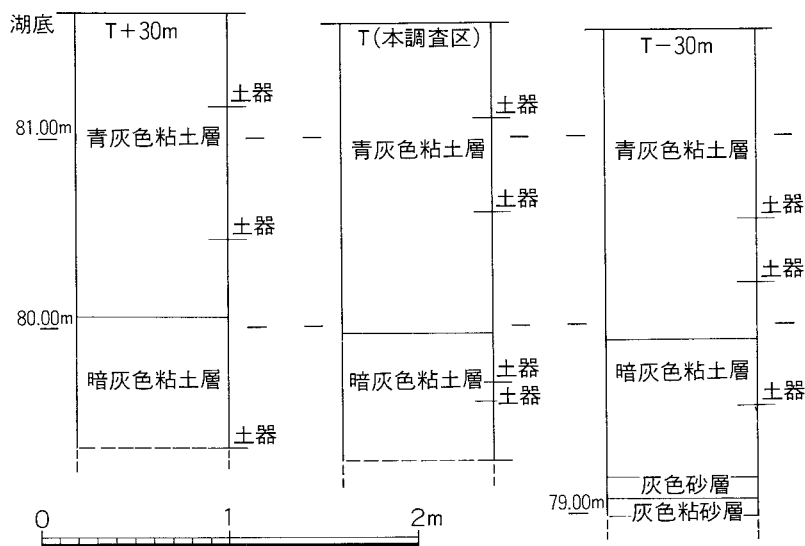


図63 北山田上水試掘土層柱状図

より分布調査が行なわれ、縄文時代から近世までの遺物が発見されたため、遺跡の存在が確認された。その後、昭和59年度に北山田漁港建設に伴う発掘調査が行なわれ、近世の多くの遺物が出土し、港の成立を知る上での良好な資料を提供した。また、昭和61年度には、「北山田航路」・「北山田消波堤」・「北山田上水」などの建設工事に伴い、潜水による試掘調査を行なったところ、遺物の出土をみた。そのため、とくに遺物の集中した「北山田上水」の試掘No.13ポイントを中心に発掘調査を実施する事となった。

3. 調査の結果

調査区は北山田漁港から約300m琵琶湖の沖合のため、鋼矢板で二重に締め切り排水を行ない、湖底を露出させ、鋼矢板周辺とトレンチ中央に仮設の調査用道路を設置し、常時排水をしつつ、20m×30mの範囲について調査した。しかし、堆積する土層は予想した以上に軟弱で2mのポールが一本分押し込むことができず、鋼矢板からの漏水や湖底からの湧水も激しく、調査は困難を極めた。BSL-1.6～1.7mの湖底底面より約50cmは貝類等を含むヘドロ層のため工事側で除去した。そのあと、バックフォアにより堆積土層を徐々に除去し、堆積土層の遺物を確認した。

4. おわりに

基本土層は青灰色粘土と暗灰色粘土である。試掘のデータでは明確な遺構は見られなかったが、遺物は縄文式土器が数多く出土した。

(濱 修)

20. 針江大川舟溜航路、針江浜遺跡

1. はじめに

調査対象地は、高島郡新旭町針江地先の湖底に立地している。湖岸のやや北方には弥生時代後期から古墳時代始めにかけての森浜遺跡が、内陸部には弥生時代中期から古代末に至る大複合遺跡である針江遺跡群が立地している。

2. 調査経過

昭和61年度に実施した潜水試掘調査の結果、航路予定地内に多量の弥生時代前期末の土器を出土する部分と、埋没林の一部と見られる樹木の存在する部分のあることが判明した。これを受け本年度は、沖合約200m 付近の樹木の検出された部分を中心に鋼矢板囲いによる陸化調査を実施することとした。

3. 調査の結果

調査の結果、T・P82.50m 付近から4株の埋没林が、T・P82.00m 付近から16株の埋没林が検出された。さらにこの下層埋没林の成育面から地震に伴う液状化現象による噴砂が約40m にわたり検出された。また噴砂面のやや下層からは、約20条の大小の亀裂が検出されている。亀裂の大多数はほぼ南北に走るが、少数東西に走るものも認められる。また、下層埋没林成育面から弥生時代中期の土器および、大足をはじめとする木製品が出土している。さらにT・P81m 付近の砂礫層中からは、少量の縄文土器も出土している。

4. おわりに

今回の調査では、人為的な遺構は検出されなかったものの、人間生活を取り巻く環境を復元する上で貴重な数々の資料を得ることができた。上・下2層の埋没林の存在は、少なくとも沖合200m のこの付近までかつて陸化していたという動かし難い証拠である。またほぼ完形で出土した弥生時代中期前葉の土器および木製農具の存在や、前年度沖合約100m 付近で多量に検出された弥生時代前期末の土器の存在等から湖辺に繁る大木とその間に広がる水田、そして豊かな自然に抱れるように生活する人間の生活を思い浮かべることができる。また、噴砂というダイナミックな地球活動の痕跡は、遺跡の生成を考える上で重要な意味を持つ。液状化現象に伴う噴砂は、通常震度6以上の大地震により引き起されること

から、地盤の隆起、陥没を伴うことも充分に考えられるからである。当遺跡の水没がこの地震によって引き起されたとは、にわかには断じ難いが、その要因の一つとして数えることは可能であろう。

(大沼芳幸)

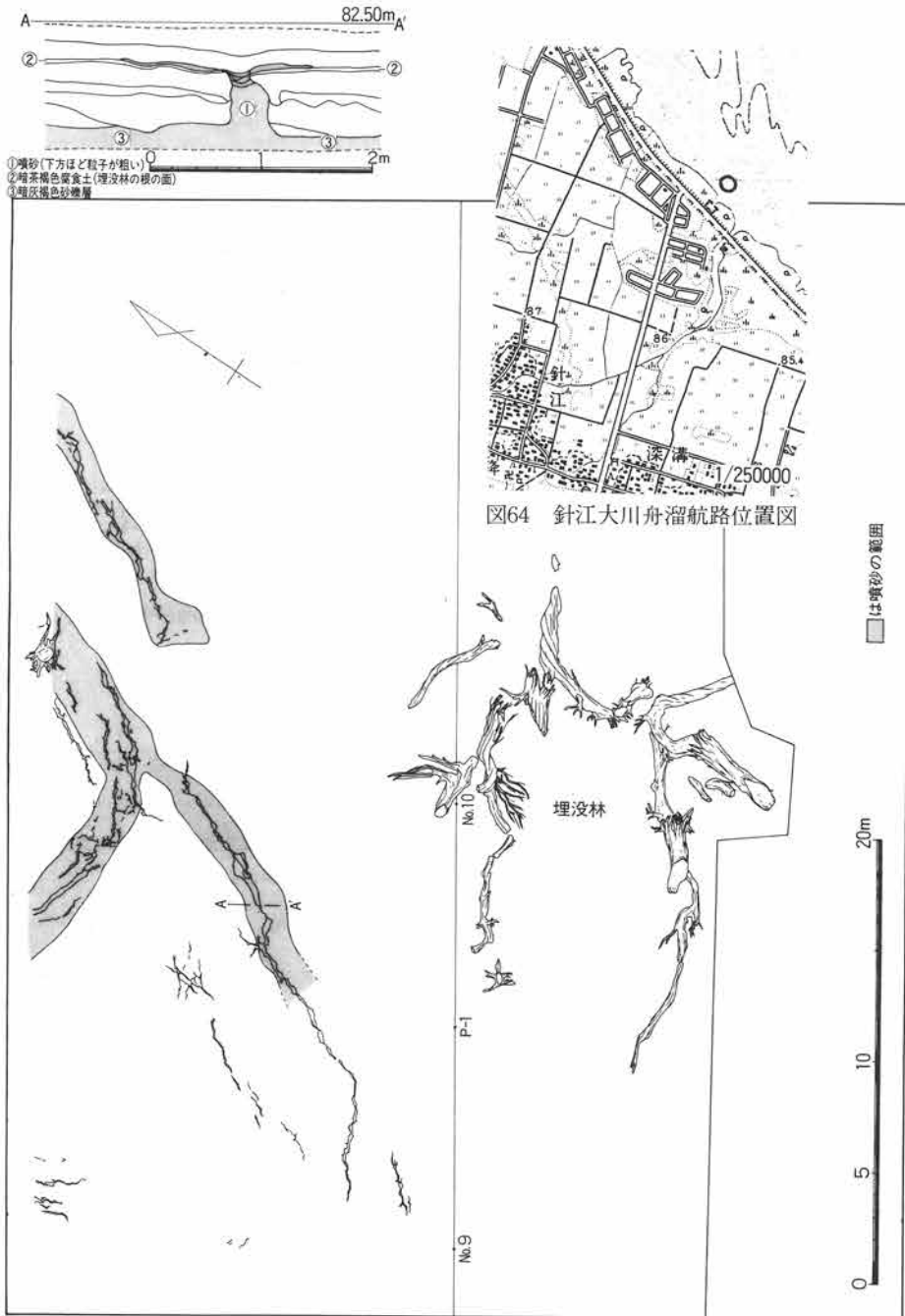


図64 針江大川舟溜航路位置図

図65 針江大川舟溜航路噴砂・地震亀裂・下層埋没林

21. 大溝漁港航路浚渫 大溝湖底遺跡

1. はじめに

大溝湖底遺跡は、従来より縄文時代晩期の埋没林が存在することが指摘されている。今回の発掘調査に先立って、昭和61年度に潜水による試掘調査が実施された。試掘調査の結果、今回設定した調査区と、さらに沖側にあたる部分で、縄文時代晩期の土器片と埋没林と考えられる樹木片が出土した。

この結果、今回の調査区を、高島町勝野地先にある今津警察高島水上派出所搬庫の東側沖合い約50mの所に、30m×20mのトレンチを設定し、鋼矢板で二重に囲み、トレンチ内を陸化してから掘削するという方法で調査を行った。

2. 調査の結果

陸化した湖底面の高さは、標高81.3mとたいへん低いものであった。しかし、この面の高さでは、遺物も遺構も全く無かった。



図66 大溝漁港航路調査位置図

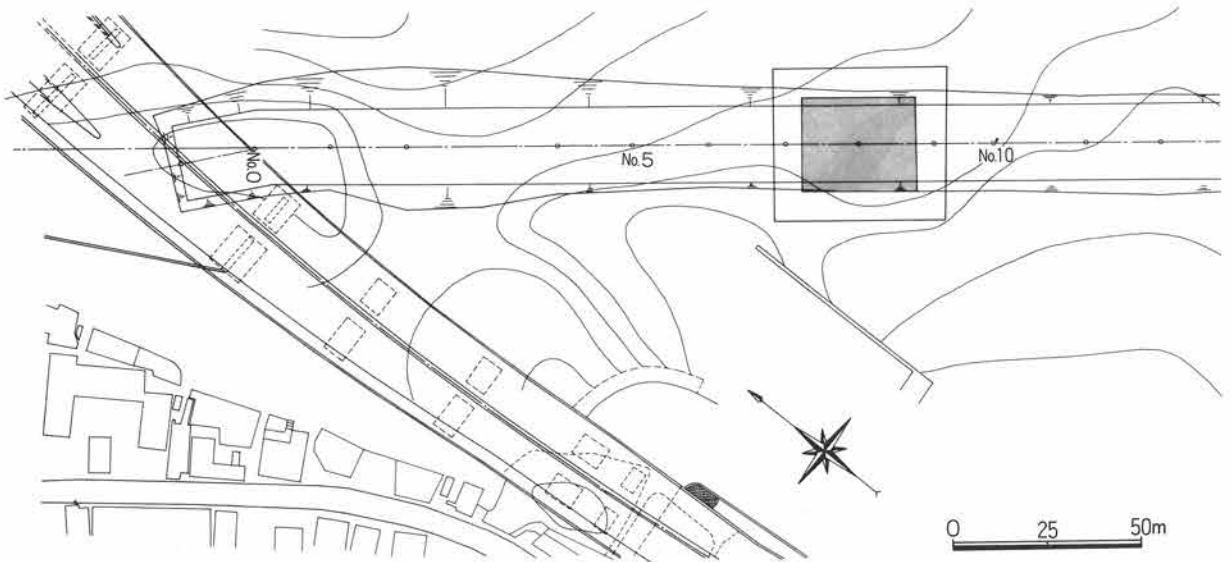


図67 大溝漁港航路トレンチ位置図

湖底面より約40cm程掘削した標高80.8m付近で埋没林と思われる樹木根の一部を検出した。このため、樹木根の全容を把握するために、さらに約20cm程掘削した所で、設定したトレンチのほぼ全面から、9ヵ所にわたって樹木根が検出された。樹木根の高さは、幹と考えられる部分で標高80.8m～80.6mであり、根の先端部分がさらに下層にいくこむものなどもあり、低いものでは標高79.9mを示すものもあった。樹木根の大きさは径が1m

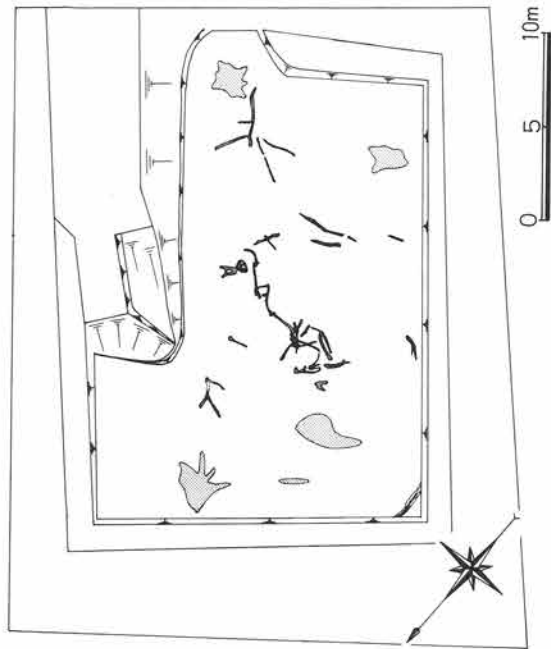
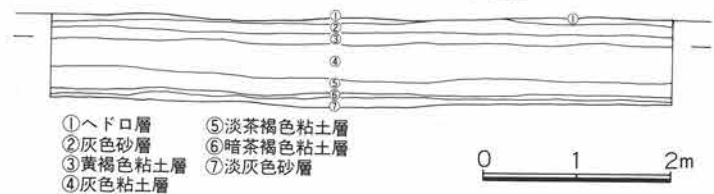


図68 大溝漁港航路樹木根出土状況図



- | | |
|---------|----------|
| ①ヘドロ層 | ⑤淡茶褐色粘土層 |
| ②灰色砂層 | ⑥暗茶褐色粘土層 |
| ③黄褐色粘土層 | ⑦淡灰色砂層 |
| ④灰色粘土層 | |

図69 大溝漁港航路南壁断面図（レベルは81m）

前後の円形内に納まるものが多く、おおむね小さなものばかりであった。樹木根の周辺からは種子や葉が少量ながら検出されているが、樹木の種類については不明である。

3. おわりに

今回の調査では、共伴する遺物が全く出土していないため、炭素14年代測定法を採用し、現在分析をしている所である。しかし、試掘調査の時には縄文時代晩期の土器片が出土していることからおそらくこの土器片と同時期ではないかと考えられる。

調査地点は湖岸より沖合50m程のところであるが、今回出土した埋没林がさらに沖側に延びていることが試掘調査で確認されている。以上のことから、標高81m付近では、樹木が林立した環境であったことが考えられる。
(奈良俊哉)

22. 唐崎マリーナ 唐崎遺跡

1. はじめに

唐崎遺跡は、「唐崎の松」で有名な市指定史跡名勝・唐崎神社周辺の尖状三角州の先端部一帯に広がっている。遺跡は弥生土器の散布地として周知されており、文献上においても平安時代の祓所として知られている。

2. 調査の経過

計画航路の法線にそって約50m間隔で4ヶ所の調査地点を設定し、各調査地点にピットを3m×3mに設定して、浚渫深度のBSL-3.5mまで掘削をおこなった。

3. 調査の結果

各ピットとも、湖底からピットの最下層まで白色砂礫層であった。そのためにピットの壁面が崩れ、土層断面の精査は困難であった。が、各ピットとも下層ほど砂礫がやや粗くなること、P-4ではT. P. 81.901mで粘土のブロックが若干検出され、その粘土質によってかたまった砂礫が層状に広がっていること、などが観察された。

遺物は、各ピットから100～350点におよぶ土器類と、若干量の木製品が出土した。土器類は弥生土器(中期)が主で、ほかに縄文土器・土師皿などが出土した。摩滅はあまり

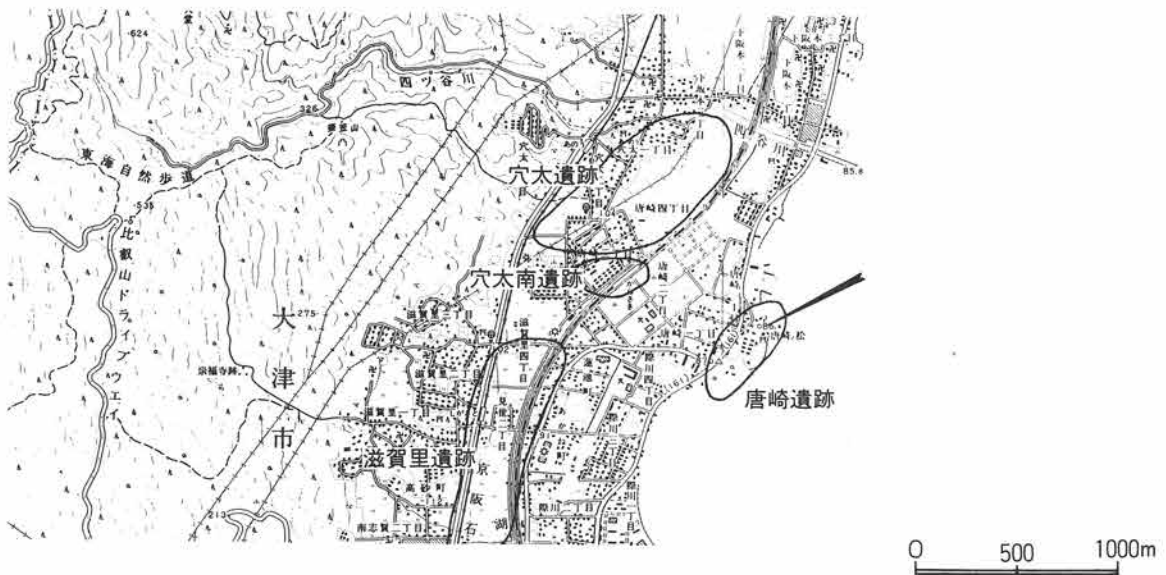


図70 唐崎マリーナー調査位置図

うけていない。平安時代の土師皿が出土したのは、岸に近いP-1・P-2からである。P-1からは、幅2～3cmの板状木製品が数点出土している。

4. おわりに

今回の調査では遺構面を確定することはできなかった。しかしP-1出土の板状木製品と土師皿が祭祀に伴うものだとすれば、文献にでてくる祓所との関連が注目される。また摩滅の少ない弥生土器が多量に出土したことは、付近に遺構の存在が推定されるのである。

(伊庭 功)

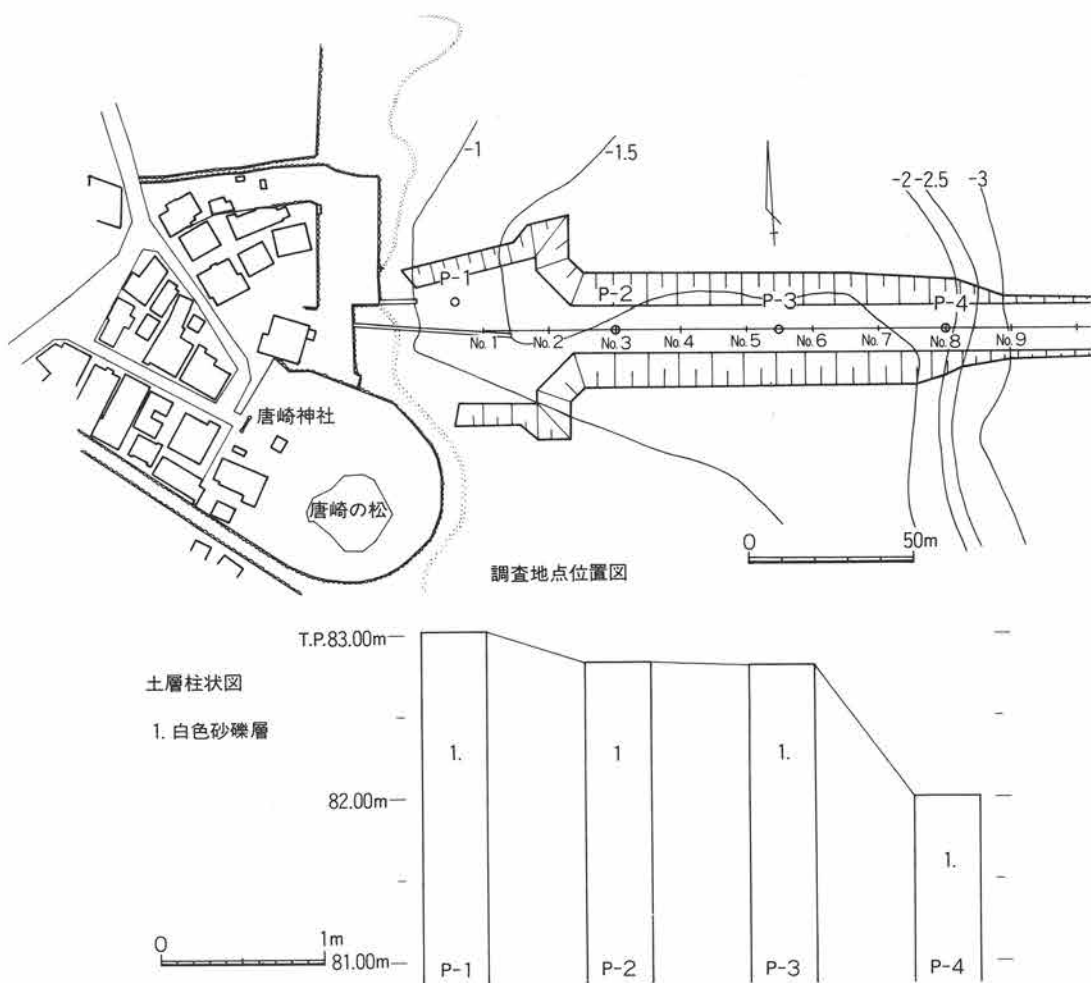


図71 唐崎マリーナー調査位置図及び土層柱状図

23. 南湖航路浚渫 粟津湖底遺跡

1. はじめに

粟津湖底遺跡は大津市晴嵐町地先に所在し、琵琶湖の最南端・幅約400mの瀬田川流入部の中央付近の湖底に位置する縄文時代の貝塚である。当遺跡は昭和27年、藤岡謙二郎氏によって発見、紹介されている。

今回の調査は南湖航路浚渫工事計画に伴うもので、遺跡の位置・範囲を確認する目的で計画航路内とその周辺46,400㎡について分布調査を実施した。

2. 調査の経過

調査は、計画航路法線を中心に東西10m間隔で調査基準線を設け、南から100mごとに6ブロックを設定した。このブロックごとに、調査基準線に沿って湖底表面における遺物・貝層の有無を確認した。

3. 調査の結果

湖底には褐色砂層または砂利層が広がっているが、第5区北西部と第6区の大半はすでに浚渫をうけて深場をなしている。表面には薄くヘドロが溜まっており、遺物を採集するには必ずしも最良の条件下でなかった。

貝層は、第4区L-10の下流から20m付近を中心として、おおよそ北へ10～20m、南へ50m、東へ40m、西へ30mの範囲に広がっていた。この中心部は湖底に貝層が露出しており、調査区のなかで最も浅い地点（T.P.82.8m）である。貝層の北辺には幅10mの粘土帯と杭・杭跡が観察され、これを境に以北では貝層がなくなる。南辺・東辺では貝層が砂層に30cm程度覆われており、レベルも中心部より低くなっている。

採集した遺物は、獣骨・縄文土器である。土器が採集された範囲は、ほぼ貝層の範囲とかなる。土器の分布密度の中心は貝層の中心とは異なり、それよりやや西に寄っている（第4区L-6下流より20～40m付近）。土器は縄文時代前期後半～中期前半のものを中心としている。

4. おわりに

今回の調査では掘削を行っていないので、湖底面の貝層の範囲を確認するにとどまっ

た。今後さらに予備調査を重ねて、下層貝層・周辺の遺構の有無を確認していくことが必要だろう。(伊庭 功)

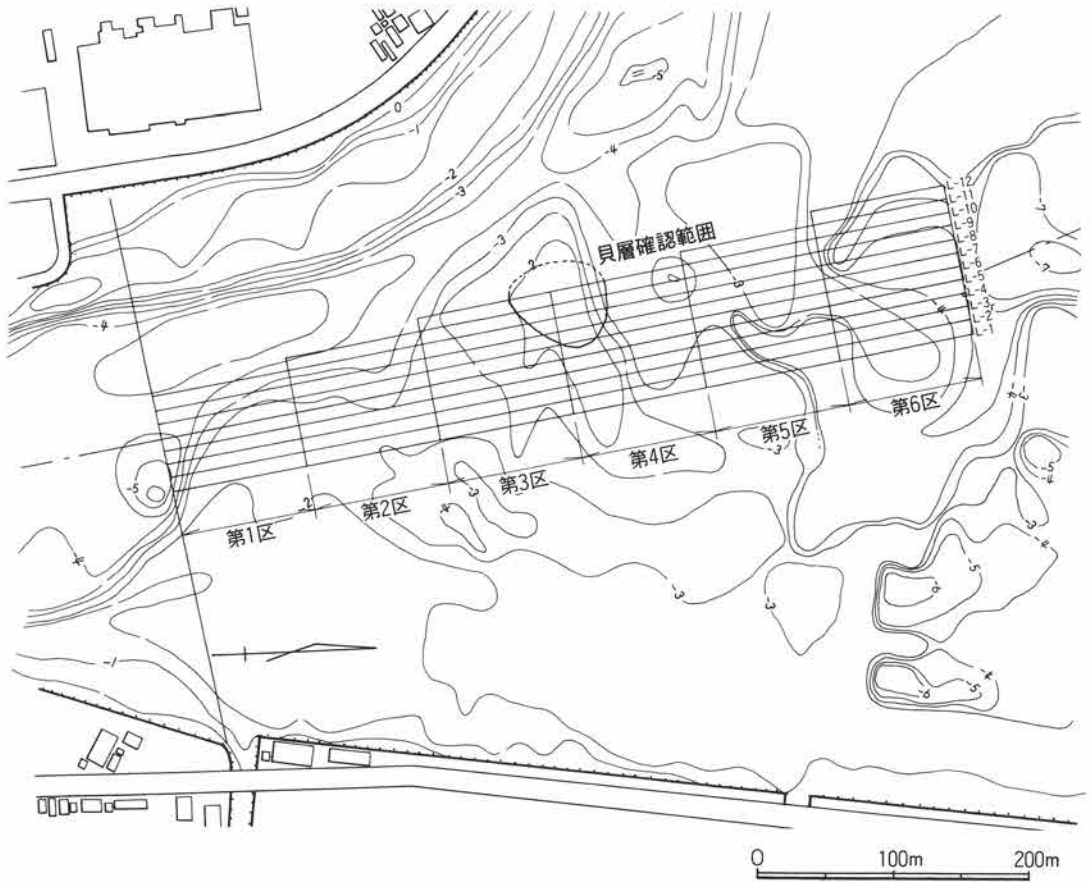


図72 南郷航路浚渫調査位置図

24. 今西舟溜り航路浚渫 延勝寺湖底遺跡

1. はじめに

今回の調査は、昭和61年度に行われた試掘調査および発掘調査の成果をもとにして行ったものである。当遺跡の周囲には、湖底遺跡として有名な葛籠尾崎湖底遺跡や、山本山より北側に向けて派生する山頂状にある前方後円墳を有する古保利古墳群などの諸遺跡が当遺跡の北側に位置している。

延勝寺湖底遺跡としての調査は、これまでも4度にわたって行われており、中でも59年度に行われた調査では弥生時代前期の土器がまとまって出土している。また、昭和61年度に行われた試掘調査では弥生～中世に至るまでの土器が出土し、同年の発掘調査では縄文時代後期の土器が出土している。また、この時に湖底が陸化し、中洲状の浜堤が見えたため、遺物の散布状況を確認したところ多量の土器を発見した。この浜堤が工事掘削を受けるために今回の発掘調査を行う事になった。

現地調査は、鋼矢板で調査を二重に囲み調査区内を陸化してから掘削するという方法で行った。

2. 調査の結果

調査は、まず陸化した湖底面である砂礫層（遺物包含層）を掘削する事より始めた。この層は湖流等の作用によって堆積したもので遺物もかなり摩耗していた。第3・4層はスクモ層で多量の木製品が出土し、これらの遺物に共伴して弥生時代中期の土器片が第3・4層より少量出土している。中でも第3層上面で検出した板状の杭は第5層にまで到達するもので、自然木を利用した杭とともに検出され



図73 今西舟溜り航路浚渫（その1・その2）調査位置図

ており、東西方向へ並ぶものであった。第8層の黒灰色粘土層の上面からは縄文時代中期末にあたる土器片が多量に出土した。第7層の上面は標高81.2mであった。土器のレベルは二つに分けられるが、上下における時間差は無いものと考えられる。8-13区では落ち込みが有り、落ち込んだ所より石皿の破片が一つ出土した。

3. お わ り に

今回の調査では、これまで当遺跡では確認された事のなかった縄文時代中期末の遺物が面的な広がりを持って出土した事に大きな意義を見つけることができる。落ち込み状の遺構も生活面として第8層の上面を把握することができる資料である。さらに第3層より検出した杭列も現状ではどのような遺構に伴うか不明であるが、共伴する遺物より弥生時代中期にあたる事はほぼ間違い無い事であり、第3層も弥生時代の生活面として考える事ができるであろう。

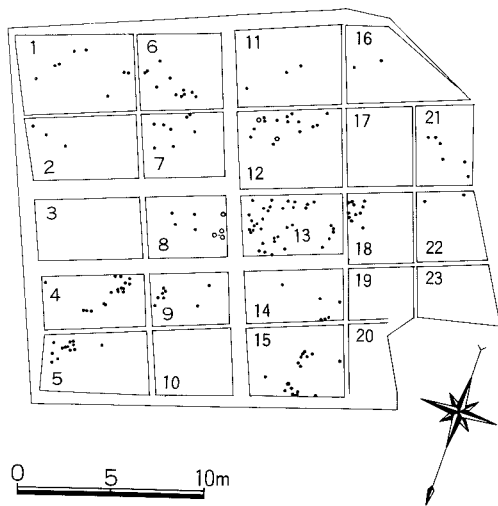


図74 今西舟溜航路浚渫（その1）土器検出状況図

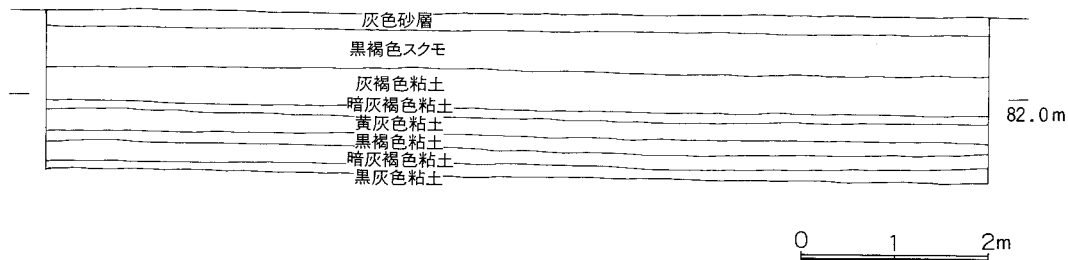


図75 今西舟溜航路浚渫（その1）断面土層図

25. 今西舟溜り航路浚渫(その2)延勝寺湖底遺跡

1. はじめに

今回の調査は、同工事に伴う事前発掘調査をしては三期目に該当する。今回の調査区は(東浅井郡湖北町今西地先)、前回の調査区に東隣する地点にあたる。

2. 調査の結果

調査は鋼矢板で囲んだトレンチ内の水を抜いて、ドライにしてからバックホー等で掘削するという方法で行った。この結果、前回で現湖底面とされた礫層は、トレンチの西側半分で検出されたが、東側では下層にあたる砂層が露出していた。この砂層を除去した後に、スクモ層を検出し、ここからは大量の木製品が出土した。この面では、東西方向(SD-2)と、南北方向(SD-1)に走る溝を2条検出した。大量に出土した木製品は、このSD-2の中に堆積したものが大半である。また、SD-2の北側には杭列が残っていた。SD-2は、東側断面にもはっきりと見えることや遺物の出土状況などから、まだ東に延びるものと考えられる。前回の調査で標高81m付近で出土した縄文時代中期の土器群は、今回の調査では、数点出土したにとどまった。

3. おわりに

今回の調査成果は、前回確認できなかった弥生時代中期の溝を2条確認したことを上げることができる。断面観察よりSD-1はSD-2に切られていることがわかった。また、SD-2は東側にさらに延びることもわかった。前回の調査でも杭が数本検出されてい

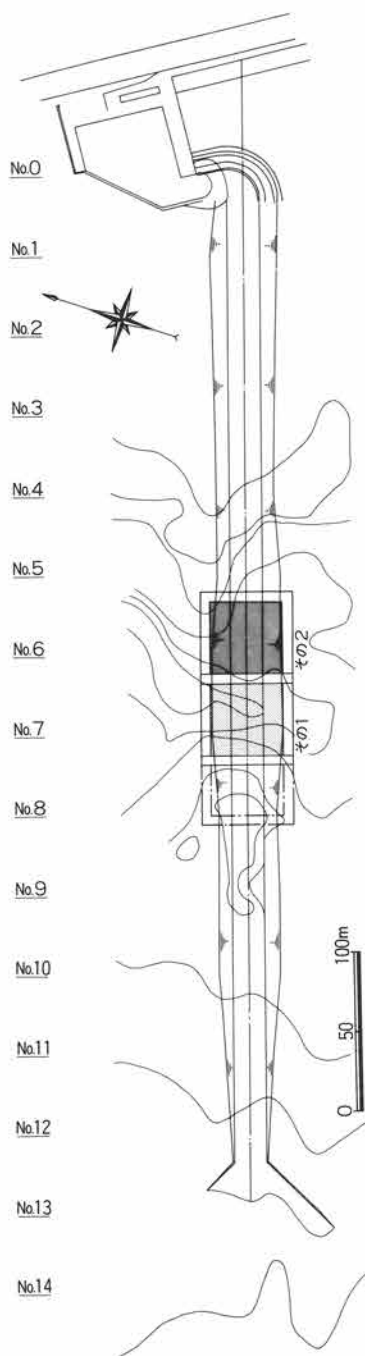


図76 今西舟溜り航路浚渫(その1・その2)トレンチ位置図

ることにより、SD-2は西側にも延びていたのではないかと考えられる。また、SD-2の中に堆積していた木製品はそのほとんどが農耕具であることより、農耕に係る溝であると考えるのが妥当であろう。

(奈良俊哉)

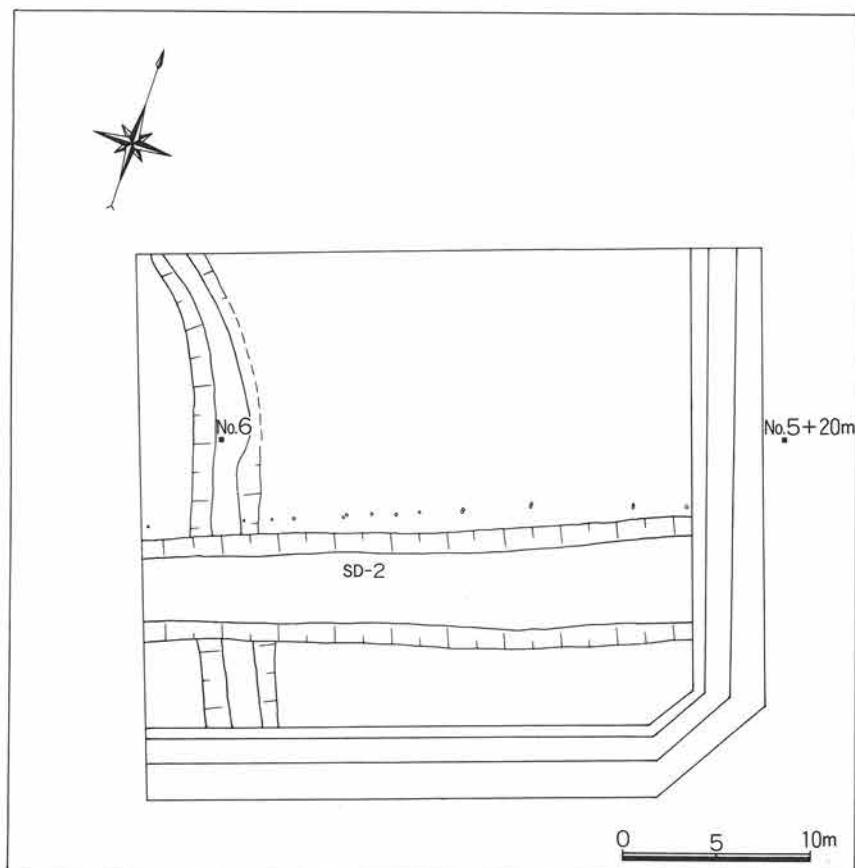


図77 今西舟溜航路浚渫（その2）第2面遺構図

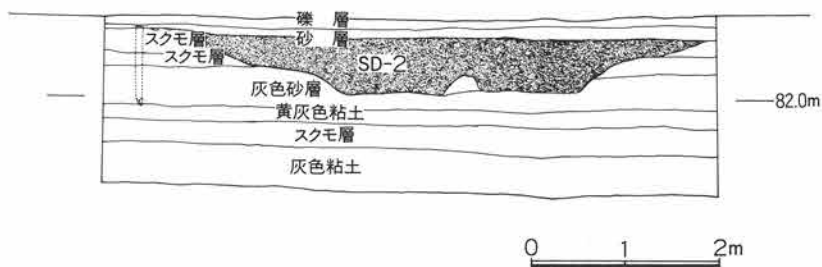
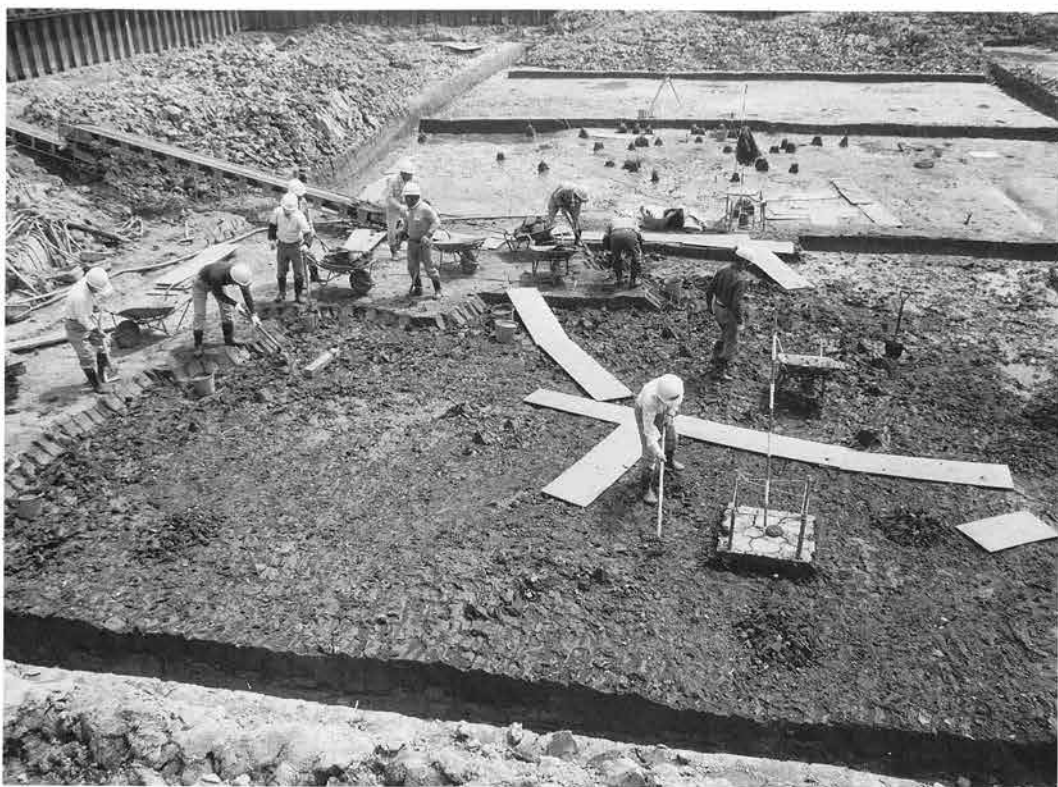


図78 今西舟溜航路浚渫（その2）東壁断面図

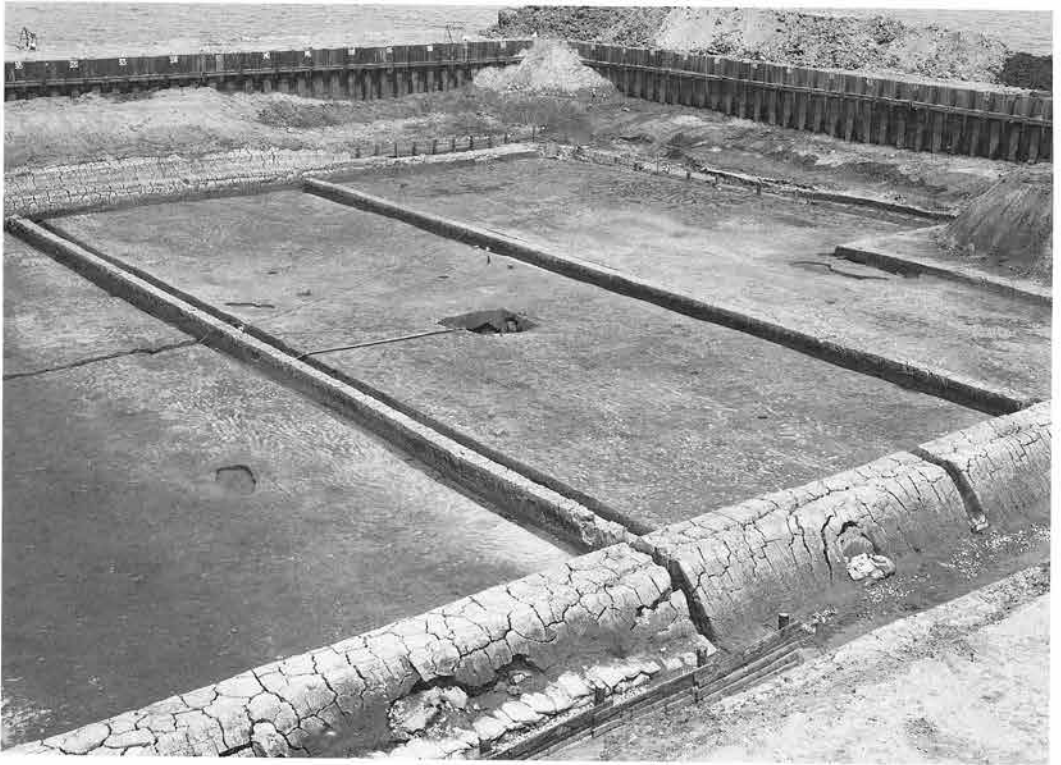
版 圖



調査状況（西から）



調査後全景（北から）



調査地近景



縄文土器出土状況



調査区全景及び調査状況（北から）



調査状況



T・2全景（北東より）



T・1 SK2（北東より）



トレンチ全景 (西北西より)



遺構 (南東より)



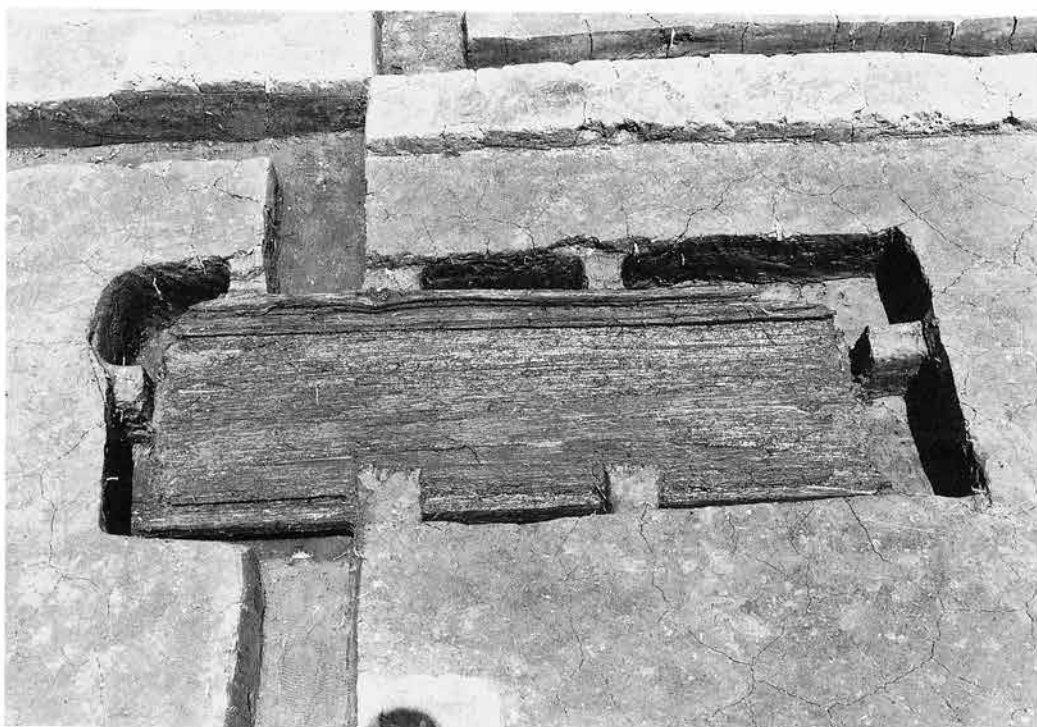
トレンチ全景 (南西より)



2号周溝墓 (南東より)



2号周溝墓木棺(北東より)



2号周溝墓木棺(南東より)



調査地遠景（西より）



調査風景（表土掘削）



調査状況



遺構検出状況



第3トレンチ表土掘削作業（西南より）



第6トレンチ作業風景（西より）



第4トレンチ全景（東より）



第5トレンチ風景（西より）



A区調査地全景 (北より)



A区東壁土層断面



B区風倒木検出状況



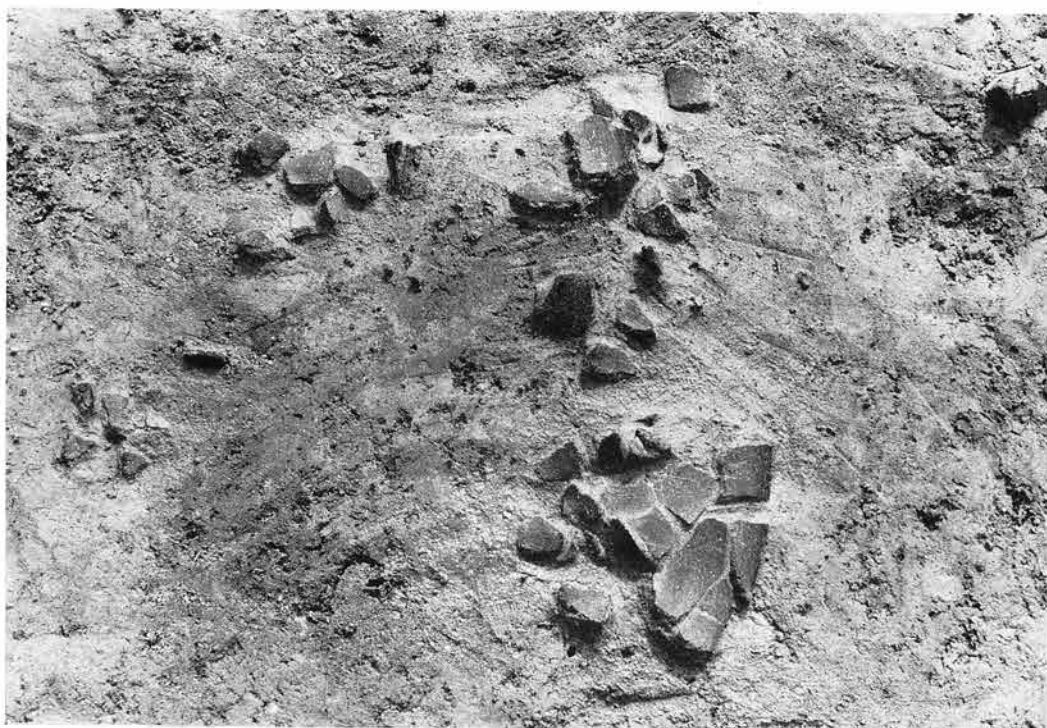
B区石礎出土状況



調査前状況（北より）



下層遺構（西より）



遺物出土状況(上層)



作業風景



調査地遠景(南より)



調査前状況(西南より)



遺物包含層掘削状況(西南より)



S R-1 土層断面図実測作業



調査区遠景 (北より)



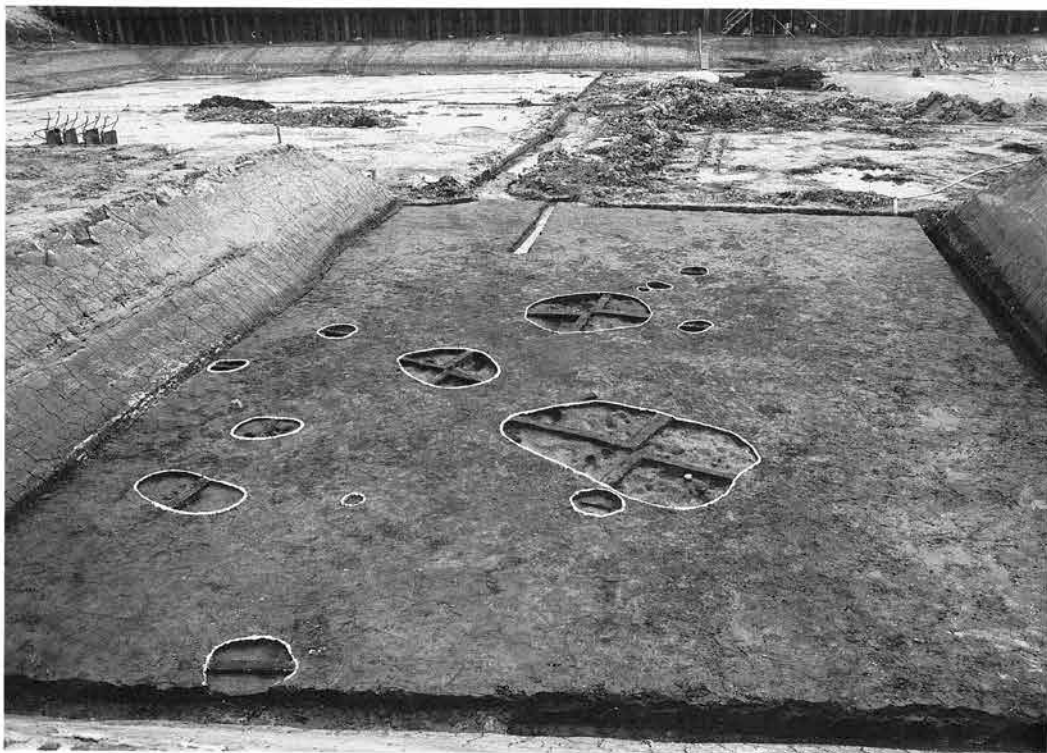
Cトレンチ検出状況 (南東より)



埋没樹全景 (北西より)



埋没樹近景 (東より)



Bトレンチ検出状況(北より)



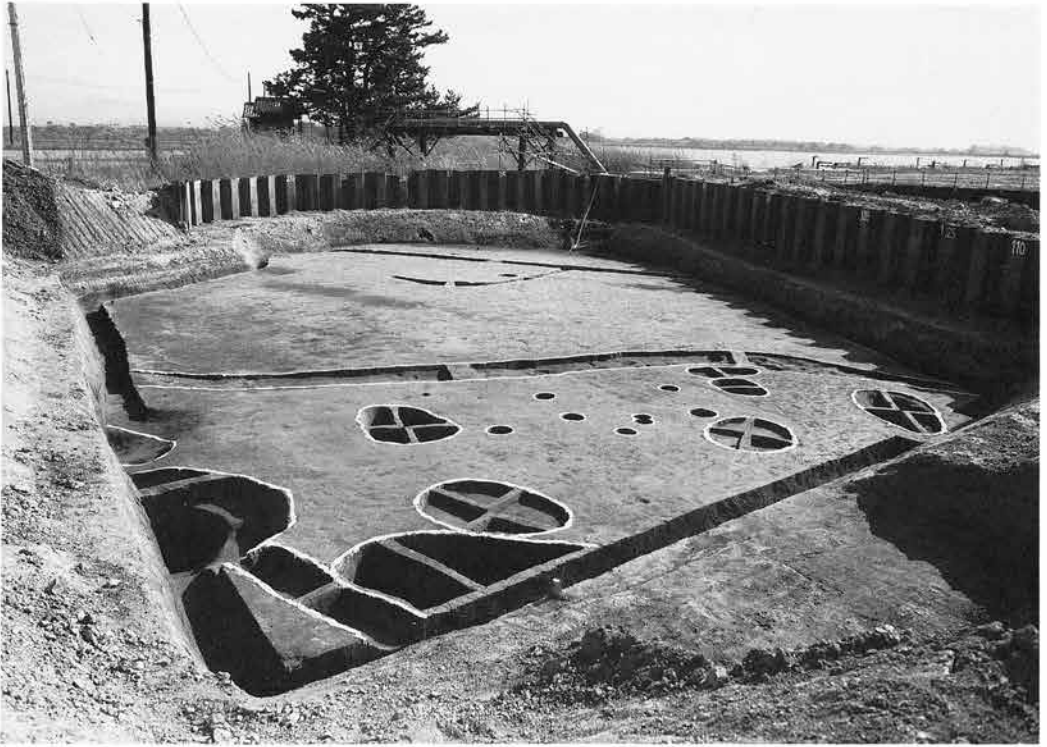
土器出土状況(南東より)



調査前近景 (南西より)



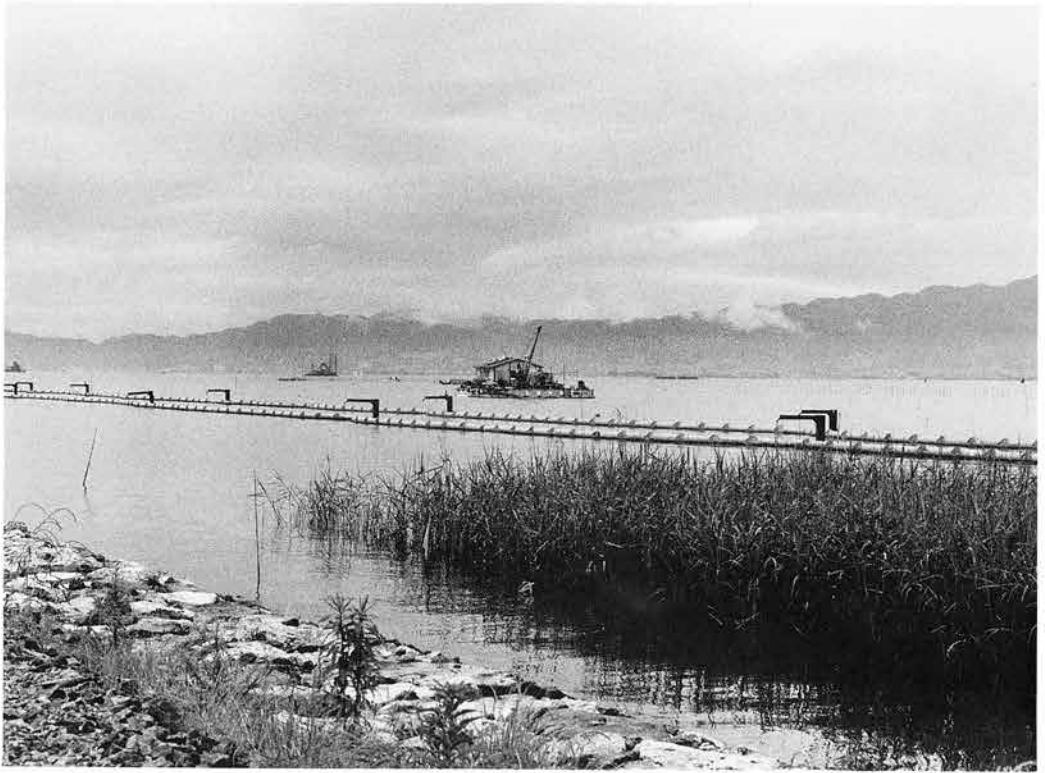
調査状況 (東より)



Dトレンチ検出状況(北より)



遺物出土状況(西より)



遠景



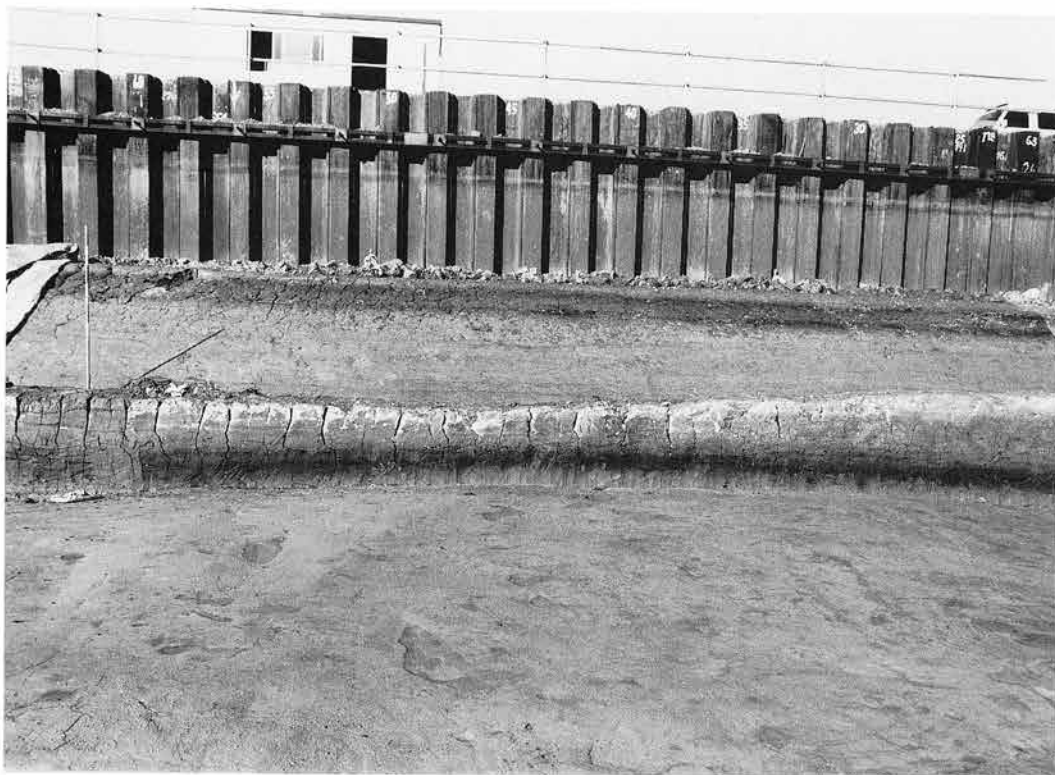
遺物採取作業



調査地遠景



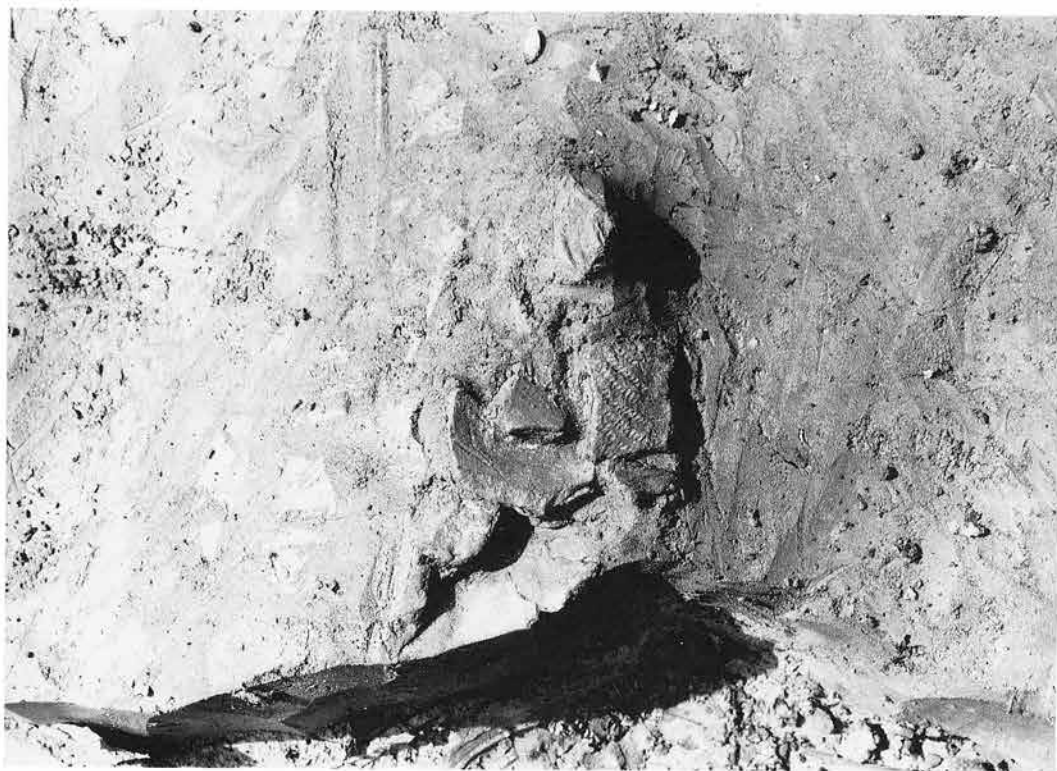
調査地全景（遺物包含層発掘後）



北壁土層断面



噴砂検出状況



縄文土器出土状況



縄文土器出土状況



遠景



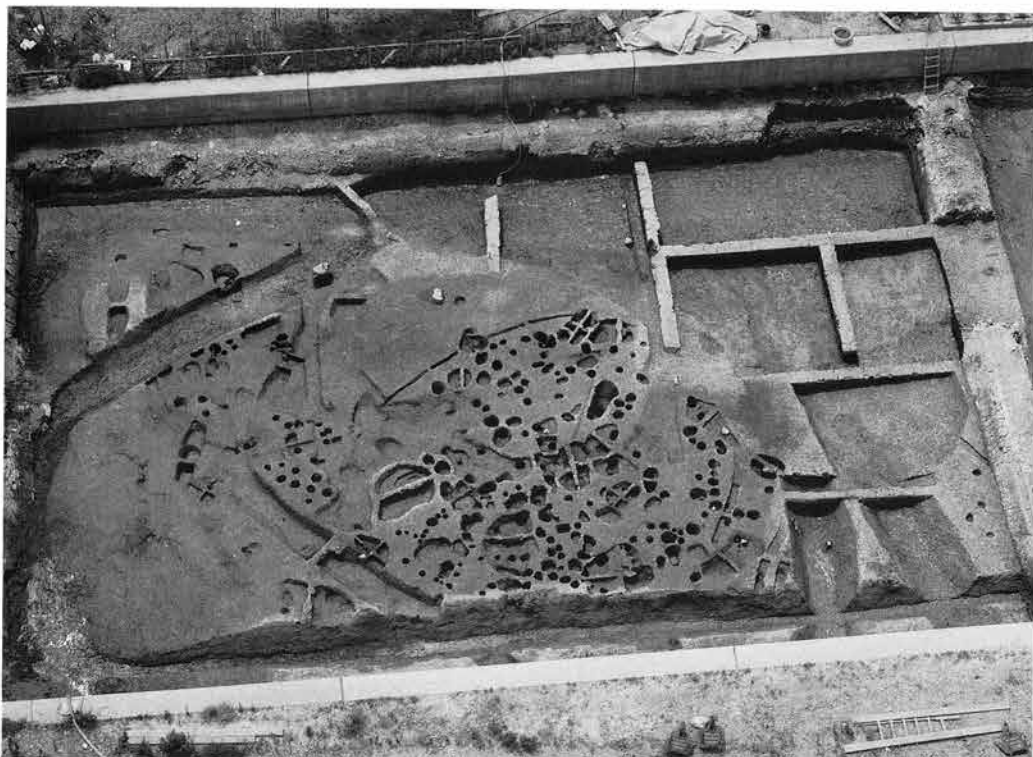
調査状況



遠景（西から）



3号橋附近近景（西から）



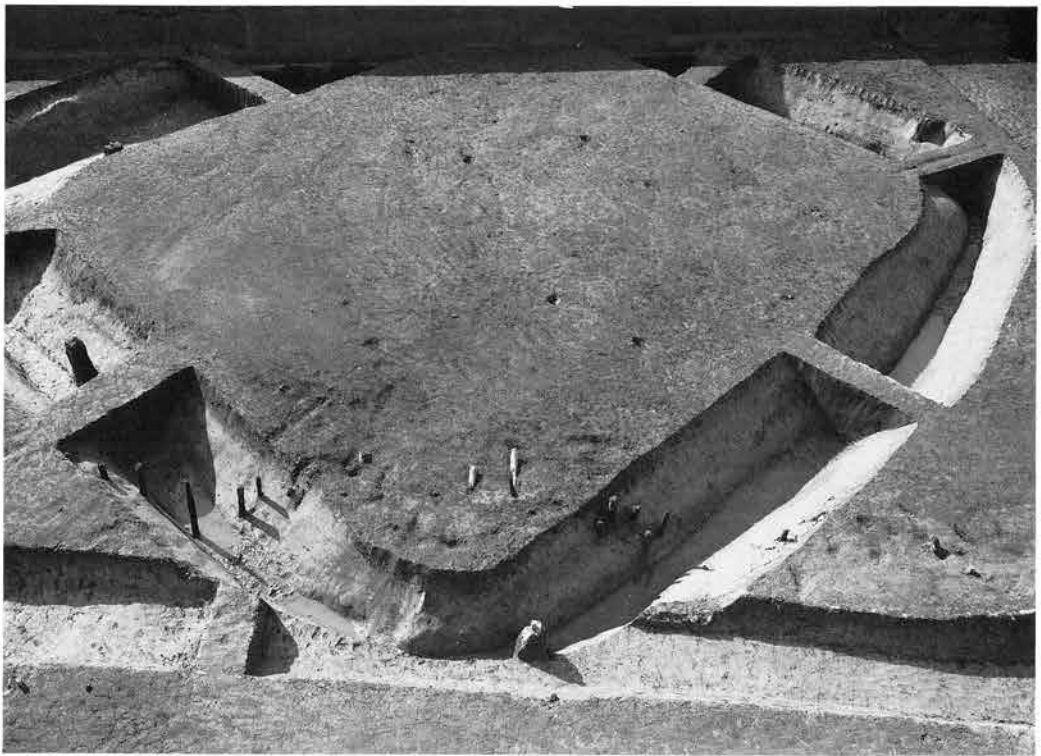
弥生時代ピット群（北から）



弥生時代ピット群（南から）



自然流路 3・4 (東から)



S X 3 (北から)



S X 1 遺物出土状況



S X 1 遺物出土状況



S D11遠景 (東から)



S D11土層断面



自然流路 5 遺物出土状況



自然流路 5 遺物出土状況



調査区全景(東から)



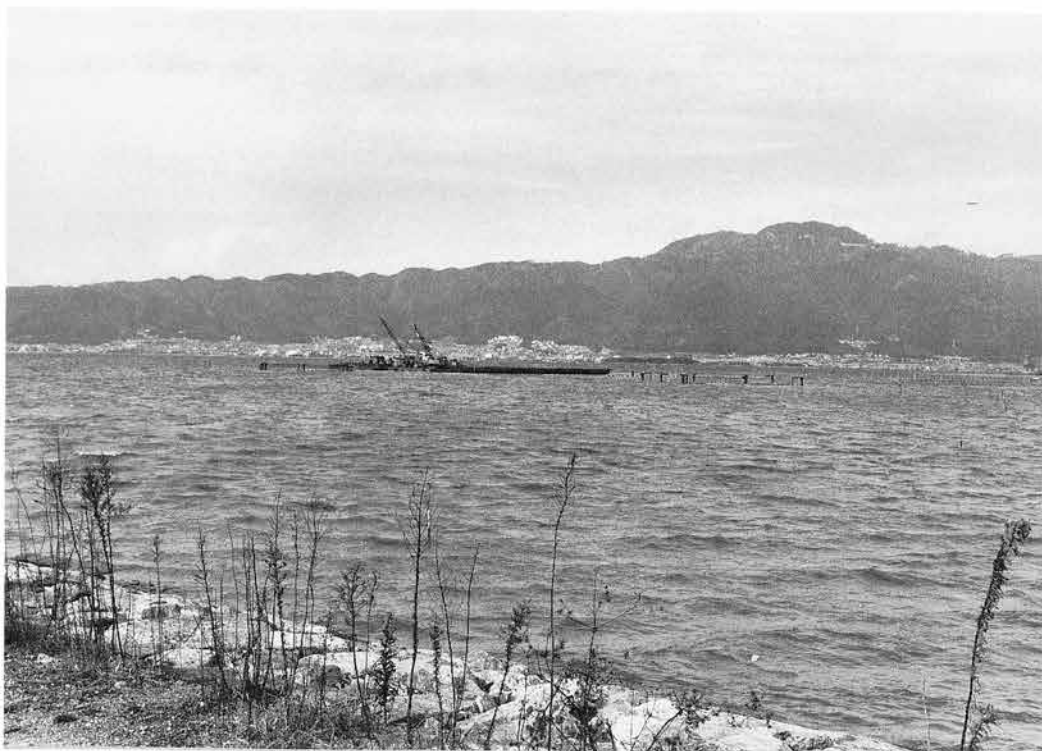
調査状況(東から)



調査区全景(南から)



トレンチ断面状況



調査地遠景（東より）



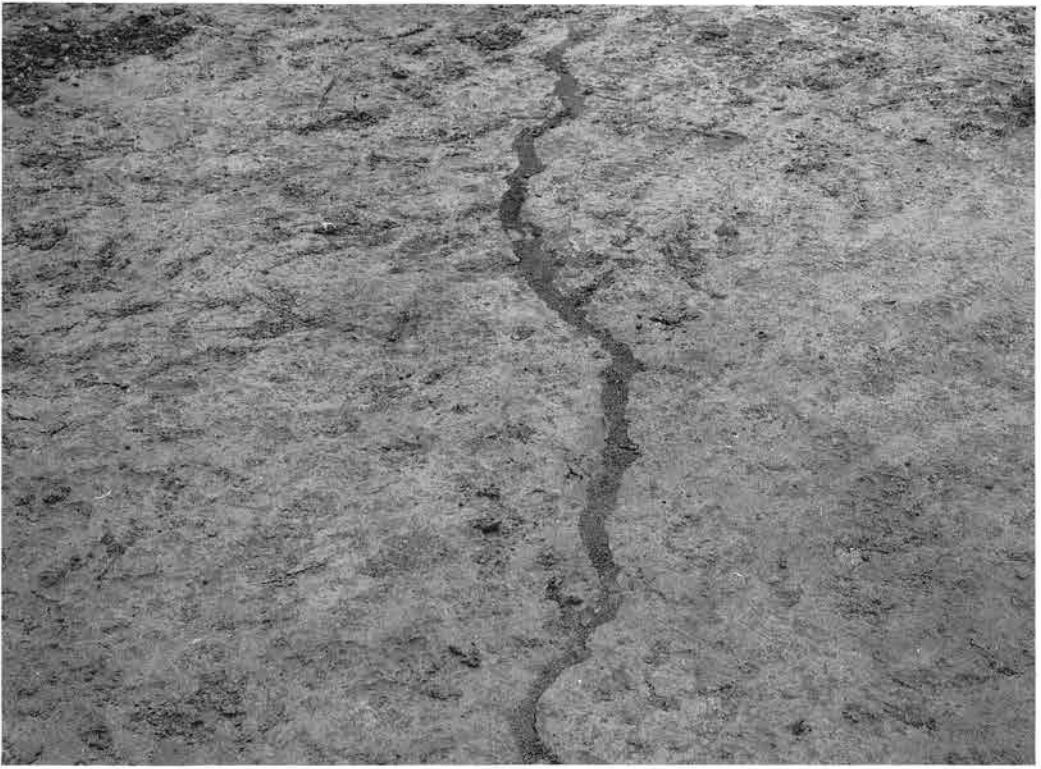
表土除去状況（東より）



下層埋没林（東から）



下層埋没林（東から）



地震痕（亀裂）



地震痕（噴砂断面）



樹木痕出土近景



樹木痕出土状況



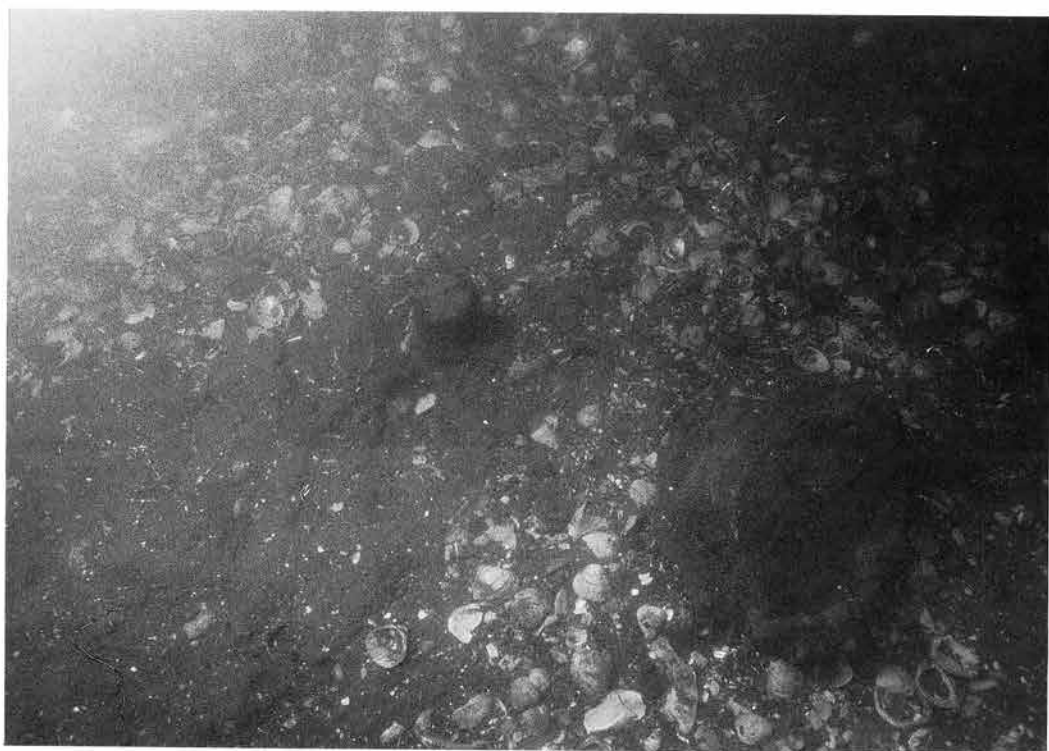
調査地全景



P-1 掘削状況



調査風景



貝層



上層部掘削作業風景



上層部掘削作業風景



中層部完了近景



下層部完了近景



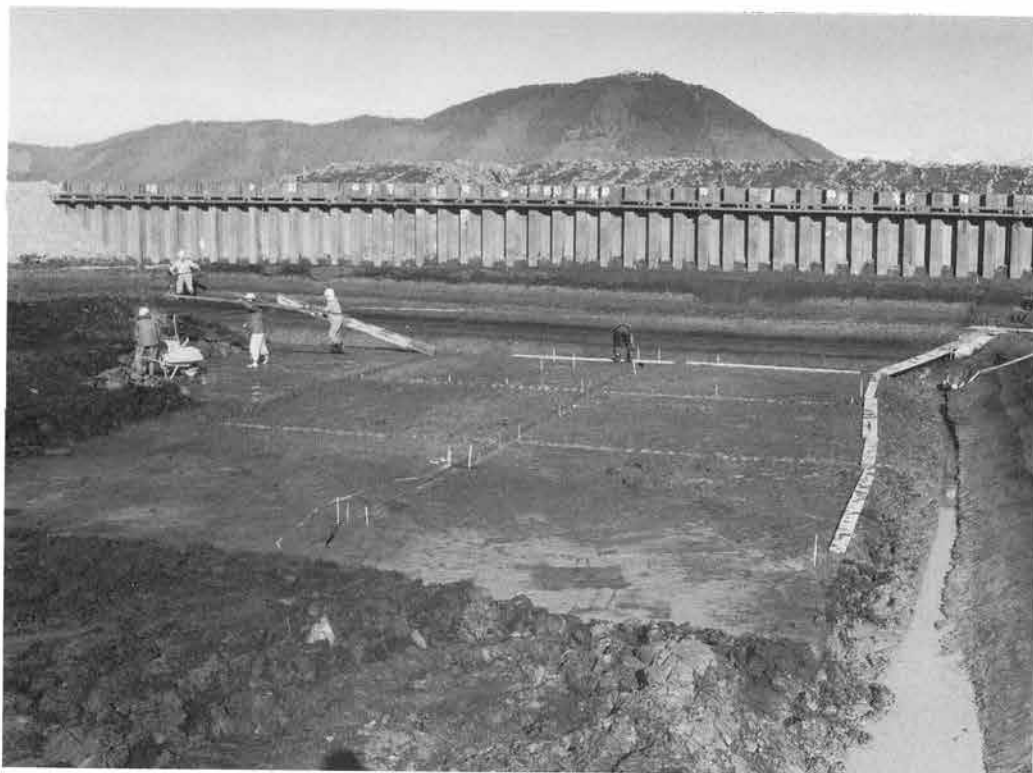
湖底面 (調査前)



中層部遺物出土状況



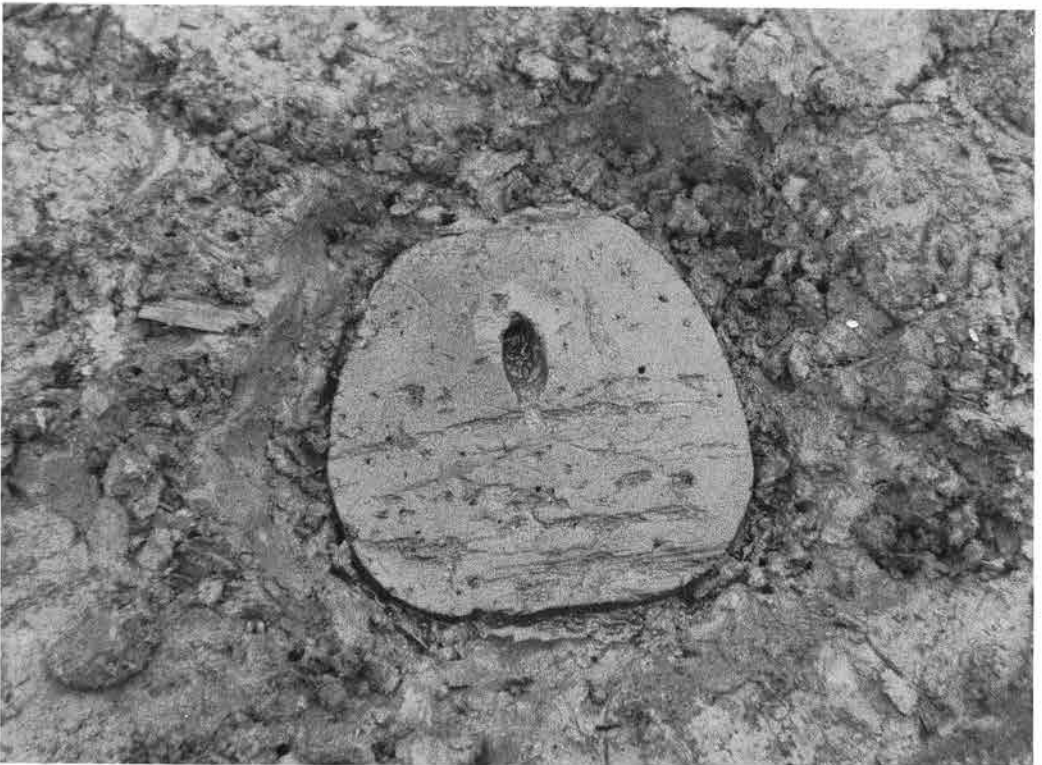
S D 2 検出状況



下層部完了風景



S D 2 出土木製品



S D 2 出土木製品

昭和63年3月

文化財調査出土遺物仮収納保管業務
昭和62年度発掘調査概要

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1
電話 0775-24-1121 (内線2536)

(財)滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2
電話 0775-48-9781

印刷・製本 株式会社 図書同朋舎

京都市下京区中堂寺鍵田町2
電話 075-361-9121